
太陽の子

南 嵩三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の子

【Zコード】

Z3394E

【作者名】

南歳三

【あらすじ】

ネット上で勇気を与えてくれた人を主人公が捜し求めて、まったく知らない麻雀プロの団体に所属し、生きていくストーリーの麻雀小説です。取材協力、最高位戦、京杜なおプロ

第1話 合格（前書き）

この物語はフィクションで実在する人物・団体とは無関係です。

第1話 合格

私にとつておじさまは太陽で私はその太陽の子供です。

その日はいつも通りの朝だった。一通の郵便物が届くまでは。

「小林さーん、速達です。」

その郵便配達員の声を聞いて香奈は仕方なく玄関に向かった。人付き合いが苦手な香奈には郵便配達員の相手すら苦痛だが、他に誰も居ない以上玄関に行くしかなかつた。

玄関に着き、恐る恐るドアを開ける。そこには郵便配達員が一人立つていた。

「小林さんですね、銀河プロ麻雀連合からの郵便物です。」

香奈は黙つて郵便物を受け取り、郵便配達員はそのまま帰つていつた。

玄関を閉め、香奈はその郵便物を開けた。

不合格通知にしては中身が多過ぎると、香奈は違和感を感じながら一枚の書類を読んだ。

女流合格

香奈はその意味を理解できなかつたが合格はわかつたのでうれしくて涙が出てきた。

やつとおじさまのそばに行へことが出来る

香奈はプロ試験に合格したことよりそのことの方が何倍も何十倍も
うれしかった。

第2話 合格の意味

ただ合格通知を貰つたとはいえ香奈はまだプロではなかつた。これから色々な研修を受けて始めてプロになれるのである。そして香奈は正式な合格ではなく女流合格だから本当のプロでは無かつた。

その女流合格とは正式な合格と違い、団体が行う普通のリーグ戦には参加できず、女流リーグという女性だけのリーグ戦にしか参加できない合格である。だから香奈が普通のリーグ戦に参加するにはまた半年後のプロテストを受けて正式に合格しなければならない。

むしろ面接では緊張してうまくしゃべれず、その後の実技試験も散々だつた香奈が合格になつたこと自体不思議と香奈は考えるべきだつた。

しかし香奈には合格という文字しか見えてなく、プロとは何かまったくわかつてない香奈がそんなことを疑問に思つはずか無かつた。

そんな香奈だが合格の通知を貰つた後も一人で麻雀の練習を続けていた。友達は居ないし家族は麻雀を理解してくれないから香奈は一人で牌を積んで練習するしかなかつた。

実戦はプロテストの時が初めてだという香奈だが、テストの時に実戦を体験出来たおかげでより実戦に近い形で練習することが出来た。香奈は頑張つて自分の雄姿をおじさまに觀せられる、そう思い一心不乱に練習に励んだ。

こうしてこれから始まる研修が香奈にとって苦痛になることも露知らず、香奈は研修の日におじさまに逢えると勝手に思い込んで研修

の日が早く来ないかと待ち望んでいた。

第3話 研修初日

研修初日の朝、香奈はおじさまに逢えると信じて研修会場に向かっていた。研修に必要なものは全部確認して揃え、場所は実技試験をした場所だから行くにあたって何の不安も無かつた。

歩きながら香奈はおじさまに逢えたら何をしゃべろうか、おじさまに一生懸命練習した結果を見せようと楽しく思いに更けていた。そんな感じで昨日から寝不足になるほど浮かれていた。

ただおじさまという人物はネットで知つただけで、香奈はネットですら恥ずかしくておじさまと会話が出来なかつた。

その上、おじさまは香奈の名前も知らないし、香奈がプロテストに受かつたことも知らず、そして香奈の存在すら知らなかつた。

そのことに香奈はまったく気付かずに幻想に浸りながら会場に向かつて行つた。

研修会場はプロテストの実技試験で使われた場所と同じだから、香奈は場所も中身もわかつていて何の不安も無く研修会場に辿り着くことが出来た。

中に入ると銀河プロ麻雀連合のプロ達が研修の準備で慌ただしく動き回っていた。香奈はどうすればいいかわからず、恥ずかしくて誰にも声を掛けられず立往生した。

「ちゅうと、ちゅうと。」

香奈は後ろから聞こえてくる声にあわてて反応して後ろを振り向いた。

「そんなどこにおったら邪魔になるから早くひっかきな。」

そう言われた香奈は言われる場所に移動した。そこは待合室でそこには香奈と香奈を呼び込んだもう一人の女性しか居なかつた。

第4話 研修の始まり

「私は桜井里香って言つんだ。あんたは？」

その桜井の質問に香奈は緊張して

「わ、私は・・・小林、・・・。」

と口籠もつて満足に名前も言えなかつた。

「あんた何緊張してるのよ、プロは人前に出る商売なんだからもつとしつかりしなさいよ。」

と桜井は香奈をたしなめた。しかし香奈はそつ言われてもすぐに直るわけでもなく

「は、はい。」

と小声で返事をするのがやつとだつた。

「あんた女流合格？」

と桜井は香奈に質問した。香奈はまた小声で

「は、はい。」

と返事した。

「そりだよね、あなたが正規合格だつたら落ちた人達は立場無いわ

よね。ちなみに私は正規合格よ。」

と桜井は香奈に勝ち誇つたように言った。香奈は正規合格という言葉を初めて知り、女流合格の意味がわからず不安になつた。そして女流合格＝補欠のように思えて今までの浮かれた気分が吹き飛んでしまつた。

そんな中、他の合格者達も研修会場に入つてきた。その中に交じつて教育係の女性がさつそつと研修会場に現われた。

「キョウカや！」

他の合格者がそう言った。それに反応して香奈はキョウカの方を見る。まぎれもなくあのタレントのキョウカである。

テレビでしか見たことが無いタレントのキョウカを見れて香奈は心中で感激していた。しかし香奈はその程度の知識しかないから、キョウカが麻雀プロでここには教育として来ることをまったく知らなかつた。

第5話 自己紹介

「プロテストの合格者のみなさん集まってください。」

その教育係の号令で合格者達は指示された場所に集まりました。香奈もその場に行つて横一列に並ばされた。

田の前を見るとあのキョウカが教育係側の方に立つていた。

(キョウカさんに教育される)

香奈はそう思い怯え緊張し始めた。さらにその香奈に追い打ちを掛けるように教育係が

「まずはみなさん自己紹介をしてください。」

と言つた。教育係側からしてみれば誰が誰かわからないから、合格者達に自己紹介をさせるのは当たり前の話だが、自閉症の香奈にはその自己紹介で名前を言つことすら恐怖で精神的に苦痛であった。

次々と自己紹介がされていき、里香も明るく自己紹介をした。そつそつと香奈の番になつた。

「い、い、小林香奈といいます。」

自閉症の香奈にはこれが限度で、これでも香奈は心臓が止まる程緊張しても「これ以上何も言えなかつた。教育係達はさすがに香奈にもっと語るよつて言つて」とが出来ず、仕方なく次の人に順番を回した。

(何でこんなに入れるとよ)

キヨウカは緊張してうまくしゃべれない香奈を見て呆れてしまった。過去に点数計算の出来ない女子まで合格させていた団体側に不満を持っていたキヨウカだが、今回の香奈には思わず不満が爆発しそうになつた。

そして全員の自己紹介が終わり教育係から今回の研修の説明が始まつた。その間も香奈は先程の緊張が解けず、話に集中出来ていなかつた。

第6話 キヨウカの不満

そしてキヨウカが話す番になつた。キヨウカはその場に居る合格者全員を見渡し不満をもつたまま

「みなさんがこれからプロを名乗る以上、もう普段のような振る舞いは出来ません。あなた達の恥は私達の恥です。今日はあなた達が恥をかかないよう私達が恥をかかないようマナー研修をします、以上。」

と合格者達にきつくるべく最後に香奈を見た。香奈は先程のショックでうつむいたままキヨウカの話を聞いていた。

実は正確には聞き流していたで、香奈はおじさまは努力しない人はきらいだから、自己紹介を満足に出来なかつた香奈のことを嫌いになつたのではと勝手に思い込み落ち込んでいた。

そんな馬の耳に念仏みたいに、今の話を聞いてなさそうな香奈にキヨウカは今にも怒りが爆発しそうだつた。

しかしキヨウカは大人らしく冷静に心を落ち着かせようとした。なぜなら麻雀のプロ団体は民間企業と違つてサークル的な仕組みで、参加者は給料を貰つどころか逆に会費を払つて居る状態である。

だから厳しくし過ぎてせつかくの合格者がやめたら団体が困る」とになるので、キヨウカはあえて言いたいことを言わずに冷静に我慢した。

例え民間企業みたいに戦力として使えるように教育しなくてもいい、

とりあえず体裁さえ整つてればいいわとキョウ力は開き直り話を終えた。

そんな風にキョウ力が香奈に対して怒っていたことをまったく露知らず、香奈はこれから香奈にとっての地獄の研修に向かえるのだった。

第7話 マナー研修（1）

「それでは全員、卓に着いてください。」

その教育係の命令で合格者改め研修生達は卓に着いた。テストの時は公平さを期すために各自座る位置が決められていたが、今回は順位など関係なくどこに座ろうと自由だった。

里香は戦略的に香奈と一緒にになった方が香奈を引き立て役に使えると思い、香奈が座る卓に同じく座ろうと待ち構えた。しかし香奈はどうぞくわくおひおひとして席を選べなかつた。

香奈が席を選ばずとしないから里香は呆れて

「ま、早くこいつに座りなさいよ。」

と香奈に言つて香奈を半端強制的に着席させ自分も同じ卓に座つた。香奈は緊張したまま相変わらずおどおどしていた。そんな香奈を見ながら里香は大丈夫なの？と戦略を忘れて心の中で香奈を心配していた。

研修生が四人ずつ全員卓に着いたのを見て教育係のリーダーが

「それではマナー研修を始めたいと思います。まずは親決めを始めてください。」

と言つた。その命令で研修生達は全員親を決めるために東西南北を牌山から探し出しセットした。香奈の卓は香奈も親決めの準備に参加しようとしたけど、香奈の動きが鈍いため、他の三人で準備をし

て香奈は何も出来なかつた。

四人のうちの一人がサイコロを振り、セットした牌を開いて場所を決めていった。香奈が掴んだ牌は西で東は里香が掴んだ。その卓は里香が親で始まり香奈は西家になつた。

そして里香が座つた場所から右回りに南、西、北と座り準備が整つた。香奈は少しほは落ち着きを取り戻して來たがまだ心は不安でいっぱいだつた。

第8話 マナー研修（2）

里香がサイコロを振り、香奈の卓の研修対局が始まった。

当たり前のようすに早く配牌を取る三人に対して香奈は相変わらず動きが遅くぎこちなかつた。家で練習してきたとはいえ動きがあまりにも遅かつた。だからキヨウカはすぐに香奈が初心者だと見抜いてしまつた。

（なんでこんな初心者がプロテストに合格するのよ。いつたい何の為にテストしたのよ！）

キヨウカは怒れるまま香奈の後ろに貼りついて香奈を睨み付けた。しかし香奈はそんなキヨウカの行動にまったく気付かず、ぎこちない動きのまま自摸つては切るを繰り返していた。

逆に香奈の対面に座る里香は、キヨウカが注目してくれると思い少しでも評価してもらおうと動作を綺麗に振る舞つた。そして

「リーチ。」

と言つて牌を横に曲げ千点棒を卓上に置いた。その里香の親リーチに対して他の二人は警戒して慎重に切る牌を選んだ。しかし香奈は何事もなかつたように手牌から不要な牌を選んで切つた。

何故なら香奈は麻雀を各自の点棒を取り合い、順位を競い合つゲームだとまったくわかつていなかつた。だから香奈はここで里香に振込んでも何も感じなかつた。

だが麻雀は四人でやるゲームである。一人の愚かな行為でトップが決まってしまえば他の二人は当然面白くないのである。

いつも一人で練習している香奈には順位などあつて無いようなものであり、まして順位を意識して打つなんて香奈には最初から無理だった。

そんなことを知らないキョウカはこの香奈の無神経な行為にますます腹が立っていた。

第9話 マナー研修（3）

しかし、鬼神の「じとくキョウカ」は香奈の手牌を睨み付けるだけでそれ以上のことをしなかつた。なぜなら香奈の天賦の才が自然にキョウカの心を引き付けていたからだつた。

しばらくして香奈もテンパイした。しかし香奈はリーチを掛けないでダマのままだつた。それをキョウカは疑問に思いながらも黙つて観ていた。

やつこひじこむつに上家が香奈の当たり牌を切つた。としさに香奈はロンと言おつとしたが声が出ない。その香奈の行動に他の三人が注目し、香奈はますます緊張してしまつた。

香奈は上家があわてて牌にロンと言えず、おどおどして和了のをあきらめて自摸りうと山に手を伸ばした。

「ちよっとー、それ当たりでしょー何で和了うないのよ？」

キョウカはあわてて香奈を止めるように言つた。香奈は突然のことで頭がパニックになり、何一つ答えられなかつた。

そんな香奈に追い打ちを掛けるようにキョウカは

「あんたこの手で何でリーチを掛けないのよ？・待ちはいいし最高形なんだからリーチしなさいよー。」

とさりげに香奈を問い合わせた。追い詰められて香奈は何も考えずに咄嗟に

「や、役があるから。」

と答えた。香奈がやってきた一人麻雀は点数の上下など関係なくた
だ和了れればよかつた。リーチは役が無い時に使う手段だった。

その香奈の返答にキヨウカは呆れて力が抜けてしまった。それでも
キヨウカは香奈に

「それはわかつたわ、じゃあ何で和了らなかつたのよ？」

と香奈に問い合わせした。

第10話 マナー研修（4）

呆れるキョウウカを見て香奈はますます戸惑い、脅え苦しんで言葉が出て来なかつた。そんな香奈にキョウウカは

「それで何で今、和アーニッシュなことなの?」

と冷たく問い合わせた。香奈はおどおどした口調で

「口、口、口、口、ロンと言えませんでした。」

と申し訳なさそうに言つた。そのあまりにもプロとは呼べなぞ過ぎる初心者レベルの香奈についてキョウウカの怒りが爆発した。

「あんたそんなレベルで何でプロテストなんか受けるのよー。私達プロを馬鹿にしてるの? こんなレベルでもプロになれる、実際合格してるのでだからセリフ思えて仕方ないわね。」

とキョウウカは香奈に強く言い放つた。香奈はまつたくそんな気は無く誤解ですとキョウウカに反論したが、香奈はキョウウカの偉い剣幕に押されて何も言えなかつた。

「 もう、あんたいいわ。あつちについて発声の練習してなさい!」

そうキョウウカは冷たく香奈に言い放つた。香奈はそんなのけ者扱いが嫌でキョウウカに何か言おうとしたが言葉が出ない、キョウウカはさら

「あんたが居たら他の三人が迷惑なのよ。早くどこへかよつだい。」

と香奈に言った。そこまで言われたらさすがに香奈も場所を開ける
しかなく、香奈は仕方なく席を立つた。そして香奈は淋しそうに窓
際に移動した。

「……代わりに田中君入つて。」

キヨウカは香奈が抜けた分の人数合わせで教育係の田中を席に座ら
せることにした。こうして香奈は一度と味わいたくなかったつま
じきという屈辱を味わされた。

第1-1話 マナー研修（5）

香奈は悲しくて悲しくて涙が出てきた。おじさまが所属する団体で、香奈を受け入れてくれた夢のような団体だと思つていたのにこの仕打ちである。香奈は夢を碎かれ絶望で意氣消沈した。

そんな光景を見て教育係の男一人がキョウウカの新人いじめが始まつたどこそこ陰口を言つていた。

キョウウカは香奈のことはもうどうでもよく、その日の研修が終わりしだい香奈にプロをやめてもらひつつもりだつた。

香奈は少しずつ落ち着きを取り戻し、もう何の未練も無この場から出でこいつと思つた。

しかし、香奈はおじさまと同卓するよつたことが有つたとき、今みたにロソンと言えない駄目な子と思われたくない！そう思い香奈は声こなせないが、心中でロソンと言つ練習を始めた。

心中でも香奈には苦痛の行為だつた。だけど香奈はおじさまに頑張れば出来る子と讃められたくて時間を忘れて練習した。

マナー研修の一回が終わり、研修生全員が集められ香奈はその時になつてやつと呼ばれた。

みんなで終了の挨拶をしてそひで解散することになつた。香奈はその時キョウウカに呼ばれた。

「あなた、何が目的でプロにならうとしたの？」

とキヨウカが香奈に質問した。

「わ、私は、おじさまに会いたくて、テ、テストを受けたら、合格したのでこ、こにきました。」

と香奈は緊張しておじおじした口調でキヨウカの質問に答えた。それを聞いてキヨウカは

「あなた男田さんでプロになつたの？」

と激しく怒りだした。

第1-2話 マナー研修（6）

香奈の返答は香奈からみれば普通で何も問題無かつた。しかしキヨウ力からみれば

「あんた、男田当代でプロになつたのー？ふざけないでよ、プロ団体は男と逢引をする場所じゃないわよー！」

と激しく香奈に怒りをぶつけるほど不快な物だつた。その激しい怒りに香奈はキヨウ力が何故怒つてるのか理解出来なくて困惑した。そして何も言えずにおどおどしているとキヨウ力が香奈を見て呆れながら馬鹿にした態度で

「あなた騙されてるのよ。ビーナスくじくでもない男なんでしょうね、おじさまって人は。」

とおじさまをけなした。それを聞いて香奈は怒りが頂点に達し
「おじさまはそんな人じやないですーーーー！」

と絶叫して会場から走つて出でていった。それを見てキヨウ力は困惑し
(おじさまって親戚か何かな？もつわけわかんないわよ。)

と思いつばにいた教育係の一人に

「試験官は何であんなの合格させるのよ？相手する方の身になつて
よね。」

と愚痴つた。それを聞いた教育係はキョウウカに

「何か事務局長が筆記の成績が良かつたから努力を認めてあげましょうと押したみたいですよ。」

と説明した。それを聞いてキョウウカは

（努力、努力したぐらいでなれるなら誰だつてプロよ。実際、ちょっと努力しただけでプロになつたなんちゃつてプロばかりよ。）

と今の団体の現状を苦々しく思つた。先輩として新人の面倒を見るのが義務だと思ってたキョウウカだが、なんだかんだでもう新人の面倒を見る気は失せていた。

第1-3話 初めて気持ちを伝える

走って研修会場を出た香奈はさすがに疲れて歩きだした。

（もうあんないとこに居たくないー私はともかくおじさままでひどく
いふなんて）

大人に成り切れない香奈にとつて研修会場は一秒も居たくない場所になってしまった。それで珍しく香奈は走って会場を出でいった。

そして香奈は歩きながら家に向かった。他に行きたいところも無く、するにとも無くただ願うのは家に帰ることと安心できる居場所に居たいことこのことだけだった。

実は香奈は好き好んで家に閉じ籠もるわけではない。やりたいことはあるにはある、ただ傷つくのが怖いから家に閉じ籠もあるのである。

ゆえに傷ついた香奈が逃げて家に向かつたのは必然の行為だった。

家に辿り着き部屋に戻った香奈は思いつきり泣いた。新しい居場所を求めて麻雀のプロ団体の試験を受けた香奈、しかしそこに香奈の居場所は無く、香奈はただ泣くしかなかつた。

そして香奈の心の居場所、おじさまの運営するHP「希望の丘」にアクセスしようとPCを立ち上げた。

画面は希望の丘を表示した。まだ更新はされてなくて香奈はおじさまから新しい励ましの言葉を得ることが出来ず心が苦しくなつた。

そしてその心の苦しみを解き放つよつて掲示板に

私にとっておじさまは太陽であり、私は太陽の子供です。

と夢中になつて書き込んだ。初めて香奈は掲示板に書き込み、初めておじさまに気持ちを伝えた。

そして香奈は力尽きてパソコンの電源を切つた。

第14話 キョウウカの憂鬱

おじやまにネットを通して気持ちを伝えた後、香奈はいつもの引きこもりの生活に戻った。しかし、今まで続けてきた麻雀の練習はもうやめようとしなかった。

その頃、キョウウカは自分自身の経営する雀荘「サンフラワー」に顔を出して、従業員にあれこれと指示を出して家に帰った。

家に着いてキョウウカは一休みした。今のご時世、雀荘経営は難しい状態だった。キョウウカの店は女子プロ多数常勤が謳い文句だったが、女子プロが増えれば他者の店にも女子プロが常勤し始めた。

おかげでキョウウカの店の優位性は無くなり売り上げは落ちた。さらには給料の高いところへと女子プロ達は移動するのでキョウウカの店は常勤多数どころか逆に慢性的な女子プロ不足になつた。

その女子プロ不足でさらに客足を落とし始めたのでキョウウカは毎日のように店に出て営業のてこ入れをしなければならず、精神的負担も大きかつた。

だから今日みたいに新人の指導係などする暇があつたら、店に出て売り上げを伸ばしたい気持ちである。そんな気持ちで今日のことを振り返り、香奈のことを思い出して怒つて事務局長に電話をし始めた。

「はい、斎藤です。」

「水野です、事務局長が合格させた子ですがあんな素人を何で合格にしたのですか？」

「彼女ですか、彼女はかなり筆記試験が良かつたから他の人達よりも努力する子なんですよ。それで私がお願ひして合格にしました。だから僕の顔を立ててもう少し面倒みてもらえないでしょ？」「

「そりなんですか、わかりました、もう少し面倒みます。」

「面倒掛けで」「めんね。それじゃまた。」

「はい、お疲れさまでした。」

キョウカは電話を切り事務局長との会話を終わらせた。

第15話 おじさまの願い

キヨウカは努力が理由ならばと事務局長に抗議をしないことにした。事務局長がいい加減な理由で香奈を合格にしてくれるようになんだけではないとわかつたので、もつ抗議する気が無かつた。

それにあの状態なら香奈はもう研修に出て来ないだろつと思い、香奈をやめさせる行動をしなくていいとキヨウカは判断していた。

一方、香奈が無気力になつて普段の生活に戻つている間に『希望の丘』で香奈の書き込みに対して他の人達が反発していた。

香奈の文章が、香奈がおじさまの子供と香奈がおじさまを独占または特別扱いしてもらおうと考へてると他の人達がそう受け止めてしまつたからだつた。

そしてなまいき、ずうずうしいと各自の意見が並び、香奈に対する抗議文が掲示板に並んで書かれた。

事態を重く見たおじさまがあわてて

僕にとつてみなさんは僕の大事な子供達です。そしてみなさんにとつて希望を与えてくれる太陽を田指してます。

香奈さんはうまく表現出来なかつただけでみんなが考へてるようなことは一つも思つていません。

僕は、こんな風にうまく表現出来なくて、誤解で苦しく悔しく悲しい思いをしている子達を助けたいし助けて欲しいです。

どうか彼女を温かく見守つて、彼女がつまく気持ちを伝えられるように助けてあげてください。

と掲示板に書き込んだ。この後、その書き込みに賛同、感謝の書き込みが続いた。それでも誰も香奈を責めようとはしなかった。

第1-6話 おじれもくの熱い気持ち

一夜開けて、香奈は昨日の疲れを少し残したまま旦が覚めた。香奈は一コードだから時間に急かされる」ともなく、マイペースで日常の活動を始めようとしていた。

そして香奈は自分自身の書き込みに「おじさまがどう返答してくれたか気になり、同じのスイッチを押して希望の丘の掲示板を見た。

掲示板のいろんな人の書き込みを見てやつとおじさまのコメントを見つけた。この文章は誰のことを探してるか香奈はわからず、さりに遡った。

そこで香奈の後の書き込みを見て香奈はショックを受けた。その香奈を非難するコメントを見て

（私はそんな風に思つたことない、おじさまに温かい言葉を掛けて欲しいだけなのに）

香奈は激しく動搖し次々と他の者のコメントを読んだ。そしておじさまのコメントに辿り着いてやつとおじさまのコメントの意味がわかつた。

意味がわかり、香奈はついして涙が出てきた。そして画面に向かって

「ありがとうございます、私は一セント一コでもおじさまの傍に居たいし、一分一秒でもおじさまと一緒に居たいです！」

と涙を流して熱く語った。しかし香奈は今回はそう書を込む勇気は無く何もコメントを返さなかつた。

香奈はすぐにでも麻雀の練習を始めようとしたが、問題がある」とに気付いた。キョウ力にあんな態度を取つた以上、もう銀河プロ麻雀連合に参加できそうに無かつた。

こうして香奈は後悔と憂鬱な気分でまた夢も希望の無い一コード生活に戻ることになった。

第17話 仲間扱い

毎過ぎに家の電話が鳴った。香奈は驚いて電話機の傍に行つた。そして家の者は居なかつたから渋々香奈が受話器を取つた。

「はい。」

「小林さんのお宅ですか?」

「はい。」

「私、銀河プロ麻雀連合の斎藤と申します。香奈さんは今居られですか?」

「わ、私は。」

「どうも香奈さん初めまして。私は、事務局長の斎藤と言います。香奈さん、今回の研修は難しかつたですか?」

「・・・」

「研修は最初はみんなうまく出来ないからどうしても教える方はいらっしゃったりしちゃいます。だけど時間掛ければ出来るようになるから一時的なことだと思って気にしないでください。」

「わ、私は、向いてないかもしれません。」

「だからみんな最初からうまくいきませんよ。向いてる向いて無いは研修が終わつてから判断すればいいじゃないですか?」

「せつからく合格したのに簡単にあきらめちゃ駄目ですよ。次の研修にも絶対来てください。あなたは私達にとつて大切な仲間なんですから。」

「はい、行きます。」

「お時間取つてごめんなさい。それじゃ研修会場で待つてますから。」

「はい。」

電話を切つた後、香奈はうれしくて涙が出てきた。あきらめていた

おじさまに逢うチャンスが出来たことと仲間扱いしてもらえたから
だった。

香奈は人付き合いが苦手で、他の人達と永遠に仲間にはなれないと思つていた。おじさまがグループを持っていても香奈は怖くて入れなかつただろう。

だから斎藤に仲間扱いされたことがものすごくうれしかつた。

第1-8話 香奈の悩み

香奈はまたプロ団体で頑張れるようになったから、今までやめていた麻雀の練習を復活した。

そして研修の時に厳しく言われた発声を香奈は出来るようにならうと必死に練習を始めた。香奈は人との対話が苦手なだけだから単なる発声なら臆することなく問題なかつた。

「ポン！」

相変わらず友達も居ない一人麻雀だけど、香奈は研修の時に体験した普通の対局を想像し、実戦的な発声練習を続けた。

いざ本番になればまた緊張して声が出せなくなるかもしれないが、練習に次ぐ練習で香奈は無意識に発声出来るようになれるだろう。

香奈はそこまで考えてなかつたが、おじさまに少しでも近付きたい、その一心で大きく声を出せるように練習し続けた。

こうして一回目の研修の日の朝が来た。研修の日を迎えて香奈はやはり緊張していた。おじさまが研修会場に来るとは限らないのに、心の中は来てくれると思い込み緊張していた。

緊張してあまり声が出せず、それが不安でますます精神が弱くなる悪循環であった。しかし香奈はおじさまに会いたいという気持ちで前に進み玄関を出た。

香奈は歩きながらおじさまに逢えるという気持ちと裏腹に1番難しい問題を危惧していた。その悩みはキヨウ力の存在であり、キヨウ力の気分次第では香奈は研修を受けれないかも知れなかつた。

香奈はおじさまのことを忘れ、事務局長の斎藤が香奈のことをキヨウ力から守ってくれるよう必死に願いながら研修会場まで歩いた。

第19話 痛恨のミス

研修会場は前回と同じ雀荘で香奈は震えながら恐る恐る雀荘のドアを開けた。

ドアを開けると前回と変わらない風景が香奈の目に飛び込んできた。ただ教育係が前回と違うからみんな香奈のことを普通の研修生と思い、誰も香奈を気にしなかった。

これ幸いと普通に香奈は前回と同じく待合席に行つた。そこには先に桜井里香が座っていた。里香は香奈を見て驚き香奈に

「あなたやめたんじゃないの？」

と聞いた。そんな失礼な質問に香奈は怒りつつも不安になり

「じ、事務局長さんが、また来てくださいました。」

と不安気に答えた。それを聞いて里香は「この団体は女なら誰でも採用する団体なんだ」と、半ば呆れた。

香奈が普通に待合席に座るのを見て里香は、香奈が何で麻雀プロになりたいのか不思議でならなかつた。それで香奈に

「あなた何で麻雀プロになつたの？」

と聞いた。その問いに香奈はおどおどしながら

「お、おじやまにあ、会つたくてなつました。」

と答えた。

「お、おじさま？誰？その人。」

里香はさらに問い合わせ質した。

「な、名前はわ、わからないけど麻雀のプロです。」

と香奈は答えた。名前もわからない人に会うためにプロになる香奈に呆れて

「それでこの団体所属なの？」

と質問した。

「え？？」

その質問に香奈は驚いた。驚く香奈に里香は

「プロ団体は他にもあるのだから、おじさまってこう人がここに居るとは限らないわよ。」

と言つて教えた。それを聞いて香奈はひくに調べもせずこの団体に入ったことを激しく後悔した。

第20話 香奈の回復

(「Jの団体がおじさまの所属する団体と仲が悪かつた」「どうしよう…」)

思わず香奈はやつれてしまって不安を増大させてしまった。そして香奈は里香に

「ほ、他の団体に移る」ことは可能ですか？」

と香奈が今から他の団体に移籍出来るが聞いてみた。そんな香奈から質問に里香は呆れて

「あなた、Jの団体に合格したのが奇蹟なくらいなのに他の団体つて、あんた他の団体も受かると思つてるの？」

と逆に香奈を聞いて詰めた。そう里香に言われ、香奈は確かにJの団体に移籍することをあきらめた。

しかし、Jの団体がおじさまの所属する団体と対立する限り、私はおじさまの敵になると香奈は勝手に思って込み深く落ち込んだ。

そんな香奈を見て里香は

「団体同士仲良くやつてんだからわざわざ他の団体に移る必要無いのじゃないの。」

と馬鹿なことを考へてる香奈をたしなめた。

(仲良くやつてる……私はおじさまの敵じゃないんだ)

やつ思い香奈は元気になつた。おじさまの団体で頑張つてると
こゝを見せられる、おじさまは頑張つての香奈を讃めてくれる、そ
う思つて香奈は幸せそうに田を輝かせた。

(何、この子)

そんな喜怒哀楽の激しい香奈を見て里香はただ呆れるだけだった。
そして前回と同じようにキョウカが到着し研修会場に入ってきた。
キョウカは周りを見渡し香奈に気付いた。

(やめたんじゃないの?)

キョウカは香奈が何でここに居るのと驚いた。

第21話 危険な振る舞い

キヨウカは香奈をじつすむか迷った。いつものキヨウカならすぐに香奈に引導を渡しているが、今回は香奈の面倒を斎藤に頼まれているから、簡単に引導を渡せなかつた。

しかし、香奈にはどう考えてもプロとしての活動は無理である。そのことをわからせてからやめさせた方がいいかもと思つた。よつてキヨウカは香奈を最後まで研修を受けさせて、それからやめさせることにした。

一方、香奈はキヨウカの考えなどまったくわからないまま、ただ必死に他の団体に移れるだけの実力を持つことだけ考えていた。

第一回目の研修が始まり、研修生たちは全員整列させられた。

研修の説明が始まり、最初は前回のおさらいから始めるとのことだつた。香奈は途中で外されたから当然内容がわからなかつた。

しかし、香奈の目的は他の団体でも合格出来るようにレベルアップすることで、こここの団体のプロになることでは無かつた。

こんな不真面目な考え方は当然問題だつた。おじさまが銀河プロ麻雀連合所属だつたら香奈のやつていることは逆効果である。

香奈は事務局長からの電話でこの団体をやめさせられないと安心しているが、不真面目な態度で研修を受けているのなら、事務局長もさすがに香奈を退会にしなければならない。

こんな感じで香奈はおじさまを追い求めるあまり、組織のマナーに違反して再び引きこもり生活に戻りそうになっていた。

そんな危険性を孕みながら研修一日目がスタートした。

第22話 緩慢な動作

研修一日目はまづは前回のおわりから始また。

香奈は途中で退席させられたから指導内容はほとんどわからなかつた。だから香奈はすべて他の人の真似をすることにして、研修を乗り切ることにした。

そして対局中の動作、マナーを教育係に見てもう一つ為に研修生全員が対局を開始した。

香奈は他者の動作を見よう見まねで実行しようと精神を集中して努力した。

その結果、自己動作ではなく真似だから、ただでさえ動きの遅い香奈はますます動きが遅くなつた。

そんな光景は嫌でもキョウウカの目に付く。キョウウカは呆れて香奈の傍に張り付いた。

香奈はキョウウカに見られてることを知らず、見よう見まねでの動作に終始した。その動きの緩慢さに対局者達はいらつきキョウウカもいられついた。

（努力の子ね。）

キョウウカは動きの遅い香奈にいらつきながらも香奈がきちんと発声するように成ったことを感心した。

ただキヨウカが感心しても他の対局者達は納得できない。声に出せないが目線で香奈と打てないとキヨウカに訴えた。

さすがにキヨウカも香奈に注意しないといけないと想い香奈に

「小林さん、もっと早く動けないの？」

と厳しく質問した。突然の質問に香奈はうろたえるだけで何もキヨウカに言えなかつた。

香奈は合格点を貰えると思つた動作が否定されたと思い、心が動搖した。心の支えを失つた香奈は当然キヨウカに何も言い返されなかつた。

そんな香奈の態度にキヨウカはただ呆れるだけだつた。

第23話 点数計算の研修

本来なら香奈はまた退席させられ、一人で練習になるところだが、今日は退席させられなかつた。

「小林さん、あなた何も考えずにただ早くなるよつて打ちなさい。これが課題よ。」

トキヨウカは香奈に指示した。さうにトキヨウカは他の研修生達にも「あなた達も今は結果なんか関係ないからきれいに打てるよう練習しなさい。」

と指示した。当然、誰もトキヨウカに逆らえないから全員言われた通りにやるしかなかつた。

そして香奈は指摘を受け入れれば他団体の試験に合格しやすくなるおじさまのそばに行きやすくなると考へ、喜んで練習した。

こうしてマナー研修が終了し、今度は点数計算の研修になつた。

点数の計算方法の講義が行われ、研修生達が理解できたか確認するために数々の問題が出され、指された者達が次々と答えていった。

「小林さん、これは何点?」

突然ヨークが香奈に質問した。その問いに香奈は

「よ・・・4400点です。」

といつものように皿身無さそつて答えた。キョウカは次々と香奈に質問した。それに対しても香奈はすべて正解の点数を答えた。

（点数計算は出来るのね）

そうキョウカは思い香奈を見直した。香奈はプロテストに合格するために点数計算を必死に勉強していたから、無事今回も全問正解になつた。

しかし、田の前の牌を使って110符2ハンを作れと言われたら、いつもの動きの遅さから他者に先に牌を取られ、作ろうにも必要な牌がもう無くて出来ずで終了した。

第24話 キョウウカの雀荘に就職する」と

別に実戦で牌を集めて 符 ハンを作るところゲームはやらないから、この場で出来なくて済むこととなかった。

しかし、香奈からしてみればこの問題で他者に負ける テストに不合格 おじさまの元に行けないになるから、思わずショックで落ち込んでしまった。

そんな香奈を見て、キョウウカは香奈の動きが遅すぎるの経験不足が原因だと思い、あることを考え実行しようとしていた。

一回目の研修が終了し、研修生たちが少しずつ帰りだした。ここでも香奈は鈍臭く帰るのが遅れていた。

「小林さんちよつと…」

そう言ってキョウウカは香奈を呼び止めた。香奈は驚きながらもヨーカの所に向かつた。そしてキョウウカの前に立つた。

「あなた雀荘で働いてみない？」

とキョウウカは香奈に質問した。突然のことで香奈はどう返事をしていいかわからず戸惑つた。香奈から返事が来ない事を確認してヨーカは

「あなた、今ままだプロになれないわよ。だから私の店に来て練習しなさい。どうせ家に居たつてまともに練習出来ないのだから、プロになりたいなら私の店で働きなさい。」

と香奈を自分の雀荘に誘った。それを聞いて香奈はプロになれる実力が付く おじさまに逢えるだからキョウカの申し出をすぐ受け入れた。

「じゃあ決まりね。場所は・・・。」

とキョウカは紙に場所と電話番号を書いて香奈に渡した。香奈はおじさまに早く逢えるようになりたい、そう思い紙に書かれた場所を明口尋ねることにした。

ただ香奈は雀荘勤務のことはまったく知らず、研修の延長みたいな気持ちで考えていた。

第25話 サンフラワー

次の日の朝、香奈はうれしそうに家を出た。雀荘で働くことによつて憧れのおじさまに近付けると思えば、雀荘で働くことは苦になるどころか幸せになる一歩である。

と言つよりも香奈は雀荘の仕事がどんなものかまったくわかつてなかつた。だから香奈は雀荘勤務を苦に思つがなかつた。

電車を降りて新宿駅から歩いて5分、地図に書かれた雑居ビルの3階にキヨウカの店の『サンフラワー』があつた。

香奈はビルのエレベーターに乗り3階で降りた。店の入り口の壁にはキヨウカのポスターが貼つてある。それを見て香奈は無事キヨウカの店に来れたと確信してほつとした。

ただキヨウカの雀荘は初めてなので、香奈は緊張しながらドアをゆっくり開けた。

「いらっしゃいませ。」

店員と目が合つと店員がそう挨拶してきた。店内はキヨウカの趣味で、壁は白く装飾品が綺麗に飾つてあつた。

「初めてですか？」

店員はそつ香奈に聞いてきた。香奈は静かにつなずいた。

「それならルール説明しますね。ここにお名前とじい住所をお願いし

ます。」

店員はそう言って香奈に用紙に名前と住所を書くように求めた。それで香奈は用紙に名前と住所を書き出した。名前と住所を書き終えると店員はルール説明を始めた。

サンフランキーはフリー雀荘だから団体とはルールは少し違つてた。

香奈はフリー雀荘の知識が無く、フリー雀荘の用語の意味がまったくわからなかつたが、怖くて質問出来ないから、ただ黙つて説明を聞くだけだった。

店員がルールとマナーを一通り説明し終えると

「何か質問等はありますか?」

と香奈に聞いてきた。香奈は質問と「よりも、マナー 자체まともに理解してないからもつて一度詳しく説明して欲しかった。

しかし香奈は怖くてとてもそんなことは言えないから

「な、な、無いです。」

とそう緊張しながら答えた。

「当店はフリードリンクになつてしましてお飲物は何にいたしましょうか?」

そちらで店員は香奈に何が飲みたいか聞いてきた。香奈はフリードリンクの意味（飲み物代無料）がわからないし、何があるのかもわからない、それで思わず

「み、水をください。」

と緊張しながら言った。それを聞いて店員が

「じゃ、お水を持って来ますね。」

と言つて香奈から離れた。何事も初体験の香奈は密としてゆつたり

と構えることが出来ず、ただ緊張して震えるだけだった。

それに香奈は客じゃなくヨーカに言われてここに働きに来たと店員に伝えるだけでいいのに、怖くて言えないからこんな風に客として扱われるのである。

ただ仮に言つたとしてもうまく伝えることが出来ないから、逆に働きに来たと言わない方がよかつた。

すぐに店員が水を持ってきて香奈に渡した。その後

「それでは現在南2局ですので、先にお預かりを頂きたいのですが。

」

と香奈に言つた。

（お預かり？）

香奈は預かりの意味がわからない。そう言われてただ戸惑つだけだった。

「5000円程でよろしいのですが？」

香奈が意味がわからずただ戸惑つだけだつたので、そつ店員が香奈に言つた。

（会費？）

香奈は団体に払う会費みたいなものかと思い、あわてて財布から五千円札を出して店員に渡した。店員は香奈から五千円札を受け取り

「五千円からお預かりいただきました。」

と叫んだ。香奈は金を渡したまま、金を払う意味もわからずただ卓上で麻雀をしている客を見ていた。

店員が戻つてきて香奈に籠の中身を見せた。そして香奈に

「これが千円分で一枚、これが五百円分で三枚、後小銭が五百円分と籠が千円分で合計五千円になります。」

と籠と籠の中身を説明した。先程の五千円が籠とカードになつたのだが、香奈はまったくわかつてなかつた。

香奈は会費として払つたつもりだからその金が戻つてくるとは思つてなかつた。だから籠と籠の中身はゲームで使う小道具と勝手に判断し、使い方をわからないことを黙つていた。

質問はおろか会話すら出来ない香奈には店員に何も言われない時が安らぐ時だったが、そんな時間は長くは続かない。

「一卓ラストです。優勝は・・・」

香奈が見ていた卓が終了し、卓上でカードのやり取りが行われていた。一人が抜け、先程の店員が点棒を卓の箱の中に戻していた。

「それでは待ち席でお待ちの小林さんどうぞ。」

と店員が香奈を一卓に呼び込んだ。しかし香奈は呼ばれてることがわからず待ち席から離れなかつた。

「小林さんどうぞー。」

と店員が強く言って、香奈は小林が自分一人しか店内に居ない事がわかり、席を立ち訳わからぬまま空いた席に向かつた。

すでに他の三人は準備万端で香奈を待つていた。香奈は席に座つたが何をしていいかわからない、ただおとなしくしてただけだつた。

「これが配牌で小林さんは南家スタートになります。」

店員が香奈の立場を説明し、香奈はやつと少しほは今の状態をわかつた。とは言つても南家から麻雀を始めるこことしかわからなかつた。

香奈の動きは昨日の今日だから相変わらず遅い。しかし前よりは早いから、同卓者からは初心者だからだと不満の声は上がらなかつた。

順目が進む内に香奈はツモドラーを和了つた。

「ツ、ツモ、庄、五百、千」

香奈はおどおどしながら点数を申告した。しかし同卓者は千点と一千点と名目百円玉を香奈に渡してきた。

(?・?・?・?・?)

香奈は点数計算を間違えたと思い恥ずかしく感じた。しかし百円玉の意味がわからない。香奈はどうしていいかわからず体がフリーズ

した。

同卓者達はみんな牌を機械の中に入落としたが香奈は落とそうとしなかった。それで代わりに他の人が落としたが、香奈はまだ点棒を片付けようとしなかった。

動かない香奈に業を煮やして同卓者が店員を呼んだ。あわてて店員が来て香奈が動こうとしないことを説明された。

香奈はパニックになつて頭の中が真っ白になり、体は硬直したままだった。

第29話 キョウウカの怒り

「小林さん、点棒片付けてください。」

店員が香奈にそつと点棒と100円玉を片付けだした。香奈はあわてて

「わ、私の点数は・・・」

と点棒が多かつたことを店員に言おうとした。しかし他の客が

「ツモ赤ドラ一だから千、一千でいいんだよ。」

と言い、店員も

「点数は間違つてませんよ。」

と言つた。香奈は周りにそつと言われるともう何も言えなくなり黙つてしまつた。

こつして次の局が始まつた。香奈は訳が分からぬままだつたが、親番で普通に打ち始めた。しばらくして香奈はテンパイした。しかし香奈はリーチをしなかつた。

何故なら香奈は点数がわからなかつた。だから他の人から出ても点数が言えないので、当たるに当たれなかつた。

先程、香奈が点数に疑問を持つた理由を女性の店員が気付いて、香奈のそばに寄つて

「小林さん、5で赤色の牌はドラ扱いで和了れば100円貰えますから。」

と香奈に説明した。それを聞いて香奈はやっと先のことがわかつた。そして今回の手牌の点数もわかつたから香奈は安心してリーチを掛けた。その後に

「おはよー」『やあこます。』

キョウウカが出勤してきた。キョウウカは店内を見渡し・・

「あんた何で本走してるのよー?..」

キョウウカは香奈が打つてることに驚いて香奈を叱つた。香奈は何で怒られたかわからない、他の店員達も何でヨーカが怒つてるかまったくわからなかつた。

「なあ、」の子まだまだなんだから本走なんてさせないでよー。』

とキョウウカは女性店員のなあを叱つた。

第29話 キョウカの怒り（後書き）

取材協力 京杜なおプロ（最高位戦）

第30話 何も知らない香奈

「え、小林さんはお密さんじゃ無いの？」

となおは驚いてキョウウカに聞いた。

「やうよ、この子今田からいつかド働くことになつたのよ！」

とキョウウカは声を荒げて言つた。なおはそんな話は聞いてなくて分かりようがなく、知つてゐるか知らないか他の従業員達の顔を見た。

他の従業員達もそんな話は聞いてないから知らないと態度で示した。

「ケロ、この子と交替して。」

キョウウカは香奈と従業員のケロと交替をせりと云ひした。

「小林さん、交替よ。早く席を立つて。」

キョウウカは香奈に席を立つてケロと交替をせよつとした。香奈は理由が分からぬが仕方なく席を立つた。

そしてその席にケロが座りゲームは続行した。

「小林さん、ちょっとこちに来なさい。」

何も分からぬ立ち止まる香奈をキョウウカはカウンターに呼び寄せた。香奈は言われるままにカウンターの前まで来た。

「小林さん、あなたはここに働きに来てるのだから、ちゃんと先輩メンバーの言うことを聞くのよー」

とキョウカは香奈に厳しく指導した。しかし香奈はメンバーの意味がわからず、キョウカの言うことがわからなかつた。

メンバーとは雀荘の従業員のことで店長のキョウカの下はすべてメンバーダつた。つまり香奈は立場上一番下つぱのメンバー見習いだつた。

雀荘で働くどころか遊んだことの無い香奈には雀荘の仕組み及び用語がわからない。まして働いたことは無いは働くことつづく氣も無かつた。

香奈は実力を付ける為の訓練及び指導を受けるつもりでサンフリワーに来ていたのだった。

そんな香奈にキョウ力は何をさせようか悩んだ。しかし香奈にさせられるのは掃除ぐらいしかなかつた。

「小林さん、あっちから床の掃除をしてきてー。」

キョウ力はバケツと雑巾を用意して、香奈に店の端っこから床を雑巾で拭くように指示した。けど香奈は

「わ、わ、私、麻雀を打てないのでしょうか？」

とおどおどしながらキョウ力に聞いてきた。しかしキョウ力は

「いいから早く拭きなさいー。」

と香奈を怒鳴つた。香奈はキョウ力に怒られ、言われるまま角の方に向かい、床の雑巾がけを始めた。

その間、キョウ力は香奈の籠を精算しながらメンバーのなおに

「ねえなお、あの子、麻雀プロとしてやつてこけると思つ~。」

と聞いた。その問いになおは

「うーん、さすがに無理じゃない。メンバーすら勤まらない子にプロは無理でしょ。」

とあつさつ答えた。そのなおの考えに同意しながらもキョウ力は

「あの子、今回のプロテストに合格して研修中なの。」

となおに教えた。なおは激しく驚き思わず

「ええーっ！」

と大きく声を出してしまった。客達は驚いてなおの方を見た。なおはあわててまわりに小さく謝り、キョウカに

「なんであんな子が合格するのー？」

とキョウカに聞いた。キョウカは精算しながら

「事務局長が決めたのよ。彼女は努力の子だつて。」

とキョウカも不満があるように答えた。それを聞いてなおは物には限度があると今にも事務局長の斎藤に抗議したい気分だった。

第32話 戸惑う香奈

一方、香奈は指導を受けるつもりでここに来たのに、掃除をやられてるからキヨウカに抗議したかった。

しかし、香奈にそんなことが出来るはずもなく、仕方なく香奈は言われるまま床を拭き続けた。そんな香奈に

「小林さん、あなたのお金よ。」

とキヨウカは先程清算した金を香奈に渡した。驚きながら香奈はキヨウカから金を受け取った。

「金額は合ってる?」

キヨウカが香奈に先程預かった金と同額が聞いた。香奈は同額よりも金が戻ってきたことに不安になつた。

何故ならその金はプロに成る為の受講料として払つたのだから、返つてくるということは講義をもう受けられないということだから。

つまり講義を受けられない プロになれないだから香奈は

「は、はい。」

と不安に怯えながら返事をした。そんな香奈を相手にしないかのようにキヨウカは

「わいわいの雑巾掛けはいいから、あそいで居るなおに卓掃の仕方

を教わつて来なさい。」

と香奈に命令した。香奈は卓掃の意味がわからなかつたが、教わる
"講義だから少しずつうれしくなつてきた。

「あ、あの、お金払わなくて、いいのですか?」

香奈は払つたつもりの受講料が戻つて来た後だから、不安になり、
そうキョウカに聞いた。

それはキョウカにしてみれば訳のわからない質問だつた。さすがに
仕事を教えるくらいで金を取る気は無い。キョウカは激しく怒り

「金なんかいらないから早く教わつて来なさい!」

と大声で香奈を叱つた。

第33話 卓掃

「は、はい。」

そつ返事をして香奈は卓掃の準備をしているなおの所に向かった。

（人が親切心でここまで面倒みてあげてるのに）

そうキョウウカは思いながら、あまりの香奈の駄目っぷりにいらっしゃっていた。

香奈はなおのそばに来たが、怯えてなおに声を掛けることが出来ない。ただ黙つてなおを見る」としか出来なかつた。

そんな香奈にあきれながらなおは卓掃を始めながら香奈に

「小林さん、あなたプロになりたいの？」

と聞いた。 なおに言われて香奈は

「は、はい。」

と怯えながら返事をした。

（かわいじやうだけど、物には限度があるのよね。こんな子がプロになつたつて半年持たずに居なくなるに決まつてるじゃない。）

となおは思いながら、香奈に卓掃の仕方を説明することとした。

「まず」ハタハタ牌の表側を拭くでしょ。次に一列、一列起立して全部起立したら一気に全部拭いてしまひ。横も同じで全部立てて一気に拭ぐ。わあ拭いてみて。」

なおは香奈に指示した。香奈は不器用で「こんな」とは初めてだから、当然動きはぎこちなかつた。

なおも最初から香奈が出来ると思つてなにから、怒りずに

「小林さん、研修では教えないけどプロは卓掃が出来て当たり前なのよ。これは私達の大事な商売道具、商売道具を大事に出来ない人ははつきり言ってプロじやないから。」

と香奈にきつく説明した。しかし香奈は相変わらずプロ意識など無いから、なおの言いたいことはほとんど理解してなかつた。

それでも香奈は“プロになりたい”からなおに言われる通り、卓掃を覚えよつとした。

相変わらず動きは遅いが、香奈は真面目に卓上を掃除した。そして毎度のことごとく、香奈は掃除している姿をおじ様に誉められるのを想像して喜んでいた。

そんなことは露知らず、なおは香奈が眞面目にやつてるから、少し態度をやわらげ香奈に

「私は銀河プロ麻雀連合の高木直子と言つて、つまりあなたの先輩なの。」

と語った。そう言われて香奈は少し驚いたが、かといって香奈は何も言えないからただ黙っていた。

「あら、私みたいなのがプロだと駄目なの？」

となおは微笑しながら香奈に聞いた。 そうなおに言われて香奈は激しく戸惑いなおに

「そ、そ、そ、そんなことないです。え・・・」

香奈はざいり答えていいかわからず、言葉に詰まつた。

「いいから、早く掃除して。点棒もきちんと拭くのよ。」

となおは態度を変えて、厳しく香奈に言つた。 そんなおに言われて
香奈はあわてて卓掃に戻つた。

（ものには限度があるわよ。）

なおは香奈の駄目っぷりにそう思い、キョウカの方を見た。キョウ
カは逆に香奈が駄目なままで終わらせる気は無かつた。

香奈をメンバーとして雇つてる以上、香奈にそれなりに仕事が出来
るように仕込むつもりだった。

別にメンバーとはいえ記帳などの難しい仕事はさせらつもりはない
から、キョウカの計算では香奈でもメンバーは出来るはずだった。

第35話 プロになる動機

キヨウカはメンバーの人手不足を補うために香奈を使おうと思つて
いたから、香奈には全部の仕事が出来なくても、ある程度は出来る
ようになることを願つていた。

そんな中、なおがキヨウカの傍に来て心配そうに

「ねえ、あの子のまま続くかしら?」

とキヨウカに聞いてきた。その問いにキヨウカは

「続くわよ。あの子は芯が強いもの。他の子達とは違つて純粋な気
持ちでプロを目指してるもの。」

と真剣な表情で語つた。ただその純粋な気持ちがキヨウカにしてみ
れば不純な気持ちだから、気分的には受け入れたくなかった。

しかし、香奈の純粋な気持ちの中身をまったく知らないなおは、そ
のことで香奈のことを気に入り、香奈を本気で応援したくなつた。

何故なら、麻雀プロを目指す女の子のほとんどすべてがタレント感
覚でプロの世界に入つて来た人ばかりで、なおはそのことを少し不
満に思つていた。

ただ現実的に競技プロとして活動する姿よりも、タレントのように
各雀荘にゲストとしてやってくる姿ばかりを女の子達は見ているか
ら、憧れる動機はどうしてもタレント的な活動になつても仕方なか
つた。

それにお自身、他の雀荘にゲストとして呼ばれ、タレントのよう
に振る舞つてゐるのだから、この件について彼女達に強く言つことは
出来なかつた。

ましてキョウカにいたつては本当のタレント活動をしているのだから、
彼女達のタレント志望熱を冷ます事など出来るわけ無かつた。

第36話 代走

やつと香奈は卓掃が終わった。その間に店の中は田まぐるしく変わり、キョウカ迄が卓に付いていた。

「小林さん、」のお客さんにコーラを持つてきて。」

卓に居て手の離せないキョウカは、そう香奈に命令した。しかし、香奈はドリンクのことをまったく知らないから、何もわからずただ『迷惑うだけだった。

その香奈の姿を見て、すぐにキョウカも頼むだけ無駄だと気付き

「もう！ 小林さん、いいから『代走入つて。』

と言つてあわてて命令を変更した。

香奈は今度は代走の意味がわからず、キョウカに言われるまま席に座つたが、戸惑つたまま何も出来なかつた。

「普通に打てばいいよ。」

同卓していた客が、そつ香奈にやさしく教えた。

「あ、はい。」

そつ香奈は返事をして改めて手牌を見た。

「ま、自摸番だから。」

再度、同卓している客に教わり、あわてて香奈は手を伸ばし、山から一枚自摸つた。

キヨウカは香奈をメンバーとして使おうとした事を後悔しながら、グラスに客に頼まれた飲料を注ぎこんだ。

そして注ぎ終わるとすぐに注文した客のサイドテーブルに置いて、卓に戻りつつした。

途中、香奈に任せて自分はフリーな状態にした方が都合がいいのではと考へたが、香奈に代走をさせるのはお密さんに迷惑だと感じ、その考へをあきらめた。

「小林さん、もういいわよ。」

キヨウカはそう言つて香奈に交代を迫つた。香奈は打ち続けたが、仕方なくキヨウカと交代した。

第37話 疎外感

卓を離れ、立ち番になつた香奈は打たせてもうえなかつたことがシヨックで、思のよつになつて落ち込んでいた。

そんな時に、新たにお姫さんのが来店したけど、香奈はこらつしゃいませと言わづ、ただ黙つたままだつた。

「こらつしゃいませー。」

キョウカと他のメンバー達は来店したお姫さんにそつ挨拶した。しかし、香奈はそれでも黙つたままだつた。

「なお、そつち入れそつ。」

「南2局です。」

キョウカとなおがお姫さんを案内出来るかとやり取りをする。香奈は当然そのやり取りの意味が判らないから一人のやりとりを軽く聞き流していた。

香奈は接客業をまったくわかつてなく、香奈自身が接客をする立場なことを露一つ理解していなかつた。ただわかつているのは、研修の時とはまつたく違うといつことだけだつた。

香奈は働きたくてここに来たわけでは無い。プロになりたくてここに来たのである。だから研修の時と空氣が違うから、香奈は今、どんな場所に居るかもわからず、不安で苦しくなつた。

本来ならここで香奈は逃げて帰っていただろ。高校の時は、まわりの雰囲気についていけず、登校拒否になつて中退したくらいである。

だけど香奈はプロになりたいといつ気持ちが強かつたから、苦しくても我慢して、この場に踏み留まることが出来た。

来店したお客様さんはキョウウカの後に卓に入つた。

（また打たせてもらえない。）

香奈はやつ思い悲しくなつてきた。

第38話 立ち番（前書き）

ここでは解説します。

小説* 解説ブログ：<http://aburemono.cocolog-nifty.com/>

キヨウカは、来店したお客様を今の場所に座らせると、すぐに預かりを客から貰い、籠を作った。

そして、客に籠を渡すとすぐにドリンクの注文を聞いて、頼まれたドリンクをグラスに注ぎ込んで、その客のサイドテーブルに置いた。その間、香奈は何もわからずただ立っているだけだった。キヨウカはもう香奈は当てにしていなかつたから、完全に香奈を無視してメンバー業務を進めた。

一連の仕事を終えたキヨウカは、すぐにカウンターに戻り、ノートにゲーム代の記帳をし始めた。

そんなキヨウカに香奈は恐る恐ると

「わ、私は、また麻雀をすることは出来ないのですか？」

と聞いた。その間にキヨウカは

「あんた、負けたら自腹よ！お客様もメンバーも負けたら、全部自分で払うの。さつきの五千円もラスだけなら3回持たないわよ！」

といひの忙しい時にと迷惑そつに怒つた。いつもならやめたくならないように、ある程度は怒りを自制するのだが、今回はやめてもいいからと、キヨウカは投げ遣りに香奈を怒つた。

そして、香奈はここで金を賭けて麻雀をしてるとはまったくわかつ

てなかつた。だから金が減る理由はまったく理解していなかつた。

しかし、お爺さんといふ言葉から、ここでは麻雀すると参加料を払わなければならぬ仕組みなんだと、少しほは判りだした。

(おじかまと打つ時もお金を払わないといけないんだー！)

やつ想ひと、香奈は急に打つことをあきらめた。

第39話 麻雀事情

香奈がおとなしくなったので、キヨウカは香奈を無視して雀荘の業務に集中することにした。

とつあえず香奈は、今は経済的に余裕が無く、この場で麻雀を打つことをあきらめた。

何故なら、香奈は働いていないから、収入は親からの小遣いしかなかつた。そこから自分の趣味とプロ団体の会費（麻雀プロは給料を貰えるどひいか、逆に払つてゐる）

を払つてゐるから、雀荘なんかで遊ぶ余裕などまつたく無かつた。

（おじ様と麻雀をする時の為に残しとかないと。）

そつ思い、香奈はおとなしく打つのをあきらめた。

そういうじてゐるうちに、なおの方も卓が割れ、残つたお客さんを他のメンバーが入つてゐる卓に案内することにした。

「小林さん、卓掃して。」

ヨーカが帳面を付けながら、香奈にそつ命令した。香奈は言われるまま、なおの居た卓の掃除を始めた。

卓から戻つてきたなおは、香奈の加入で少し安心していた。なぜならメンバーガ増えればなおは休みやすいし、他の雀荘に行きやすくなるから。

東京は雀荘が多過ぎてメンバーが慢性的に不足していた。ゆえにおはなかなか休みが取りずらく、月三日取れればいい方だった。

なおは毎日ここサンフラワーに出勤してゐる訳ではなく、飛び飛びだが他の雀荘にも出勤していた。

慢性的な人手不足が、なおのように仕事が出来て、客を呼べる女子プロを引っ張りだこにしていた。

逆にキヨウカは自身の雀荘の人手不足で、他の雀荘にゲストで行くのが、難しい状態だった。

第40話 願い

メンバーの手が空いてきたから、キョウ力は香奈に

「小林さん、もう帰つていいわよ。」

と声を掛けた。それを聞いて香奈は

「あ、はい。」

と返事をした。わからないことだらけで、いろいろ質問したかつた香奈だが、人見知りが激しい性格が災いして、何も聞けなかつた。

そして、香奈はこれ以上雀荘に居ても意味が無いから、そのまま帰りだした。

香奈が出て行つた後、なおはキョウ力に

「あの子、やつぱり駄目?」

と聞いた。その問いにキョウ力は

「あれじゃ接客無理よ。かといって掃除だけで雇つ訳にはいかないし。」

と嘆きながら答えた。なおもそれじゃ仕方ないとあきらめた。

雀荘を出て、香奈は考え事をしながら家に向かつた。
(おじさまも雀荘で働いているのだろうか?)

香奈はおじさまも雀荘で、ドリンクを出したり、卓掃をしているのか、すぐ気になつた。そして、今すぐ確かめたいという衝動に駆り立てられた。

しかし、香奈はすぐに確かめることをあきらめた。なぜなら香奈は他の雀荘の場所を知らなかつた。

知つてゐるのは、プロテストと研修の場所として使われた雀荘だけで、そこには若いメンバーしか居なかつたから、『おじさま』らしき人物は居ないようと思えた。

（おじさまが雀荘で働いてるなら、私も働きたい！）

香奈はそう強く願い、まだ見ぬおじさまへの憧れを胸に秘めながら、帰り道を急ぎ足で歩いた。おじさまのHPに早くアクセスしたいか

第41話 落ち込む香奈

家に着くと、香奈はすぐに自分の部屋に入り、パソコンを起動した。目的はおじさまの運営するエム『希望の丘』にアクセスすることである。

ディスプレイに希望の丘が現れると、香奈は心臓がドキドキした。いつもは黙つて見ることしか出来ない香奈だったが、今回は質問をする意欲があった。

しかし、いやとなると香奈は緊張し、何も質問が思いつかなかつた。そして、無理矢理質問するように

おじさまは卓掃をしますか？

と唐突に入力した。あまりにも中身が無かつたがこれしか思いつかなかつた。

とりあえず何か質問を書くことが出来たので、香奈は名前も入力して、何も考えずに送信した。

ただ、おじさまに質問をするという目的を達成し、落ち着きだすと、書いた質問があまりにもひどく失礼だと気付いた。

おじさまが雀荘で働いてるなら、卓掃をするのは当たり前の話である。それをしてるかしていないかの質問だから、香奈でも聞く方がおかしいと気付いた。

香奈はあわてて質問を削除しようとしたが、削除できなかつた。それであまりの恥ずかしさに、ショックでパソコンの電源を切つてしまつた。

まつた。

香奈はショックでふり飛んだ。ネット上とはいえ、香奈は自分が晒し者扱いをされてると思つと、心が苦しくなつた。

そんな状態だから、香奈は食事もあまり取らず、毎日の日課である麻雀の練習も休み、部屋に閉じ籠もつて寝込んだ。

いつして香奈は落ち込んだまま布団の中で眠つた。

第42話　返信

次の日の朝、昨日に比べると少しは落ち着いた香奈は、普通に食事をした後、パソコンの前に座り希望の丘のページを開いた。

失礼な書き込みと過剰に反応してしまったが、おじさまはやせこい人だから、こんなことでは怒らないと、香奈は自分に言い聞かせて質問した場所を探した。

その質問におじさまが返信していく、香奈はそれに気付いて緊張した。

返信はいつも書かれていた。

私は卓掃をします。卓も牌も麻雀プロとして大事な物です。私は卓と牌があるから、プロでいられるという気持ちで卓掃しますよ。

香奈さんも私の分まで卓掃してあげてください。

それを読んで香奈はうれしくて涙が出てきた。

（おじさま、私も気持ちを込めて卓掃します。）

と香奈は心に誓つた。

香奈はそう誓つと、ある場所を手描して家を出た。そのある場所とはサンフランシスコである。

一方、キョウカは早く起きたから、一度寝しようかと思つていた。
しかし、店のことが気になつて、一度寝のことをひたすらに笑いながら日記に書き記し、新宿に向かつた。

キョウカは眠たい目をこすりながら、サンフラワーのことを考えていた。

集客を増やすためにはまた新しい女子プロを入れなければならない。
ただのゲストなら居るだけで十分だが、メンバーとして雇うつもりだから、しつかりした者で無いと雇う気にはならない。キョウカは青田買い出来る立場で、ある女の子を誘つつもりだった。

第43話 キヨウカの雀荘の事情

「おはよー」『やこます。』

キヨウカは店に入るとまず店内全体に挨拶した。そしてメンバー達と挨拶を交わし、卓上のお客さん達にも挨拶した。

そして、カウンターに入り、店長として店の売り上げを見た。相変わらず厳しい数字だった。

キヨウカの計算では、当初は自身が運営すること、新宿で低レートで女性が入りやすい雀荘として、女性客の確保を見込んでいた。

しかし、その女性達が客として来ないと逆に低レートがネックになつて、集客が落ちることになつた。さらに大手雀荘も低レート雀荘を同じ新宿で始めるなど、状況は厳しくなりだした。

それでキヨウカは少しでも客を確保しようと、人気女子プロを使って集客を始めることにした。

その甲斐あつて、集客はある程度増えだした。

しかし、他の雀荘も人気女子プロの活用を始めて、キヨウカの店はまた苦戦しだした。

しかも、キヨウカがそれなりに人気女子プロを確保しても、プロ団体側が人数集めの為、採用基準を大幅に緩和して、女子プロを乱造したため（このプロ団体の愚虚が、香奈がプロになる奇蹟を作った）

人気女子プロの数が増え、女子プロの集客効率が落ちてしまった。

それでも女子プロには集客力があるから、東京の雀荘数の過剰状態の維持（メンバー不足を乱造された女子プロ達が埋める）を継続する由々しき問題を生じてる。

こんな感じで、キヨウカにしてみれば、濡れ手に粟の雀荘経営のつもりが、高いテナント料と人件費の掛かる、面倒な商売になり、頭の痛い話だった。

キヨウ力が雀荘の稼ぎの悪さに頭を痛めてる頃に、香奈がサンフラワーのドアを開けた。

「いらっしゃいませ。」

ドアの前に居る香奈に対し、メンバー達がそう挨拶する。キヨウ力は誰が来たのかと、あわてて入り口の方を見て驚いた。

（何しに来たの？）

そう思いながらキヨウカは、香奈を無言で迎えた。香奈は相変わらず何かに怯えるように、キヨウカに向かって

「わ、私、、、卓掃したいです。」

と弱々しく言った。

（はつ？）

キヨウカは突然のことで、香奈が何を言いたいのかわからなかつた。

しかし香奈は、戸惑うキヨウカを見て、怯えてそれ以上語ろうとせず、キヨウカの目を見て震えていた。

「なお、この子に仕事教えてやつて！」

キヨウカはあまりにも駄目過ぎる香奈に呆れながらも、なおに香奈

の面倒を見せることにした。

いつもなら、呆れて香奈を追い返すところだが、今回ば、事務局長の斎藤の言った『努力の子』が頭に浮かび、無意識に香奈のやる気を認めていた。

「小林さん、」うちに来て。」

なおは香奈が入り口のそば居ると、後から来たお密さんの邪魔になると思い、やれしくカウンターのそばに呼び寄せた。

香奈は不安ながらも、なおの傍に行つた。その香奈をなおは温かく迎え

「メンバーは卓掃だけじゃ駄目だから、これからお姉さんが教えてあげる。」

とやさしく語つた。

香奈は卓掃だけよかつたが、メンバー=プロとの気持ちもあったから、なおの言つことを素直に受け入れた。

第44話 熱意（後書き）

ここで小説の解説をします。

小説*解説ブログ

<http://aburemon.cocolog-nifty.com/>

第45話 香奈の気持ち

「私、お姉さんじや駄田なの？」

この突然のなおの質問に、香奈は驚き、何も言えなかつた。

「あなたプロなんだから、かやんと受け答えをはまつやつしなさいよ！」

そんな口感つだけの香奈に、なおがきつへひつた。せりと

「私達はお人形じやないのだから、挨拶、返事をきちんとしないと駄田でしょ。」

となおは香奈を叱つた。やつなおに言われ、香奈は

「は、はー。」

と言われるまま返事をした。

あまりにも頼りない香奈に呆れながら

「ねえ、何で卓掃したいの？」

となおは香奈に問つた。香奈はなおにやつ聞かれ

「お、おじさまが、卓と牌を大切にするよつて言われまつて、おじさまはま、麻雀のプロだから、卓掃をやめとくねやつです。」

と香奈はおじさまに答えた。

(また、おじさま)

キョウカは一人の会話を横耳で聞きながら呟けた。

「ねえ、そのおじさまって誰？」

なおが続けて香奈に質問をする。その質問に香奈は戸惑いながら「わ、わからないです。だけど、おじさまは太陽です。私達を照らしてくれる太陽です。」

と香奈は答えた。その香奈の答えは、なおはともかくキョウカも理解出来なかつた。続けて香奈は

「私はその太陽の子供として、頑張つて生きてます。」

と言つた。この香奈のおじさまへの気持ちは、不幸な立場から救つてくれるおじさまへの感謝の気持ちだから、

幸せな生活を送るなおとキョウカには、到底理解出来ない気持ちだった。

第46話 風と太陽

この香奈の答えに、今度はなおが戸惑い、香奈に対して何も言えなかつた。

なおは社会経験が豊富とはいえ、香奈の様なタイプの相手をした経験が無く、どう香奈に接すればいいかわからなかつた。

「小林さん、おじさまにどう言われてるかわからないけど、ここは私の店だから私の指示に従つてもらうわよ。」

とキョウウカは一人に割つて入る様にして、香奈にきつと言つた。

そつキョウウカにきつと言われても、香奈はキョウウカの指示よりも、おじさまの言つことを聞きたかつたから、即座に断りたかつた。

しかし、香奈が卓掃をさせてもらえる雀荘はここしかなく、香奈は黙つてキョウウカの指示を受け入れるしかなかつた。

「ちょっと、返事しなさいよ。さつきなおに言われたばかりでしょ！」

キョウウカの言つことを仕方なく受け入れ、黙つている香奈にキョウウカはさらりときつと言つた。

「は、はい。」

あわてて香奈が弱々しく返事した。

キョウウカは香奈を受け入れることにしたけど、あまりにも香奈にメンバーとしての見込みが無いから、もつやる気が失せていた。

逆に香奈にしてみれば、嫌になつて逃げた高校時代を思い出し、今すぐここから逃げたくなつた。

そんな感じで萎縮している香奈になおは温かく

「小林さん、楽しくやりましょ。あなたが暗い顔してたらおじさまも暗くなつて太陽じゃ無くなるでしょ。」

とやさしく香奈に語り掛けた。そして田中キョウウカにあまりきつく言つたら駄目だと合図した。

キヨウカはなおに牽制されて、さすがに香奈を怒る事を自制した。

今まで何人もキヨウカの厳しさに嫌気が差して、やめていったメンバーのことを考えれば、なおの行為は適切だった。

ただキヨウカも好きで厳しくしてゐるわけではなかつた。サンフラワーのオーナーとして、店を潰すわけにはいかないから、どうしても従業員に対して厳しくする必要があった。

だけど今回はなおに牽制されて、改めて香奈をなおにすべてまかせるににして、冷静に対処することにした。

元々キヨウカは、軒先に雀の為に小皿を用意し、米粒を乗せて、食べさせようとする女性である。今回も香奈をメンバーとして雇うのではなく、保護する気持ちで接することにして、温かく見守ることにした。

「これを押すとジュースが出るから、これをコップに注いでお密さん渡すの。」

なおが香奈にドリンクの作り方を丁寧に教えていた。今のところ、仕事はお密さんにドリンクを提供するぐらいなものだから、あらかじめ香奈に教えていたのだった。

「ゴーラークれー！」

卓上の客から注文が来た。

「香奈ちゃん、ほひ、コーラ用意して。」

なおがそつ香奈に指示をした。香奈はあわててグラスを取り、コーラの場所にグラスを持ってきて、グラスにコーラを注いだ。

やり慣れていない香奈は、ドリンクバーからグラスを離すタイミングが遅れて、コーラがグラスいっぱいになってしまった。

そして香奈は、いっぱいになつたままで、グラスをコーラを注文したお客さんの元に持つて行った。

第48話 特別サービス

「一郎がグラスいっぴのまま、香奈は何も気にしないで、一郎を頼んだお密さんの元に向かつた。

「一郎を持つてお密さんの元に来たのはいいが、香奈は渡し方がわからなかつた。

ドリンクは普通にサイドテーブルに置けばいいのだが、香奈はそれがわからず、立ち止まって不安そうに

「一郎、一郎を、持つてきました。」

と弱々しく香奈は、お密さんに向かつて言つた。やつ香奈に言われて、一郎を頼んだお密さんはあわてて香奈を見た。

香奈が持つてきたグラスには、一郎はあふれそうなくらいいっぴいだつた。お密さんは、少し驚き戸惑つた。しかし、おどおどした香奈に文句を言つことが出来ず、苦笑いしながら

「ありがと。そこに置いて。」

と香奈に頼んだ。

「は、はい。」

香奈はお密さんに怒られなくて、ほつとした気持ちで一郎の入ったグラスをサイドテーブルに置き、逃げ帰るようにカウンターに戻つた。

同卓者達も「一ラの異変に気付き、対面が

「山下さん、そんなにいっぱい飲むのですか?」

と密の山下をからかった。山下も苦笑いしながら

「おう、俺だけ特別サービスだから。」

と笑つて言い返した。その一人のやりとりを見てなおが

「新人いじめたら、私、あの子のおねえさんだから許さないわよ!」

と笑いながら、香奈のミスをうまくフォローしようとした。逆にキヨウカは別に、いちいち目くじら立てる程でもないから、黙つて香奈のミスを静観していた。

第49話 久しぶりの幸せ

香奈は、自分の対応に何か問題があつたのかと思いながら、なおとお密さんとのやり取りを不安気に見ていた。

「お姉さんじやなくて母親じやないの？」

と笑いながらお密さんがなおをからかった（実際になおと香奈は20ぐらい歳が離れてくる）。

お密さんこそう言われてなおは

「失礼ね。私の方が年下なんだからー。」

と笑顔で反論した。それには店内のみんなが爆笑した。キョウウカもくすくす笑つている。香奈もサンフラワーに来て初めて笑つた。

「もう香奈ちゃんまで笑わないでよ。」

なおが苦笑いしながら香奈に文句を言った。このなおのアドリブで、店内はなごやかな雰囲気になり、香奈は何年か振りに幸せな気分を味わえた。

この後、卓が割れなくて、香奈はお皿での卓掃が出来なかつた。しかし、店のなごやかな雰囲気が、そのことを忘れさせるほど、香奈に幸せな一時を与えた。

「小林さん、もう帰つていーわよ。」

ヨーカは香奈に勤務時間の終わりを教えた。香奈は仕事という感覺は無く、もうこんな時間だから帰らないとと思い、帰ることにした。

ただ、帰るときの挨拶がわからず、戸惑いながら

「わ、わ、わよひな。」

と言った。それを聞いてキヨウカが

「わ、お先に失礼しますでしょー。」

と香奈を怒鳴り付けた。怯える香奈はあわてて

「お、お先に失礼します。」

と言った。

「うべぬわせま。」

とキヨウカが香奈に挨拶し、なおは

「おつかれ、明日も頑張るのよ。」

と挨拶した。

「あ、ありがとうございます。」

やつれて香奈は喜びながら店を出た。

(明日もここに来たい。)

香奈は畠中やサンフランシスコに来るに止りました。

第50話 昨日と違う風景

次の日、香奈はうれしそうに家を出た。憧れのおじさまに会えるわけでもないが、サンフラワーの温かい雰囲気が好きで、またその中に居れると思うとうれしかった。

新宿に着いて、サンフラワーのあるビルに向かう。交差点を歩きながら、香奈はすれ違う人達に恐怖感をあまり感じなくなっていた。

香奈の対人恐怖症は精神的なものだから、気持ちが高揚していれば必然的に恐怖感が無くなる。

そうして、知らず知らずのうちに香奈は社会復帰を始めていた。

ビルに辿り着き、エレベーターの到着を待つ。そしてエレベーターに乗つて3階のボタンを押した。

すぐにエレベーターが3階に到着し、香奈はエレベーターを降りて、サンフラワーに向かつた。

廊下の途中にあるキヨウカのポスターは、前まで香奈にとつては恐怖の対象だった。何故なら、キヨウカ自身が怖いから、香奈にはポスターでも怖く見えた。

それが今回は、ポスターが怖いどころか、ヨーカの写真が天使のように見えた。それくらい香奈の心が充実していた。

サンフラワーのドアを開け、香奈はいつもの不安気な気持ちで

「おはようございます。」

と挨拶した。

香奈が来たのでメンバー達も香奈に挨拶した。

幸せな気分で来店した香奈だが、昨日とは打って変わっての殺風景な店の雰囲気に飲まれ、途端に借りてきた猫のようになつた。

不安になり、香奈はあわててなおを探したが、店にはなおの姿は無かつた。

第51話 別の雀荘

なおが居ないと思った香奈は、激しく不安になり、途端にいつもの状態に戻った。

（なおさん、トイレかな。）

香奈はなおがトイレだと思い、なおがトイレから出でてくるのを期待して待った。

しかし、なおは出勤していないから、いつまで経ってもなおがトイレから出でてくるわけなかった。

その香奈が、トイレを見ながらぎこちない振る舞いをするのを見てキョウウカは、香奈がトイレに行きたいのかと思い、無言でトイレの様子を見に行つた。

トイレには誰も居なかつた。キョウウカは呆れて

「小林さん、トイレに誰も居ないから、トイレ行きたいなら早く行きなさい。」

と香奈を叱つた。そつキョウウカに言われて香奈は

「あ、な、・・・、・・。」
と言つた。

「何が言いたいの全然わからないわよー。」

とつまく答えられない香奈にキョウカがヒステリックに怒った。そ
うキョウカにきつく言われ香奈は

「な、なおさん、トイレに居ると想つて……。」

と最後が言葉にならないよつこ、震えながら答えた。

「はあ、なおが居るわけ無いでしょ！ なおは今日は他の雀荘よ。」

とキョウカは香奈に呆れながら、なおが今日は休みなことを教えた。

（他の雀荘・・・）

香奈は他の雀荘と聞いて、急に気持ちが高揚した。なおが行つた雀
荘におじさまが居るかも知れないと、激しく期待しキョウカに

「わ、私も他の雀荘に行きたいです。」

と訴えた。しかし、その訴えがさらにキョウカを怒らせることがな
つた。

第52話 キョウウカの勘違い

「あんた、他の雀荘で勤まると思つてゐるの…？」だから使つてもらえてるだけで、他の雀荘ならとつて「クビよ…。」

とキョウウカは香奈の訴えに頭に血が上つたように香奈を怒鳴り付けた。

キョウウカにしてみれば、香奈の面倒を見てあげてゐるのに、他の雀荘に行きたいやつて言われて、恩を仇で返された氣分だつた。

そんなキョウウカの気持ちを香奈はまったくわからないが、怒る力の前ではただひたすら

「「めんなさこ」、「めんなせこ」。」

と謝り続けた。

香奈は何も悪いことをしてないと思つていたが、難を逃れるには謝るしかないと、今までの人生で悩つていた為、何も反論せずにただひたすら謝つた。

お客さん達も、何で香奈が怒られるのかまったく理由がわからなかつたが、鬼の様なキョウウカが怖くて、誰も何も言えなかつた。

キョウウカはもう香奈の面倒を見たくないと、香奈をクビにしようと考えたが、そこまで怒るには、あまりにも香奈は弱過ぎた。

それでさすがに香奈をこれ以上追い詰められなくて、キョウウカは怒

るのをやめた。

香奈はキョウカが何も言わなくなつたから、少しほは落ち着き、そして怒られなくなつてほつとした。

キョウカはまだ腹の虫が治まらなかつたが、改めて冷静に考えて見ると、香奈はサンフラワーが嫌なのではなく、ただ単におじやまのところに行きたいのだと気が付いた。

あまりにも単純な香奈らしい思考である。なおがゲストに行つた雀荘におじやまが働いてるとは限らない、それでも香奈なら行こうとするだらつとキョウカは悟つた。

香奈はキョウ力に激しく怒られて、かなり落ち込んでしまった。いつもならもう逃げ出していただろう。

ただ今回は、昨日の幸せな一時が期待となつて、香奈をサンフリワーに踏み畳まらせていた。

そんな香奈を見ながらキョウ力は、香奈を怒つたのは間違いだと思いつつも、他の雀荘に行きたいと言つた香奈だつて悪いと、心の中で血口弁護していた。そして香奈に

「あなた、なおの居る雀荘におじさまが居ると思つたのでしょ？仮に居ても、今のあなたじゃおじさまの足手纏いになるだけよ。」

と香奈をわけもわからず怒鳴り付けた償いの意味を込めて、香奈に忠告した。

(足手纏い！)

香奈はキョウ力に足手纏いと言われて、激しく傷ついた。しかし、それは事実であり、香奈も否定はしなかつた。

香奈はショックで黙り込んだまま、硬直しながら立っていた。そんな香奈を見てキョウ力は

「ソレで修業をせしあげるから、元気出しなさいよーーこの店だつて、おじさまが来るかもしれないから、今のうちにレベルアップしきなさいーー」

と香奈を元気付けようと励ました。それを聞いて香奈は、エンジンが掛かったように動きだした。

香奈は、おじさまが密としてサンフランシスコに来たときに備えて、メンバーとしてできぱきと動かなければならない。そう思い体を動かそうとするが、どう動いていいかわからなかつた。

「ほら、これ見て勉強しなさい。」

そう言つてキヨウカが香奈に渡したのは一枚の牌譜用紙だった。

第54話 頭が痛いキョウカ

香奈は、キョウカからもらつた牌譜用紙をじっくり見たが、用紙は記号だけで、香奈はまったく意味がわからなかつた。

「誰がどんな風に打つたかこんな感じで記録するのよ。万子は漢字の・・・」

とキョウカは香奈にきめ細かく説明した。しかし、香奈はヨーカの説明に付いていけず、ほとんど聞き流していた。一通り説明を終えるとヨーカは

「あんた、おじさまがどんな麻雀を打つか記録したいでしょ。これあげるから、次の研修まで勉強してきなさい。」

と未記入の牌譜用紙を渡した。香奈は牌譜用紙を貰うと、あわてふためき採譜の練習をしようとした。香奈は、おじさまの採譜を早く出来るようになろうと、あわてていた。

しかし、採譜の仕方を教わつてないから、香奈はお密さん打つている周りを、ただ紙を持ってあわてふためいているだけだった。

「小林さん、仕事中でしょ！採譜の練習は家に帰つてからやりなさい。」

とキョウカは香奈を叱り付けた。香奈の振る舞いはさすがにお密さんに迷惑だからキョウカはあわてて注意した。

キョウカに叱られて、香奈はおとなしくなり、普通の立ち番に戻つ

た。こんな香奈をキヨウカは、これからずっと教育しなければならないと思うと頭が痛くなるのだった。

その頃、桜井里香は大阪に旅打ちに来ていた。難波の雀荘でプロの強さを見せてあげると息巻いていた。

「ここの一人は特別だから。」

と店長が里香に教えた。里香は田の前の男女二人を見て

（大阪の雀「口達、今日私と打つこと後悔させてあげる。）
と一人気合いを入れていた。

第55話 謎の男女

里香は、目の前の男女二人がイカサマをしないか、必死にチェックした。そして一人の会話にも“通し”サインが無いかチェックした。

（あんたら一人組んでも無駄よ！通しなんか使つても私が見破つてあげる。）

と里香は、男女二人がイカサマをすると決め付け、それを見破るつもりで息巻いていた。

数時間後

「あんたら一人組んでるでしょ！！私達がリーチを掛けたらベタ降りして、あんたらがリーチしたら、わざと振込もうと危険牌切りまくるつて汚いわよ。」

と里香は立ち上がり、最初と打つて変わつて二人の行為をなじつた。

「あらあら、私達は道を作つと危ない牌を切つてあげただけよ。」

と女は里香をなだめた。

「よし、俺が抜けるから、美央、一人で相手してやれ。」

と男は潔く席を立ち、女に勝負を託した。

「ん、どうした？打たないのか？」

男は座れりつとしない里香に聞いた。里香は悔しそうに
「もうお金無いわよ。」

と答えた。

「ほれっ。」

男は財布から10万円程抜いて卓上にポンと置いた。

「これで好きだけ打てばいい。」

やつ置いて、男は里香に10万円を渡した。

「打つてあげるわよ！」

里香は卓上の10万を驚愕みし、自分の籠に入れた。

「おーい、ヒヒワン欠け。」

男はメンバーにそう呼び掛け、卓には男の代わりにメンバーが入ることになった。

（1対1なら負けないわよ。）

里香はやつ思い、対面の美央をにらんだ。

第5・6話 伝説の一人

美央は、里香のことを無視するかのように、卓上に集中していた。

（何よこの女、さつきと態度が違うじゃない。）

と里香は動搖し、最初から気負けしていた。

いざ二人の戦いが始まる、自分の手だけに集中する里香と、それに対する各自の第一打から色の偏りを探ろうとする美央では、レベル的に端から勝敗が決まっていた。

数時間後、里香は男に貰った金を半分にして、気落ちしていた。

男は美央に声を掛け、二人は帰ることにした。

「待つて！」

里香が一人に声を掛ける。続けて

「お金は後で返しますから、連絡先を教えてください。」

と言った。

「ん、金ならくれてやつたからいらんよ。」

と男が里香に言い返した。しかし、里香は

「貰つわけにはいきません。必ず働いて返しますから。」

と男に訴えた。

「じゃ、出世払いでいいや。俺は南 良一。」

「私は前園美央。」

と二人は名前を告げて里香のもとを去った。

（あ、あの二人……）

里香は一人がどんな人物かわかり、茫然とその場に立ち尽くした。

その頃、香奈は家に帰り、キヨウカから貰った牌譜用紙を必死に眺めていた。

記入してある方は「キヨウカの打ち方が記入してあるみたいで、名前が水野キヨウカになっていた。

香奈は牌を表す記号を、キヨウカから教わったことをつる覚えながらも、解読していた。

しかし、さすがに香奈には全部の記号がわからず、この日は練習することをあきらめた。

第57話 キョウカの朝

次の日の朝、キョウカはいつもより疲れていたのか、ベッドから出るのが、普段より時間が掛かつた。

こんな時はだらけて昼過ぎに出勤のヨーカだけじ、香奈がまた朝から来るような気がして、いたから、頑張って朝からサンフラワーに出ることにした。

歩きながらヨーカは、仕事のような感覚で、携帯でSNSには明るく振る舞う日記を書いていた。しかし、本当は疲れていて、朝から頑張る気などなかった。

そして、ベッドから出るのが遅かつたから、いつもより通勤時間は遅く、今からサンフラワーに行くと、まるで遅刻したよつてみえる時間帯に到着だった。

（本当は休んでもいいけど、私が休んだら店的に困るから、出であげるのだから感謝して欲しいわ。）

とキョウカは、心の中で自己を美化しながら、サンフラワーに向かって歩いていた。

そんな時に、キョウカの携帯が鳴った。キョウカはサンフラワーからかと思つてあわてて、携帯を持って画面を見た。

電話はサンフラワーではなく、新たにサンフラワーで働くことになつた女子プロからだつた。

「はい、水野です。」

「え、ほんと！」

「そう、明日待ってるから。」

とキヨウカは電話を切った。やつとサンフラワーを補強できると思
い、キヨウカは先程からの疲れが無くなつたかのように元気になつ
た。

しかし、サンフラワーにはキヨウカの疲れの元である香奈が、牌譜
に関して色々聞きたくて、手ぐすね引いて待ち構えていた。

香奈は、サンフラワーに昨日よりも早く出勤していた。

早く来た理由は、メンバーの仕事が好きなわけでもなく、キヨウカに質問したいからではなく、おじさまがサンフラワーに来ているかも知れないという期待からだった。

おじさまがサンフラワーに来るのは限らないのに、キヨウカの「おじさまがサンフラワーに来た時・・・」での発言で、香奈はおじさまがこの雀荘に来ると勝手に思い込んで期待していた。

サンフラワーに到着してドアを開けると、なおはともかくキヨウカも居なかつた。居るのは男のメンバー一人だつた。

香奈は不安で萎縮して、その一人に挨拶が出来なかつた。一人も香奈には関わらないようにしたから、三人の間には何も会話が無かつた。

香奈は萎縮したままカウンターの前に立つてキヨウカを待つた。

待つ間、店内を見回したが、おじさまらしき人物は居なかつた。メンバーの仕事は他の一人がやるから、香奈はカウンターの前に只立つだけだつた。

キヨウカは遅れていたにも関わらずあせらなかつた。逆に余裕を持って歩いていた。

そしてビルに到着し、エレベーターに乗る。キヨウカは強力な助つ

人が、サンフランシスコに来ることになったから、上機嫌のまま店のドアを開いた。

「おはようございます。」

キヨウカは上機嫌にあいさつした。

「おはよー」ぞこます。」

メンバー二人がキヨウカに挨拶する。キヨウカはカウンターを見る
と、香奈が不安そうな感じで立っていた。

香奈を見て、キヨウカは上機嫌な気持ちが吹っ飛んだ。

第59話 やる気

香奈は、キョウカを見ると何かを聞いたその態度で体を震わせた。しかし、その態度がキョウカをますます不快にさせた。

（やる気の無い子に教える気なんか無いわよー）

キョウカは、香奈が昨日あげた牌譜用紙を今持ってる」ことが不快だつた。

何故なら、メンバーとして使つてあげてるのに、メンバー業よりもさまの方が大事だと香奈が態度で示しているからである。

しかも、サンフラワーに入つてくれる助つ人の方は、明日から働きますと言つてくれるほどやる気があるのに、香奈にはやる気がまったくみえないから余計腹が立つた。

本来なら香奈はこれだけでクビだつた。しかし、キョウカは香奈に期待してなかつたから、クビに成るまで怒られるのじるか、逆にまつたく怒られなかつた。

「いつたい何を聞きたいの？」

キョウカは投げ遣りに香奈に問い合わせた。香奈はキョウカに怯えながら

「」これ・・・」

と牌譜に「と書かれてる文字を指した。香奈は書いてある文字がア

ルファベットのTだとわかつたが、字の意味がわからないから読むことが出来なかつた。

「これ、東南西北の東じゃない！あんたもローマ字でTONと書けるからわかるでしょ。」

と呆れながら香奈を叱り付けた。キョウ力に怒られてグズグズしていふ香奈に、キョウ力は

「Tは南のTよ。」

と先手を取つて答えた。そしてまだ質問がありそうな香奈に向かつて

「矢印は自摸切り、他に質問は？」

と逆に問い合わせした。

第60話 温かい言葉

キヨウカの開き直りのよつた逆質問に、香奈は怖くて何も言えなかつた。キヨウカも香奈の相手などしていられないから

「ほり、質問無いなら仕事に戻りなさい。」

と香奈を追い払つようまくしたてた。そのキヨウカの威圧感に、香奈は怯えてあわててキヨウカの元を離れた。

（あなたの相手なんかして余裕なんか無いのよー）

キヨウカは心の中で香奈を追い払つたことで少しほは不快感を解消していた。逆に香奈は、キヨウカに怒られないようになると怯え、人形のように硬直していた。

「香奈ちゃん、冷茶！」

麻雀を打つてゐる客の高橋からの注文だつた。名指しで呼ばれた香奈は、どうしていいかわからず動けなかつた。

「小林さん、高橋さんに茶を持って行って！」

キヨウカが香奈に呆れながら命令した。香奈はあわててグラスを取りに行き、グラスに冷茶を注いだ。

冷茶を注ぎ終えると、香奈は高橋の方に冷茶を持って向かい、高橋のそばで震えながら立ち止まつた。

「セレに置いてくれ。」

高橋が香奈に、冷茶を左側のサイドテーブルに置くように指示した。

「は、はー。」

香奈は怯えながら返事をして、冷茶をサイドテーブルに置いた。

「香奈ちゃん、キヨウカさんに怒られてもサンフランキーをやめたら
駄目だよ。俺、香奈ちゃんが居なかつたら遊びしいかい。」

と高橋は香奈に温かい言葉を掛けた。すると同卓者達までが俺も俺
もと香奈に訴えた。

みんな香奈がキヨウ力に怒られてばかりなのを不憫に思い、香奈を
守りのりとしてくれていた。

そんなお客さん達の応援を、香奈は理解できず、どう対処していいかわからなかつた。

「ありがとうって言いなさい…せつかく応援してくれてるのだから感謝しなさいよ！」

お礼も言えずにただ固まる香奈に対して、キヨウカがカウンターから怒鳴り付けた。キヨウカに怒られて、香奈はあわてて

「あ、ありがとうございます。」

と言つてすぐにその場を離れ、定位置のカウンターの前に逃げた。そして先程と変わらない感じで、人形みたいに動かなくなつた。

(「の子が金を取れるプロになるなんて。」)

この人形のような香奈が人氣者になるとは、キヨウカはとても理解できなかつた。

しかし、キヨウカは集客しなければいけない以上、仕事が出来る出来ないを抜きにして香奈を使い続けなければならなかつた。

一方、香奈はお客さんからの人氣などどうでもよかつた。香奈にとって大事なのはおじさまであり、おじさまでない人にはまったく関心が無かつた。

それでも香奈はお客さん人に呼ばれる限り、メンバーとしての仕事を

こなさなければならず、ただ立つて、おじさまが来るのを待つ訳にはいかなかつた。

そうして香奈の勤務時間が終了し、香奈はキョウカに呼ばれた。

「小林さん、あんた接客をいやんとしなきゃ駄目でしょ。おじさまが客として来ていたら失礼でしょ。」

とキョウカは香奈を叱つた。しかし香奈は

「お、おじさまはプロですから、わかります。だ、だから大丈夫です。」

と反論した。

その香奈の聞き分けの無い態度にキョウ力は激しくいらつたが、疲れて香奈を怒る気にはいす

「 もう、いいわ。おつかれさん。」

と香奈に帰りの挨拶をした。香奈はおどおどしながら

「 お先に失礼します。」

と小声で帰る挨拶をした。

香奈が帰った後、キョウ力は香奈をどうするか考えた。

香奈がメンバーとして頑張る気なら、大変でも教えがいがあるが、香奈はメンバーをやりたくてサンフリワーに来てるのではなく、いつも来るかわからないおじたま田当てである。

ヨーカは香奈の相手をすることがストレスになつてきただから、もう香奈をクビにしようかと思つた。

しかし、庭に来た小鳥に、わざと食べやすいように餌を置く、やさしいキョウ力は香奈に止めを刺すよつな」とは出来なかつた。

一方、香奈は新宿駅に向かいながら悩んでいた。キョウ力に怒られるのが怖くて、サンフリワーに居るのが苦痛になつて來ていた。

おじたまに頑張つてゐる姿を見せたこと、苦しくつらくても頑張つて

きたが、肝心のおじさまがサンフラワーに来てくれない以上、もう心が折れそうだった。

せめてなおが居てくれればと思つて淋しく駅に向かつて歩いた。

その香奈に切望されているなおは、サンフラワーの状態も香奈の苦しみもわからず、たまの休みをフイットネスクラブで汗を流していた。

そしてUNUにいつものテンションの高さで、汗を流して気持ちよかつたと明るい日記を書いて、一人の苦悩をよそに人生を楽しんでいた。

第63話 里香の加入

次の日の朝、香奈は憂鬱なままサンフラワーに向かった。かつて登校拒否になつた時のように、ためらいながら出勤していた。

逆にキヨウカは今日から新しく新人が入るので、少しほう氣を引き締めてサンフラワーに向かつていつた。

サンフラワーには香奈の方が先に着いて、エレベーターに乗り3階で降りた。

そして店の前でしょぼんとした感じで、店のドアを開けるのを躊躇つていた。

そんな時にキヨウカが出勤ってきて店の前でうらつこてる香奈を見た。キヨウカは呆れながら

「ちょっと、あんた何してるの？」

と香奈を叱つた。香奈はあわててキヨウカを見て

「お、おはよっ」やこます。」

と小声で言つた。

「早く入りなさいよ。」

キヨウカは怒りながら香奈に命令した。香奈はあわてて店内に入り、また小声で

「おはよー!」ぞこます。」

と言つてカウンターの端に逃げるよつに移動した。

「おはよー!」ぞこます。」

キョウカは店内に挨拶し、卓上で打つてゐるお客さん達にも挨拶した。

香奈はキョウカに店内に入ることを許されたと思い、ほんの少しだけ安心したが、それでも不安な状態に変わりが無かつた。

(まるで私がいじめてるみたいじゃないの。)

キョウカは香奈が怯えるように、隅で硬直しているのを見て、そう嘆いた。

「おはよー!」ぞこます!」

突然、店のドアを明るく開く人が居た。それを見てヨーカの目が輝いた。桜井里香だった。里香がサンフランに新しく入るプロだつた。

「桜井リカ、大阪から戻つてまいりました！」

里香は明るくそのままヨーカに報告した。香奈は里香がサンフラワーに来たことに驚いたが、里香に話し掛けることが出来ず、里香と田を呴わせないようにしていた。

それでも里香は香奈を見つけて

「あんたいつもここで打つてるんだ。」

と香奈に話し掛けた。香奈は里香に返答が出来ず、おどおどして何も言えなかつた。

「その子、プロ修業の為ここで働いてるのよ。」

とキョウカが香奈の代わりに答えた。

「へー、そーなんだ。じゃあよろしく。あたし名前をカタカナの力に変えたから。」

トリカは香奈に挨拶した。香奈はまだ緊張してリカとしゃべれなかつた。しかしおかは香奈のことを気にせずに、ヨーカに仕事の説明をしてもらつことにした。

（リカさんも修業に来たんだ。）

香奈はリカも修業でサンフラワーに来たと思い、変な対抗心をリカ

に抱いた。

香奈はリカに負けても、おじさまは香奈を責めたりしないから、その点は香奈も安心していた。

しかし、ただでさえ少ない仕事を奪われたら、香奈はただ立つているだけになり、おじさまから見れば、香奈は努力していない子になる。

香奈はいつおじさまが来るかわからない以上、リカに仕事を譲る余裕などなかつた。

そんな中、一つの卓からお客さんが帰ることになり、席が一つ空いた。すぐにリカが点棒を片付け、その場を清掃した。

香奈は仕事があつたことに気付かず、リカのやつていることを黙つて見ているしかなかつた。

第65話 意欲的な香奈

「リカー、そこ本走入つて！」

キヨウカが空いた席にリカを入れることにした。リカはヨークに言われるまま

「それではリカ、本走しまーす。」

と言つて、リカが明るく同卓者達に振る舞い、卓に本走で入ることになった。

（リカさんは麻雀を打たせてもらえるんだ。）

それを見て香奈はリカがすゞしくりやましく感じた。キヨウカは帰るお客さんの換金を済ませ、リカの籠を作つた。そして

「これをリカに渡してきて。」

キヨウカは今作つた籠をリカに渡すように香奈に命じた。香奈はキヨウカの作った籠を持つて、言われるままリカのそばに行つた。

香奈は緊張してリカに籠を渡せなかつた。ただ立ち止まつてリカを見のがやつとだつた。その籠を持つてただ立ち止まる香奈に気付いてリカは

「ありがと、そこに置いて。」

と香奈に言つて再び卓に集中しだした。香奈は黙つて籠をリカのサ

イドテーブルに置いて、そのまま帰つていつた。

香奈は戻つた後も、ずっとリカの方を見つめていた。キョウカはそんな香奈の態度に気付き

（あら、リカに対抗意識を持つてるのね。）

と思い微笑した。香奈はお密さんにドリンクを頼まれると、普段より早く動いて、お密さんにドリンクを渡した。

そんな香奈を見て、キョウカは香奈がまじめにメンバー業務に取り組みだしたと思い、うれしくなつてきた。

しばらくして新しくお密さんが来店したので、リカの席に案内することにして、お密さんをしばらく待たせることにした。

第66話 志願から拒否へ（前書き）

進行が遅いという意見があります。個人的には私生活で働かないと食えない以上、どうしても執筆時間があまり取れません。小説で稼げるなら他のをやめてでも執筆しますけど。そして主人公は普通の女の子じゃないから、どうしても他の子より進行に時間が掛かります。それをわかつていただければと思い、ここに書きました。

香奈はそのお客さんの元に御用聞きに向かつた。しかし、香奈はお客さんに要望を聞くどころか、話しあげることすら出来ないから、ただ立ち止まつたままだつた。

「ちょっと香奈ー。いつわに来なさい。」

キョウウカはあわてて香奈を呼び戻した。香奈がカウンターに戻るとキョウウカは

「あんたお客さんの前をついひりしたら、お客さんの迷惑でしょー。」

と香奈の定位位置を指差し、香奈に命令した。しかし香奈は

「わ、私も麻雀したいです。」

とキョウウカに訴えた。それを聞いてキュウカは呆れながら

「あんた、今卓に入つたらおじたまといつしょに打てなくなるわよ。あんたの都合何かで卓組み変えられないから。」

と香奈に言つた。それを聞いて香奈は、すぐに麻雀を打ちたいと思わなくなつた。それ以上にキョウウカに言われても断る気だつた。

お客さんは他の卓にラス半が入つたから、そこに案内し、リカはそのまま続行になつた。当然香奈はリカと交替したいと露と思わなかつた。

リカの入っていた卓が割れて、そこで打っていたお客様達が帰り出した。

「香奈、2番卓掃して。」

キヨウカが香奈にそう指示して、香奈は目の色変えて卓に向かった。そしてリカとすれ違ひながら卓掃を始めた。

籠を戻しにカウンターに行つたりカは籠を返しながら不思議そうな気持ちで香奈を見ていた。そのリカにキヨウカは

「あの子、プロとして卓掃が好きなのよ。」
と教えた。

リカはキヨウ力の説明では、香奈が卓掃が好きな訳が理解出来なかつた。リカからしてみれば、どう考へても麻雀のプロが卓掃を好きになるわけがなかつた。

実際、とあるプロ団体は卓掃を罰ゲームに使うほどだから、誰もが卓掃をしたいと思わなかつた。

香奈がうれしそうに卓掃する姿を不思議な気持ちで見ているリカにキヨウ力は

「あの子の好きなプロが、あの子に卓掃は大事なことと言つたのよ。だから卓掃は人一倍一生懸命するのよ。」

と言つた。それを聞いてリカは香奈が卓掃を一生懸命やる理由がやつとわかつた。続けてキヨウ力は

「あの子の仕事を奪つたら駄目よ。」

と微笑しながら軽くリカに釘を刺した。

リカは香奈から仕事を奪つてまで頑張る気は無いから、キヨウ力に何も言わなかつたが、自分より香奈の方がプロに感じるのが少し悔しかつた。

香奈はおじさまが来店したことを考えながら卓を掃除していた。掃除している姿を見て誉めてくれる、きれいな卓を見て感心する、想像するだけで香奈は幸せだつた。

しかし、いつまで経つてもおじさまは来店しないから、香奈は不安になり、掃除が終わつた卓は他のお客さんが使うことになった。

香奈は掃除した卓を他の客に使わせたくなかつたが、とても行動に移すことが出来ないから、黙つて卓が他の人に使われるのを見つるだけだった。

本来なら、このことで香奈はショックでやる気を無くしていただろう。

だけどおじさまのサービス精神を理解していたから、香奈も掃除した卓をサービスで他の人達に提供したことにして気を取り直した。

第68話 期待だけでの出勤（前書き）

携帯水没事故で遅くなりました。

第68話 期待だけでの出勤

卓掃を終えた香奈は、いつもの位置に戻り、新に仕事があるのを待つた。

いつして香奈は、卓掃かお密さんにドリンクを渡すことしか出来ないのに、メンバーの仕事が出来るような気持ちになつて、就業時間を終えた。

家に帰り、PCを立ち上げておじさまのH.Mの希望の丘を開いた。そしておじさまにサンフランフラーに来て欲しいと頼もつと思つた。

しかし、おじさまが普段は忙しいとわかり、頼むことをあきらめた。それと同時におじさまがサンフランフラーに来る事を期待することもあきらめた。

おじさまが来ないのならば香奈もサンフランフラーで頑張る意味が無い、香奈は明日からサンフランフラーに行くのをやめよつかと思つた。

だけどおじさまが来ないことは限らない、そして何時来るかわからなから香奈は明日もサンフランフラーに出勤することにした。

次の日の朝、ふと田が覚めたキョウウカは、休みの日だから一度寝しよつとした。しかし香奈のことを思い出したら、安心して寝るどころか休むことすら出来なかつた。

仕方なく出勤しようとしたキョウウカだが、あることに気が付いた。

（なあちゃんが居るから大丈夫だ。）

そつとわかればとキョウカは安心して布団の中に戻った。

香奈は普段通りサンフラワーに向かっていた。おじさまが来るとは限らないが、何時来てもいいように香奈は、脳内でイメージトレーニングをしていた。

サンフラワーに到着し、何時ものじとく恐る恐るビデアを開けると、そこにはなおが居た。

第69話 強気のリカ

「あー、香奈ちゃんお久しぶり。」

なおは香奈に久しぶりに会えて喜んだ。香奈もなおに久しぶりに会えてうれしかった。しかし香奈は相変わらず会話が苦手で、なおに話し掛けることが出来なかつた。

「香奈ちゃんが頑張つてゐてヨーカさんから聞いたわよ。」

なおは香奈に明るく話し掛ける。香奈はもう言われてうれしかったが、相変わらず「まくしゃべる」とが出来ず、なおに向も言えなかつた。

「おはよー」やれこめく。」

ドアを開けて入つて来たのはリカだつた。

「あ、なおちゃんおはよー」やれこめす。桜井一等兵ただ今到着しました。」

リカはなおへの挨拶にジョークを交えた。なおは微笑しながら

「おはよ、あなたがヨーカさんが言つていたつむの団体のホープね。」

とリカは言つた。そつとおれでリカは

「とんでもない、なおさんの足元にも及びませんよ。」

と謙遜しながら否定した。程なく店内が動きだし、三人は会話を切り上げ各自動いた。

「どう、次本走に入る？」

少し落ち着いたので、なおがそつりカに聞いた。

「はい、喜んで。」

とリカは返事をした。

（私はおじさまが一緒にないなら麻雀を打ちません。）

と香奈は一人のやりとりを聞いてそつ思つた。

「あら、麻雀に自信あるんだ、すごいじゃない。」

なおはリカの意欲に感心した。

「はい、師匠が師匠ですから。それに少しでも打つて強くなりたいので。」

とリカは語つた。

第70話 なお再び（前書き）

インフルエンザを罹つて遅くなりました。

第70話 なお再び

「あー、香奈ちゃんお久しぶり。」

なおは香奈に久しぶりに会えて喜んだ。香奈もなおに久しぶりに会えてうれしかった。しかし香奈は相変わらず会話が苦手で、なおに話し掛けることが出来なかつた。

「香奈ちゃんが頑張つてるってキヨウカさんから聞いたわよ。」

なおは香奈に明るく話し掛ける。香奈はいつも言われてうれしかったが、相変わらず「まくしゃべる」とが出来ず、なおに向も言えなかつた。

「おせよー」やれこめく。」

ドアを開けて入つて来たのはリカだつた。

「あ、なおちゃんおせよー」やれこめす。桜井一等兵ただ今到着しまつた。」

リカはなおへの挨拶にジョークを交えた。なおは微笑しながら

「おはよ、あなたがヨーカさんが言つてこつたつむの団体のホープね。」

とリカは言つた。そつと言われてリカは

「とんでもない、なおさんの足元にも及びませんよ。」

と謙遜しながら否定した。香奈は一人の会話には混じらず、ただおじさまが来店するのをいつもの「」とく待つた。

「だつて私の師匠はプロ中のプロです。」

そのリカの言った一言が香奈をあわてて一人の会話に飛び入らせた。

「その人はどの団体所属ですか？」

その香奈の突然の質問にリカは困惑しながら

「どににも所属して無いわよ、本物のフリープロよ。」

とリカは答えた。それを聞いて香奈は黙つて元の位置に戻ろうとした。

「香奈ちゃん、おじさまのことだと思つたんでしょ？」

となおが明るく香奈に聞いた。リカは意味が分からず戸惑つていた。そのリカになおは

「おじさまはプロ団体に所属していて香奈ちゃんの好きな人なのよ。

」

とリカに説明した。

第71話 太陽の子

「ねえ、おじさまってどんな人？」

リカがそう香奈に聞いた。その突然の質問に香奈は緊張しながら

「私にとつておじさまは太陽であり、私は太陽の子供です。」

といつもと同じフレーズで説明した。当然リカには意味がわからなかつた。

「香奈ちゃんのキャッチフレーズは『太陽の子』ね。」

となおは笑顔で香奈に語り掛けた。キャッチフレーズと言われても香奈にはさっぱりわからなかつた。

「いーなあ。私もキャッチフレーズが欲しいなあ。」

とリカがなおにねだつた。

「そんなの自分で考えなさい！私だつて無いのだから。」

となおはリカに言い返した。こうして一人が欲しがるキャッチフレーズを得た香奈だが、価値がわからないからつれしいと思わなかつた。

そんな香奈を見てなおが

「もう喜びなさいよ。キャッチフレーズで目立つようになれば、お

じわまが香奈のことを見つけてくれるわよ。」

と香奈を叱った。そう言われて香奈は真剣になお

「め、皿立つよにならねばいいんだからここですか？」

と聞いた。香奈は早くおじわまに逢いたいことこのままで持ただから、真剣そのものだった。そう香奈に聞かれてなおは

「やうねえ、タイトル取るのが一番だけじ香奈ちゃんはBリーグからスタートだから……」こじで頑張る」とよー・やうすれば評判になつておじわまの耳に入るから。」

と香奈にアドバイスした。それを聞いて香奈は喜び勇ながら

「頑張りますー！」

と明るく言った。

第72話 3回目の研修

香奈は目立てば、おじさまに知られて、おじさまが香奈を見に来てくれると信じ、ずっと頑張り続け、キヨウカを喜ばせる程の働きをした。

そして3回目の研修の日が来た。指導係のキヨウカは香奈のことが心配で、不安になりそuddたが

（牌譜の書き方は予め教えたし、本人は努力して覚えたから大丈夫だろ。）

と安心していた。

香奈はいつも通り早く来て隅で縮こまっていた。キヨウカはそんな香奈を無視して、研修の係に指示をして研修の準備をした。

「おはよー。」

「お、おはよー」やこします。」

リカだけは隅に縮こまっている香奈に挨拶をした。

相変わらず香奈は緊張したままでリカに挨拶を返した。

「研修を始めるからみんな座つてー。」

キヨウカの号令で研修生達は各自卓を囲むように椅子に座った。遅れて香奈は空いてる席に座った。

「それでは3回目の研修を始めます。」

キヨウ力の講義で3回目の研修が始まった。今回は採譜の研修で香奈は予め予習していたから、授業には着いていく事が出来た。

しかし、実戦が始まると香奈は他の人達より動きが遅いから、香奈の所だけ研修が進まなくなつた。

「もういいわ、山本くん代わってー！」

キヨウ力がいらついて香奈をまた外した。香奈は外されたくないから、離れた場所から採譜を続けようとした。

だが進行は香奈のスピードに合わせてくれない。香奈が書いてるうちに手はどんどん進み、香奈は追い付けないことを自覚せられるだけだった。

第73話 キョウカの決心

キョウカは香奈が採譜が出来なくても問題ないと思つて、香奈をほつたらかしにした。

香奈は自摸と捨て牌が抜けまくつた自分の採譜用紙を見て、少しずつ頑張る意欲を無くしていた。そしてとうとう採譜をすることをあきらめた。

打ち手と採譜者を交代しながら研修が進んだが、香奈だけは止まつたままだつた。キョウカは香奈を気にしたが、香奈の相手などしていられないでのこの時も放置だつた。

各自の採譜の確認、指導が終わり3回目の研修が終了した。別にペーーの新人に採譜を頼むことは団体としては無いから、今回の研修で採譜がマスター出来なくとも問題無かつた。

キョウカは研修生達に期待していないから、終了の挨拶も手短に終わらせ、研修を終了した。

そしてこれから片付けよつとしたときに、香奈がヨーカの前に現わされた。香奈は泣きながら

「わ、私プロにはなれません。おじさまの採譜を出来ない駄目な子です。」

とキョウカに訴えた。キョウカは香奈を放置していたことを申し訳ないと思いながら香奈に

「馬鹿ね、おじさまはあなたが一人前のプロになるのを待ってるのよ。こんなことで挫けちゃ駄目でしょ、あなたは太陽の子なんだかう。」

と香奈をなだめた。続けてキョウウカは

「ま、頑張りなさいーーおじさまが待ってるわよ。」

と香奈を励ました。それを聞いて香奈は泣くのを止めて

「は、はい。」

と返事した。キョウウカは香奈を「こまでもやせやねおじさまつていつた
い誰？」とおじさまを捜し出す決心をした。

キヨウカはおじさまを探すことにしたが、肝心のおじさまの情報が無くて探しようが無かつた。それにキヨウカは従業員の給与計算で忙しくて探す暇すら無かつた。

給与は普通の会社と違い、従業員は店での負け分を給料で払つてゐるから、その分も計算しなければならなかつた。

麻雀は四人揃わないと出来ないとから、人が足りない分はメンバーが入つて、一緒に麻雀を打つことになる。これを雀荘では本走といつ。その本走でメンバーが負けたら負け分を給料から払うことになる。当然負け過ぎれば給料が残らず、そのメンバーはやめていなくなるだろう。

だから雀荘は従業員が定着しづらく、慢性的な人手不足になる。サンフランシスコも例外ではなく何人も経済的に続かずやめていった。

キヨウカは全員の分を終え、ほつとしだが香奈を忘れていたことに気付き、その場であわてて計算することにした。

キヨウカは一つの不備に気付き、計算を止めた。香奈の時給を決めてなかつたのである。キヨウカは香奈を練習で店に呼んでいたから、時給のことをするつかり忘れていた。香奈を他の従業員と同じ時給にするのは抵抗があつた。何故なら香奈は本走していないからである。

他の従業員には本走の負けを考慮して、時給を高くしていきたから香奈も同じ時給には出来なかつた。

しかし、香奈田当てで来店する客が居るほど、香奈は集客で店に貢献していたから、その分を考慮して考えないとキョウウカは感じていた。

第75話 次のステップ

研修が終わり、本格的に銀河プロ麻雀連合の女流プロになった香奈だが、プロとしての自覚はまったく無かつた。

香奈はプロになりたいのではなく、おじやまと同じ団体に所属したいだけである。

だからおじやまが違う団体に所属しているのならば、すぐにでも銀河プロ麻雀連合をやめて、おじやまの居る団体に入ろうとしていただろう。

香奈が正式にプロになつたにもかかわらず、前と変わらずにサンフラーに居る時にキヨウカが遅れて出勤してきた。

香奈はキヨウカを見て採譜が出来なかつたことを思い出し、あわてて採譜の練習をしようと、採譜用紙を探そうと周りを見た。

「ここにも採譜用紙が無く、香奈はあわてふためいてヨーカに

「さ、採譜用紙無いですか？」

と聞いた。その質問にキヨウカは

「香奈、採譜なんか出来なくていいから今は仕事しないー。」

と香奈を怒鳴り付けた。キヨウカに起こられた香奈はおとなしく定位置に戻つた。

カウンターに入つてキヨウカは香奈に

「香奈、今は勤務時間中なんだから、仕事しないとおじさまは香奈が仕事をさぼつて遊んでると思つわよ。」

と忠告した。そうキヨウカに言われて香奈はすぐに採譜のことを考えなくなつた。この頃にはキヨウカは香奈の操縦の仕方を理解していた。

しかし、キヨウカは香奈をただの従業員として扱うわけにはいかず、プロとして育てなければならないから、次のステップに進めることを考えていた。

ただ香奈が次のステップに進められるか疑問だつた。

第76話 初めての給料

次のステップとして、キヨウカは香奈に本走させることを考えていた。

本走とはお客さんが四人揃わない時、足りない人数分メンバーが入つて卓を立てていた。この時メンバーに入る行為を本走といい、この時負けた場合、負け分は自分持ちである。

何故負け分が自分持ちかというと、負け分を店が負担すると、お客さんと組んでわざと負けるような不正行為をする人間が出てくる。そのような不正行為を阻止する為に負け分はどの雀荘も自分持ちにしている。

キヨウカはさすがに香奈が不正行為に走るとは思ってはいないが、負け分は香奈自身が払わなければならないから、本走させるのをためらつた。

負け分を店持ちとかで香奈だけを優遇するわけにはいかないから、キヨウカは香奈を本走させることをあきらめた。

香奈の勤務時間が終わった。

「ちょっと香奈、一回ちに来なさい。」

キヨウカが香奈を呼んだ。香奈は何事かとキヨウカの元にに向いた。キヨウカは封筒を取り出

「香奈、給料よ。」

と言つて香奈に封筒を渡した。キヨウカから封筒を貰つた香奈は何の事かわからずただ戸惑つた。

「ほら、早く中身を開けて確認しなさい。」

相変わらず動きの鈍い香奈に、キヨウカはそう言つて催促した。香奈がおそるおそる封筒を開けると一万円札2枚と千円札が数枚と小銭と給与明細書が入つていた。

香奈はキヨウカからお金を貰えたことに激しく驚いて、その場で硬直したまま動かなくなつた。

第77話 聖地サンフラン

キヨウカは香奈が何も言わないので、給料の金額が不服なのかと思い「文句あるの？」

と不満そうに聞いた。キヨウカにそういう言われて香奈はあわてて

「あ、ありがとうございます。」

と言った。香奈は不満どころかうれしくて仕方がなかつた。新宿までの毎日の交通費が馬鹿にならないし、プロ団体への会費とか出費が多くて経済的に苦しかつたから、少なくとも給料が貰えるのは幸いだつた。

キヨウカは香奈の煮えきらない態度にいらついてそのまま香奈を放置した。香奈はキヨウカが何も言わないから普通に

「ありがとうございました。」

と言つて帰つた。給料の中身だが、キヨウカは香奈が本走をしていないから、他のメンバーの半分の時給にした。香奈曰く、この客が居ても時給を上げる理由にならないから、半分という決定は変わらなかつた。

逆にリカは他のメンバーよりも時給が高く、本走も黒字だつたから、香奈よりも遅れて入つてきたけど香奈より給料が多かつた。

香奈は自宅に向かつて歩きながら、給料の意味を少しずつ理解し始

めていた。

（おじさま、香奈は給料を貰えるくらい頑張りました。）

香奈はまだ見ぬおじさまを思い、やつらぶやいた。

家に着いても、香奈は両親に給料のことは報告しなかった。両親に黙つてサンフリワーで働いていたから、報告して怒られてサンフリワーに行けなくなるのを恐れたから。

香奈にとつてサンフリワーはおじさまに逢えるチャンスの場だから、サンフリワーに行けなくなるよいなことは絶対したくなかった。

第7・8話　両親には内緒（前書き）

諸事情によりヨーカの名をキョウ力に変えました。正式には水野京花になります。

第78話 両親には内緒

家に帰り、香奈はすぐに部屋に入りPCを起動した。目的はおじさまに給料を初めて貰つたことを報告する為である。

おじさまのエムの『希望の丘』にアクセスして、掲示板に香奈は「初めて給料を貰えました。」とついしそうに書き込んだ。

香奈は正式にプロになつたといつ自覚も無く、プロに成れてないと思い、おじさまにサンフランコワーレ来て欲しいと頼む勇気が無かつた。

ただ給料を貰えたことだけを報告し、それに対してのおじさまのお褒めの言葉を期待して、おじさまのエムを閉じた。

夕食時、香奈は両親に初めて給料を貰ったことや、サンフランコワーレで働いてることを一言も語らず、ただ黙々と食事を取つた。

香奈の両親達は香奈が毎日出歩いているから、香奈の社会復帰が近いと密かに喜んでいた。だから就職して給料を貰えるまでになつたと知つたら、手を挙げて喜んでいただろう。

しかし、勤め先が雀荘だと知つたら顔色変えて香奈をやめさせていた。それだけ世間一般では、雀荘はパチンコ店や飲み屋みたいな扱いで、大事な娘を働かせれるよつたな場所だと思われて無かつた。

香奈は雀荘がそんな風に思われていることは露知らず、いつもの警戒心から両親に語らなかつただけだつた。それ以前に香奈は雀荘がどんなところかわかつていなかつた。

仮に語つても両親の説得には耳を傾けなかつた。それだけサンフラワーはキヨウ力の趣味で綺麗に飾られた場所で、何よりおじさまに逢える唯一の可能性のある場所だつたから。

第79話 香奈に振り回されるキョウカ

香奈は両親にすべてを内緒にしたまま、部屋の中で採譜の練習を始めた。

おじやまの採譜をするのは自分だと思い、ただひたすらそれだけ努力し、疲れて就寝した。

次の朝、香奈は起きたとすぐにおじやまのエマの希望の丘を見たために、PCを起動した。

希望の丘のトップが出ると、香奈はすぐに掲示板に行き、香奈へのおじやまのコメントを見た。そこには

おめでとう、これからも継続して貢えるよう頑張りましょ。

と書かれていた。ささやかなコメントだが、香奈には涙が出てくるほどうれしかった。

香奈はうれしくて、すぐPCを止めてサンフランシスコに向かうことにした。目的は当然おじやまに巡り会うことだった。

その頃、キョウカは今日はなが居るから、休もうかと思っていた。キョウカはシフト的にはいつでも自由に休める立場だから、今休みに決めても問題なかった。

しかし、香奈が毎日休まずサンフランシスコに出勤するから、キョウカは香奈の面倒を他の人に任せられない以上、キョウカは香奈に合わせて出勤しなければならなかつた。

（なおなら別にまかせても問題無いけど・・・）

キヨウカはなおなら香奈を任せても大丈夫と思つても、香奈は世間から見ればもうただのメンバーではなく、女流プロである。

麻雀を打たせられないプロなんて団体の恥だから、キヨウカはそんな恥ずかしいことがばれないように、香奈を監視したい気分でサンフラーに向かつた。

第80話 キョウウカの憂い

香奈はおじさまに会いたいからと、急ぐかと思えば逆に緊張して動かがきこひなかつた。

それでもサンフリワーに向かつて取りは早く、キョウウカよりも早くサンフリワーに着いた。

中におじさまが居るかもしないと勝手に思い、香奈はドアをゆっくり開けた。しかし、店の中はいつもと変わらない風景でおじさまらしき人は居なかつた。

「あ、おじさま、今日も出勤？ 偉いわね。」

香奈を見てなおはんづ香奈に言つた。心ここに在らずして、香奈は周りを見渡して

「お、おじさまは来てないですか？」

となおに尋ねた。なおは首を横に振り、それを見て香奈は元氣を無くした。

「香奈ちゃん、おじさまは都合良べりに来れない立場だから、せめて香奈ちゃんがじいじで頑張つてね」とがおじさまの耳に入るよつに頑張りましょ。」

となおは香奈を励ました。

「はー。」

香奈はなおに励まれ元気を取り戻した。

「おはようございます。」

リカだつた。リカも南に借りた10万円を返そつと、ほとんど毎日出勤していた。

香奈となおとリカが居るから人件費的にキヨウカは出勤する必要は無かつた。しかし、キヨウカは香奈がプロなのに麻雀を打たせられないレベルだとばれないようにしなければならなかつた。

その頃、キヨウカは息を切らせながらも無事新宿に到着し、そしてサンフランキーに出勤した。

「おはよう。」

キヨウカはあわてて店に入り、普段より元気な香奈を見て、気落ちしていた。

第81話 キョウウカの決断

キョウウカは、香奈におじさまが本当にプロならこんな安い雀荘じゃなく、もっと高いレートの雀荘に行くわよと言いたがつたが、言つたのをあきらめた。

そう言つたら、香奈は本当に高いレートの雀荘におじさまを探しに行くだろ？。

キョウウカは香奈を危険な田に合わす訳にはいかないから、おじさまがサンフラーに来ないことを香奈に言わなかつた。

そんなキョウウカの気遣いもわからず、香奈はおじさまに讃めてもらおうとメンバー業務に励もうとしていた。

ただキョウウカが本当に危惧しているのは、香奈を見に来る人間が他に居ることだつた。

香奈がなおの気遣いで、銀河プロ麻雀連合のHPでキャッチフレーズが『太陽の子』と会員紹介の香奈の欄に記載されていて、一緒に打てる店としてサンフラーが書いてあつた。

他の新人達は自己紹介欄が空白で、香奈だけ目立つていた。これがリカならキョウウカは心配してないが、香奈だから激しく心配した。

香奈に興味を持つた人達が香奈を見て、プロの印象を悪くするのをキョウウカは恐れ、香奈を打たせないようにしたかった。

だけど香奈をやめさせることは出来ないから、キョウウカは香奈が普

通に打てるみつかるしかないと想い、香奈を指導する」とした。

丁度、なおも居るから香奈を指導するチャンスだと思つた。それで
キョウカは香奈に

「香奈、次卓に入つて麻雀を打つてもらうわよ。」

と言つた。しかし香奈は前に卓に入つたら、都合良くあじまと打
てないと言われてたから激しく拒否した。

第82話 本走前

本走を激しく香奈に拒否されたキヨウカだが、香奈の都合など気にせずに

「あんた今ままだとおじさまと打つたら恥かくだけなんだから、今のうちに練習しなさいよ！」

と香奈を怒鳴り付けた。

そうキヨウカに怒られた香奈は、何も言わずすぐに卓に向かった。香奈は麻雀が出来なかつたら、おじさまに努力してないと思われるから、すぐに麻雀をする決心をした。

しかし卓に向かつたまではいいが、卓はまだ準備中で、香奈はどうすればいいかわからなかつた。その間、なおは準備を進め、客達からゲーム代を取り出した。

香奈はあわてて財布から一万円札を出し、他の客みたいに現金をカードに換えようとキヨウカの元に向かつた。

「こりないわよー！」

キヨウカはそう言って香奈をはねつけ、カードの入つた籠を香奈に渡した。香奈は意味がわからずキヨトンとしたままだつた。

「早く行きなさいよー！」

キヨウカは訳もわからず立ち止まつている香奈を怒鳴り付けた。キ

ヨウ力に怒りて香奈はあわてて卓に戻つた。

「香奈ちゃん！」よ。

なおが香奈に座る場所をやせじへ教えた。香奈はわけわからず、なおに言われるままそこに座つた。

続いてなおが香奈の下家に座り

「高木、本走に入りまーす。」

と言つた。香奈は意味わからずなおの言つたことを聞いていた。

「香奈ちゃん、本走に入るつて言わないと、お姉さんが代走と勘違
いっつやつだしょ。」

となおが香奈に教えた。

香奈はなおに言われたことの意味がわからない。代走と本走の意味がわからないから、ずっと困惑したままだった。

「香奈ちゃん、小林本走に入りますと言えばいいのよ。」

となおが香奈にやさしく教えた。 そななおに言われて香奈はあわてて言おうとしたがキヨウカが

「もういいからさつと始めなさい。」

と言つてゲームのスタートを強要した。 なおはキヨウカに言われるままゲームを始めることに

「「」の子本走初めてだからお手柔らかにお願いします。」

と他の客達に言つた。 「」して香奈は西家から始ました。

キヨウカが監視する中、東場1局が始まった。 配牌を南家の後で取り、キヨウカは一つ安心した。

しかし配牌を取り終わると、バラバラな手牌を直そうとして香奈は手間取つた。

「香奈、自摸番よ。だから早くしなさい！」

手牌しか見ていない香奈にキヨウカからのカミナリが落ちた。 香奈はあわてて自摸ろうとするが、場所がわからない。 お客さんに「」

だと教えてもらつて香奈はあわててそこから牌を取つた。

取つたはいいが、手牌がバラバラでそれが必要牌かわからない。香奈は早くどれかを切らないとキヨウカに怒られると思い、わかりやすくかつた北を切つた。

（もー、何で北から切るのよ。）

キヨウカは対子になつてゐる北から切つた香奈にイラついた。キヨウカから見れば他に孤立してゐる牌があるので、それから切ればいいのじやないのと思った。

第84話 なおの思惑

北を切つた後、香奈はゆっくり手牌の並び替えを始めた。他の三人は並べながら自摸をして他の牌を切つて、瞬く間にまに香奈の番になつた。

「香奈ちゃん、自摸番よ。」

なおが香奈にそう催促した。香奈はなおに言われて、あわてて手を伸ばして牌を取つた。

そしてあわてて切ろううと手牌を見渡し、一枚だけある北を切つた。香奈の河に北が二つ並び、他の三人は香奈が何を狙つてるか、考えながら手を進めた。

しかし、香奈の狙いは後ろから見ているキョウ力にもわからず、香奈自身わかつていなかつた。

（あ、痛ー。）

なおの手牌で北が重なつた。しかし北は一枚切れてしまつて、北家のなおは北を役牌として使えなかつた。

なおとしては北を鳴いて安く場を進めたかつた。何故なら香奈を負けさせて、損させたくなかつた。自分自身も損したくないし、かといつて他のお客様さんに重い負担をかけさせる訳にはいかなかつた。

故になおは点差を小さくして場を進めたかつた。ただ北を鳴けなかつたから、なおが思い通りに場を進めることが出来なかつた。

自摸番の度に荒てさせられる香奈は、手牌を解す為に上家の捨てた4索を鳴いた。

「チツ、チー。」

そう言つて5索と6索を手牌から摘まんで右側に置き、手牌からいらない牌を切り、4索を上家の河から持つてきた。

（もう、何やつてんのよー。タンピン三色が無くなつたじゃないの。）

キョウカは心の中でそう怒つた。後ろでキョウカが怒つてるのも知らずに香奈は手牌が分かりやすくなつて喜んだ。

第85話 なおの方針

香奈の鳴きを見て、三人は香奈が鳴きタンを狙つてると思った。

しかし香奈は周りからせかされていましたから、役など考えている暇など無く、ただ単に手牌を解す為だけに鳴いていた。

香奈の鳴きを見て、なおはこの局は香奈にあがらせようとして、自分自身は動こうとしなかった。逆に客一人は香奈の手が安いと思い、積極的に手を伸ばした。

「ポ、ポン」

香奈は対面から出た四万を鳴いて赤五万を切った。香奈は赤で貰える祝儀の価値を知らない（サンフラワーではカードだから香奈はわからなかつた。）から平氣でそんな鳴きをした。

キョウカは香奈の仕掛けにはもう呆れて何も言えなかつた。

「ツ、ツモ、500、1000のい、一枚。」

香奈がタンヤオ赤一をあがつた。長くサンフラワーに勤務して卓上のやり取りを聞いていたから、申告は問題なく行えた。

三人が点棒と100円分のカードを一枚ずつ香奈に渡した。香奈はそれらを無言で受け取り、点棒とカードを仕舞い出した。

香奈がそれらを仕舞う頃には、もう次の局の準備が出来ていて、香奈が追い付いた所で次局が始まった。

なおは前局香奈があがつたこと少し心に余裕が出来ていた。安く局を進めるのに香奈が協力してくれるのは、なおことって凄く都合のいいことだった。

この局、なおは香奈の動向に合わせることにした。香奈があがりに向かうなら、なお自身は抑え、香奈があがれそうに無いなら、なおがあがりに向かおうと考えていた。

東2局

香奈はプロテストに合格したくて必死に麻雀の勉強をした。だから役や点数計算は完璧だった。

それで今回もタンヤオにしようと一万を先に切り出した。

（何やつてんのよー出来面子じゃない。）

後ろで見ていたキョウウカが香奈の打牌に激しく呆れた。

香奈はタンヤオで手を進めようとしたが、上家の手が悪いのか中々鳴ける牌が捨てられなかつた。その間隙を縫つてなおがピンフをテンパイした。

なおはピンフ赤ドラ1だからリーチを掛け満貫にしたかつたが、香奈が振り込んだ元も子も無いのでダマテンにした。ほどなくなおの下家がなおの当たり牌を切つてくれたので

「ロン、3900の一枚。」

となおは下家のお密さんからあがつた。

「それリーチだよ。リーチなら切らなかつたのに。」
とぼやいた。

「やつ思つてリーチを掛けなかつたんだから。」

となおは場を和ますようにと言つた。香奈はなおの手牌を見た後、何事も無かつたように自分の手牌を崩して、中央の穴に入れた。

リカはキョウ力となおを一つの卓に取られていたから、一人でんてこ舞いしていた。

お密さんが来店したので、なおの所に案内しようと思つたが、香奈の指導をしている最中だから案内を諦めて

「すみません、今東2局なのでしばりへお待ちください。」

と説明してお密さんを待たせる」とこした。

東3局

香奈の親番である。香奈は手つきは慣れてはいないが、無事親として局を始めることが出来た。

第87話 混乱する香奈

東3局

香奈の親番である。配牌と第1自摸を取った香奈は一番に捨てなければならない。

手牌全体を見渡して香奈は中が三つあることに気づいた。中が三つあればそれだけで役だから、無理にタンヤオを狙う必要は無い。香奈は少し気分が楽になった。

しかし、逆に何を切ればいいかわからなくなり、香奈は混乱した。一生懸命理牌する香奈、他の三人は玉つて香奈が切るのを待つた。

「左から四番目を切りなさい。」

キヨウカからだつた。香奈はあわてて左から四番目の中を切つた。なおは香奈が切つたのを確認して自摸を始めた。

大業を成した気分で香奈はドキドキしながら休んだ。

「早く理牌しなさい！自摸番が来るわよ。」

キヨウカはのんびりしてゐる香奈に催促した。キヨウカに煽られ香奈はあわてて理牌を始めた。だけどすぐに香奈の自摸番が来た。

香奈はあわてて山から牌を取り、先程と同じ状態になつた。むしろ前より厳しくなつた。香奈は何を切つていいかわからない、今度はキヨウカは口出ししなかつた。

香奈はさつきのキョウカの指示から、字牌が一番要らないと思い、あわてて東を切った。

（また、何考えてるのよー）

キョウカは香奈の判断に呆れるしかなかつた。香奈は役が一つあればいいと思っていたから、東は必要だと思ってなかつた。

キョウカからしてみれば、三枚あれば一翻になるダブ東を早く捨てるのはもっての他で、香奈が麻雀をわかつてないのが十分にわかつた。

第88話 カン（前書き）

自分の携帯ではカンとコンシャンを漢字変換出来ませんでした。

香奈がダブ東を切ったから、三人は香奈の手が早いと感じた。なおはこの局は香奈があがると思い、被弾を避ける為に受け身の体制にした。

この局も香奈は鳴いて手を進めたかつたが、香奈の上家が牌を絞つて香奈に鳴かれないようにしていたから、香奈は鳴けなかつた。

しかし、面前でも手が進み、香奈は四枚目の中を持つてきた。

「カ、カ、カン。」

香奈は中を暗カンした。手順は今まで他のお客様のを見ていたから、それを真似してリンシャン牌から一枚持つて来てテンパイして不要牌を捨てた。

（何やつてるのよー）（はリーチでしょ。）

キョウカは香奈がリーチを掛けなかつたことについてついた。

カンドラが増えたのにリーチをしなかつたら、他の三人が裏ドラ期待で前に向かつてくるから、それらを押さえ付ける意味で香奈はリーチをするのが戦術だつた。

香奈は役牌という役があるから、リーチを掛けける必要は無いと思っていた。それに香奈は順位を上げることなどまったく考えていないから、わざわざ面倒なことをしようと思わなかつた。

香奈がリー・チをしなかつたからなおはほつとした。ここで香奈がリーチをしていれば香奈が勝ち過ぎて、他のお客さん申し訳ないとこうだった。

しかし、香奈がカンをしてカンドラを増やしたから逆に他のお客さん達が、大きく勝つ可能性が出てきたから、なおは対処に困った。なおがあがつてこの局を終わらすのが、なおにとつて最適だが、なおは手を遅らせていたから、この局は無事流れることを願うしかなかつた。

カンドラが増えたから、客一人は積極的に前に出てきた。

「ロ、ロン3400」

香奈が香奈の上家が無造作に捨てた5索で出あがつた。中のみ70符1翻3400で、申告には問題無いから、キヨウカはあえて何も言わなかつた。

東3局1本場

今回は白が対子だつた。香奈は一枚しかない発を第1打に選んだ。キヨウカからみればプロらしくない1打だが、もう香奈にプロらしいことを期待するのはあきらめたから、何も思わなかつた。

「ポン。」

なおからだつた。なおはプロの性で香奈の親を流しに掛かつた。なおの戦略でいけば、ここは香奈に連荘させて香奈に点棒を貯めさせるほうがよかつた。

半荘は長いから、香奈が点棒をばらまく展開を想定し、香奈に親を続けさせて、点棒を蓄えさせるべきだつた。

「ツモ、300・500は400・600」

なおがツモあがつた。香奈はなおが四つも数字を出すから、いくら払えばいいのかわからない。他の一人が400点を払つたから香奈もあわてて400点を出した。

「香奈ちゃんは600点よ。」

となおが香奈に言った。そう言わされて香奈はあわてて200点を追加した。なおは香奈からそれを受けとり東3局は終了した。

その後右往左往しながら、香奈一位なお一位で終わった。

「2卓終了。優勝は会社です。」

なおがそう言つてリカに伝え、リカは結果を記帳した。香奈はなおの言つてゐることの意味がわからずただ黙つていた。

「ほい、お密さんを案内しなきゃいけないから、早く退きなさい。」

キョウカが香奈こそつて席を空けるよつて言った。そう言われてすぐに席を空けた。

第90話 思考の違い（前書き）

のべふろといふサイトで有料小説を始めました。
のべふろ

<http://www.novapro.jp/>

第90話 思考の違い

香奈は卓を離れ、いつもの立ち位置に戻った。

「リカちゃん変わつて、あたし疲れた。」

なおがそう言つてリカと代わつた。なおは香奈をうまくトップに導くのに疲れ果ててしまつていた。だからもう一度やれと言われたら、無理だと断るだろう。それくらいむずかしいことをやつてのけたのだった。

しかしそんななおの努力を知らない香奈は、相変わらず自分のことしか考えてなく、カウンターに戻つたキョウカに向かつて何かを話しかけたくてオドオドしていた。

「何が言いたいの？」

何も言えなくて、キョウカの前をうろつく香奈にそつキョウカが冷たく言い放つた。

「わ、私は合格だつたでしょ？」「

怯えながら香奈はそつキョウカに聞いた。キョウカは合格の意味がわからない、少孝して本走のことだと思い

「別にいいんじゃないの」

とせつけなく答えた。それを聞いて香奈はうれしくて

「あらがとうござまわ」

とキヨウカに礼をした。キヨウカは本走ぐらいで何で礼までされるのかわからなかつたが、すぐにおじやまと同卓出来るからかと思い、もつ氣に止めようとしたしなかつた。

しかし、香奈はそういう理由で礼をしたのではなかつた。プロとして合格かときいていたのだつた。

合格ならおじやまと同じプロ団体に居られる、それがうれしかつたのだ。プロとしては合格とはいえないが、その点は大丈夫だつた。何故なら香奈はプロを名乗る氣は無く、プロの権威を下げる」とはなかつた。

香奈がうれしそうにいつもの場所に立つてると、なおがカウンターに来てキョウカに

「リカちゃん強いわね。Cリーグの昇級候補ね。」

と話し掛けた。香奈はリーグの事をまったくわかつてなかつたが、なおが近くに来たのでなおの方を見ると、なあと目が合い、なおが「香奈ちゃんは関係ないわよ。香奈ちゃんは女流合格だから女流リーグにしか出れないの。」

と香奈に言った。香奈は女流合格も女流リーグの意味もわからない。だからわけがわからないままだつた。

続けてなおは

「女流リーグは女だけで対戦するけど、Cリーグは男の人達もいっしょに打つリーグで、香奈ちゃんはそんな大変なところで打たなくていいから安心していいわよ。」

と香奈に一つのリーグの違いを簡単に教えた。大変という意味は、リーグの成績の下位グループはリーグ陥落で、リーグ戦に出れなくなるのだった。

逆に女流リーグは、最下位でもそのまま次の開催されるリーグ戦に出来るから、何も問題が無かつた。

しかしそんな」とは香奈には関係無かった。

「わ、私もJリーグに出たいですー。」

と香奈は訴えた。突然の事でなおは理由がわからない。キョウウカはまたいつもことが始まったと嘆いた。

「駄目よ。香奈ちゃんは正規合格じゃないからJリーグには出られないのよ。」

となおが香奈を止めた。しかし香奈は

「せ、正規合格になるにはどうすれば?..」

となおに聞いた。Jの問い合わせなおは

「 もう一回試験を受けて合格しないと駄目よ。」

と説明した。

第92話 客達の不満

「もう一回試験を受けたいです。受けて正規合格になりたいですー。」

香奈は執拗になおに食い下がる。香奈はおじさまとこっしょに打ちたいから、これだけは譲れなかつた。

なおは困つた。プロテストは半年に一回で、まだ二ヶ月以上日があつた。それに香奈がまた試験を受けても正規合格するとは思えなかつた。

なおが何も言えなくて困つてると、横からキョウカが

「ちよつと香奈ー！リーグ戦は競争よ。おじさまを蹴落とさなきゃならないのだから。あなたおじさまを蹴落とせの？」

と言つて香奈を叱つた。

（おじさまを蹴落とす・・・）

とつやに香奈はリーグに参加する気が無くなつた。当然正規合格も逆になりたくくなつた。

なおは香奈が急に収まつたのでほつとしたが、お密さん達が手を止め一人を見ていたから、あわててなおが

「みんなお騒がせしてごめんなさい」

とお密さん達に謝つた。しかし客の一人が

「番奈ちゃんみたいなまじめないい子が合格じゃなくて、ちゃんとやったふざけたのが普通にコーリー¹グ戦に出でておかしくないか？」

となおに文句を言った。

「そーだそーだ」

他の客達も同意見でなおを煽つてきた。このことにキョウカは客達に「じめんなさい、この子は今日が本走初めてなくらい、まだ慣れてないから正規はまだ無理だったのです。それをわかつてもらえないでしょ²うか？」

と客達をなだめた。みんなキョウカの説明に納得し、また麻雀を始めた。

キヨウカは客達みんなが香奈を応援することに驚いた。

キヨウカはおじさまとに讃めてもらいたいと、不純な目的で香奈がプロになつたと軽蔑的な目で見ていたが、客はそんなことを知らないから、香奈は眞面目に頑張つてゐる子だった。

例え知つたとしても、けなげな香奈を応援することには変わりは無かつた。それくらい香奈はお客さん達の心を掴んでいた。

香奈が何故人気があるのか？香奈はおじさまに教えてもらつていることを下手ながら実践していたからだった。

香奈はおじさまに幸せを分けでもらえるようこゝ、お客さん達に幸せを分け与える努力をしていた。

下手だからキヨウカには分からなかつたが、お客さん一人一人には伝わつたから、香奈はサンフラワーでは人気者になつた。

キヨウカは香奈だけではなくリカも見た。リカも眞面目な姿勢がお客様さん達に評判が良かつた。

リカはいつも「師匠が」と明るく語るくらい、師匠の南を尊敬していた。その南から雀荘のメンバーの在り方を教わつてゐるみたいで、キヨウカはリカに何も言つ必要が無かつた。

なおもサンフラワーの要と言える立場で、店に貢献してから、キヨウカはなおにすべてを任せ、安心して店を休むことが出来た。

キヨウカは人気女流の確保で客を集客しようとしていたことが、浅はかな考え方であり、優秀なメンバーを揃えることが本当の集客に繋がるのだと、今さらになって気付いたと三人を見て自覚していた。

第94話 リーグ戦のしわ寄せ

キヨウカが新しい発見に喜び浸つてると対称的に、香奈はある種のストレスを増やしていた。

香奈は実力が付けば付くほど、おじさまに見せたくなり、おじさまのことを恋しくなるのであった。

しかし、香奈はおじさまが誰だかわからない、思いを伝えようにも勇気がなかつた。だから来るかわからないおじさまを待ち続け、来たかどうかわからない状態で居なければならなかつた。

香奈が帰る時間になつた。いつもならキヨウカは香奈を機械的に帰すが、今回は感謝の意を込めていた。

だけど香奈はいつもと変わらず、いつもより不満気に帰り出した。この態度にキヨウカはムツと来たが、これが香奈だからと、怒るのは無駄だと思い、あきらめた。

帰り道を歩きながら、香奈はおじさまがサンフラワーに来ていないのか、来ていても香奈がわからないだけなのかわからず、いつもより不満だつた。

しかし、香奈は発想を切り替え、香奈が対局する女流リーグにおじさまが観戦しに来てくれるとき勝手に思い、いつもの香奈に戻つた。

香奈が帰つた後、キヨウカは勤務体制をどうするか考えていた。次の日曜日からリーグ戦が始まるから、リーグ戦のある者は日曜日に出勤出来なかつた。

Cリーグはなおトリカが出るから、キヨウカは確実に出勤で、問題は女流Bリーグの日だった。香奈、なお、リカの三人が出るからその日はほぼ男のメンバーだけになるのが確定していた。

しかもキヨウカは女流Bリーグの立ち会いを頼まれていたから、余計悩むことになった。

第95話 安心する香奈

結局キヨウカは悩んだ末に文流Bリーグの立ち会いをすることにした。

香奈が何かをやっても、それを理解できるのは自分で、他人には香奈のやりたいことがわからないと思い、キヨウカはサンフラワーが休みになつてもいいから立ち会わなければならないと思つた。

ヒーリング当日、サンフラワーにはキヨウカと香奈と男のメンバーだけで、なおとリカはリーグ戦に出ていた。

その日に限つて香奈は落ち着きがなく、店の中をうわうわしていた。

その行動に耐えきれずキヨウカは

「ちよっと、香奈、あなた何したいの？」

と香奈を怒鳴り付けた。

「お、おじさまはけ、蹴落とされたりしてないでしょ？」

と香奈は恐る恐る聞いてきた。キヨウカには実に馬鹿げた質問である。そんなに知りたいなら、リーグ戦の会場に行つて見てくればと香奈を怒鳴りたかった。

しかしそんなことを言えば、香奈はすぐに会場に向かうだろ？。今日だって会場の位置がわからないから、サンフラワーに来てくるようなものである。

そんな香奈の思考を理解してキョウカは

「あんたおじさまが蹴落とされるわけないでしょーべからない心配なんかしないで仕事しなさい。おじさまに怒られるわよ。」

と香奈に言った。それを聞いて香奈はさつきの態度は何だったのかと思えるくらい、幸せそうな顔をしてメンバー業務に取り組もうとした。

(おじさまが蹴落とされるはずが無い)

香奈はさつ思い、安心しきつてこつもの香奈に戻った。

第96話 香奈の意欲

そんな香奈を見て、キョウウカはこの子にこれだけ思われるおじさまつていつたい何者?と思った。

ただ香奈と同じくおじさまの正体を知りたいキョウウカだが、肝心のおじさまに関する情報が無かつた。

香奈から聞こにも、香奈は相変わらずの返答だから、他に知りようが無かつた。

おじさまの手掛けりが無い以上、キョウウカは今さらながら、なおが香奈のプロフィールに太陽の子と書かせたのは、懸命な判断に思えてきた。

例えおじさまを探せなくとも、太陽の子のフレーズにおじさまが気付いてくれれば、おじさまの方から香奈に会いに来てくれる。そうキョウウカは考えた。

一つの卓が客が一人抜けて三人になつた。そして香奈が空いた席の前でそわそわと落ち着きの無い動きをしていた。

キョウウカは香奈が何をしたいか、とつたに気付き香奈に

「香奈、本走していいわよ」

と呆れるように言った。そうキョウウカに言われてすぐ香奈はそここ
座つた。

その卓におじさまらしき人物が居るわけでもなく、香奈は麻雀の実戦をしたかつたからだつた。

香奈はおじさまに讃められたいから、おじさまの前でミス一つ出来なかつた。だから少しでも練習して、本番に備えたかつた。

準備が終わると香奈は弱々しく

「い、小林本走ります」

と言つた。香奈はおじさまに讃められたくて、メンバー業務も頑張つて出来るようになつとしていた。

（頑張りなさい！）

キョウウカはいつのまにかけなげな香奈を応援するようになつて、そう思ひながら香奈に籠を渡した。

第97話 本走の負け

香奈は人並みに麻雀が出来るよつになつたが、とてもプロと言えるレベルではなかつた。

香奈は初めから勝ち負けにこだわつてなく、やつてゐる」とはただのパズルだつた。

ゆえに配牌と自摸で組んでいく、そこにはゲームらしい順位争いの駆け引きも無かつた。

それで香奈は順位にも点数にも興味が無かつたから、何でも牌を切つていつた。今回はなおのサポートも無く、みんな金を賭けてやつてるから容赦無く香奈から当たつた。

しかし、香奈は振り込んでもツモられても、ただ単に点棒と籠の中のカードが減るだけに過ぎないとまつたく氣にしてなかつた。

今回はキョウ力は後ろでチエックしていなかつたから、そんな香奈に気付かず、香奈を放置したままだつた。

異変に気付いたのは香奈がトビで終了した時だつた。香奈がハコラスになつた時にふと気になつて香奈の籠を見た。

次負けると足りない状態だつた。キョウ力はあわてて香奈に交代するよつに言つて香奈を卓から離した。

そしてそのまま本走することにして、香奈をいつもの立ち番に戻した。

慌ただしい状態ながら、キヨウカは香奈に本走をせるべきじゃなかつたと後悔した。

逆に香奈は涼しい顔をして立ち番をしていた。給料が減つたことに気付かず。

キヨウカが香奈に本走の負け分は自腹だと香奈に言つてなかつたら、香奈はいくら負けても気にしていなかつた。

他のメンバーがアウトと言つてカードを追加して貰つているのは、香奈はただ単にカードを補充してもらつてているだけだと思つていた。

第97話 本走の負け（後書き）

携帯版解説 : http://app.f.m-cocolog.jp
p/t/typecast/1174875/1195677
.

第98話 強くなる努力（前書き）

ブログで解説します。

携帯からは「コログから小説解説ブログで検索してください。」

第98話 強くなる努力

キヨウカは自分の席にお客さんを案内して、やつと香奈に説教出来るようになった。

「香奈、あんた負けたら給料が無くなるのだから、もつとつまぐなりなさいよ」

そうキヨウカに叱られた香奈だが、何で怒られるか意味がわからぬい。

「あんた負け続けて給料が無くなつたら、おじやまと打てなくなるわよ！」

キヨウカは香奈を心配してせらりと叱つた。香奈は負けたらおじやまと打てなくなると思い、急に慌てだした。

しかし相変わらず意味がわかつてないから、ただそわそわしているだけである。それを見てキヨウカは呆れて

「いい、メンバーは負けたら給料で払うの。雀荘は一円も出さないから。だから負け続けて給料が無くなつたらすつと立ち番なんだから」

とわかりやすく香奈に説明した。香奈はカードで支払つてゐるから、いくら負けたのかわからない。

しかし、前に貰つた給料が締め日とかの関係で給料がすくなかつたから、普段も少ないと思い、負けたらやばいと自覚した。

香奈はこの時一つの選択があった。一つはおじさまが来た時だけ打つところ立ち番オンラインの方法。

もう一つは

麻雀が強くなることだった。

香奈は即座に麻雀が強くなる方を選択した。何故なら普段本走をしないこと、おじさまに努力をしてないと思われるからだった。

おじさまの考えでいくと、勝てないから本走しないは、努力をする気が無いになるから、香奈は強くなる努力をしなければならなかつた。

第99話 逃げるキョウウカ

香奈は血走った目でキョウウカを見て

「わ、私強くなりたいです！」

とキョウウカに麻雀が強くなる方法を教えてくれと訴えた。キョウウカはこの香奈の態度に、とんでもないことをしてしまったと初めて自覚した。

香奈に麻雀が強くなる方法を教えるなんて、とてつもなく大変なことである。キョウウカはどう教えていいかわからず

「えーと、あの振り込んだら駄目よ。振り込んだら点棒が減るでしょ」「

キョウウカはなんとか香奈でもわかる方法を語ろうとする、しかしスイッチの入った香奈がその程度で納得するのか

「桜井一等兵、無事リーグ戦から帰還しました」

桜井リカだった。リカはリーグ戦が終わったから、サンフラワーに遊びに来たのだった。

「いらっしゃーい

キョウウカはそう言って目を輝かせ、リカを奥へ連れ込む。

「あんたちようどこいとこに来た。これから密打ちして香奈に見せ

てあげてよ」

とキョウウカはリカに頼んだ。リカは意味がわからなかつたが

「ええっ」

と言つてキョウウカの頼みを聞くことにした。

「じゃありカそこ入つてー」

そう言つてキョウウカは男のメンバーとリカを交代させた。そして香奈に向かつて

「リカの打ち方見て勉強しなさい。彼女がこの店で一番うまいのだから」

と言つて香奈をリカにかつつけた。香奈はキョウウカに言われるまま、リカの背後に回り、リカの打ち方を見ることにした。

キョウウカは香奈をリカにかつつけて、やつと心が落ち着くことが出来た。

第100回 強いリカ（前書き）

読者交流イベントのお知らせ

「太陽の子」祝100回記念&2周年を祝つて来る5月22日土曜日にネット麻雀天鳳http://tenhou.net/の個室を使って麻雀をしようと思います。

時間は20時から23時の間で、回数は無制限です。参加しなくても応募者全員に読み切り小説をプレゼントします。詳しいことは次回または小説解説用ブログで案内します。

第100回 強いリカ

リカは意味がわからず、密打ちをすることになった。わかってるのは勝ち負けは自腹で、後ろで香奈が見ていることだった。

カウンターでキョウカがほつとしていると、なおがリーグ戦から帰ってきた。

なおはリカが打つてるのを見て

「あら、リカちゃんほんと麻雀が好きね」

と言った。

「私がやらせたの。香奈にリカの打ち方を勉強しなさいと言つて」

とキョウカはなおに事の成り行きを説明する。それを聞いてなおは

「香奈ちゃんじゃあの子の打ち方はわからないわよ。押し引きの麻雀だから」

と言つてキョウカのやり方を否定した。それを聞いても、キョウカはもう香奈が強くなるのを諦めてたから、もうどうでもいいと思つてた。

「リカちゃん、リーグ戦四連勝。そしてあの子の言つこと「牌が私を勝たせてくれる」って。いつたい誰に教わつてるのかしら」

となおが嘆いた。キョウカもリカの強さに異常感を感じていた。

リカは爆発力があるわけではなく、それでいて後半のまくりがあつた。さらにリードを維持しての逃げきりが多かつた。

若い女の子が老練なテクニックを持つてゐるとは思えず、キョウカはリカの師匠とは誰なのが気になった。

気になつたのは香奈も同じで、後ろから見ていてリカに質問したがつていた。ただいつもの引っ込み思案が災いして、何も聞けなかつた。

そしてリカの打ち方は香奈じやなくとも疑問に思える打ち方だつた。リーチが掛かつてゐるわけではないのに、簡単に手を崩していた。

第101話 香奈の質問（前書き）

イベントですが22日の土曜日前にメールマガジンで天鳳の個室IRCをお知らせします。だから参加希望の方はメールマガジンに登録お願いします。そして登録者全員に読み切り小説をプレゼントしますから、参加しない方もメールマガジンに登録してください。携帯からでもOKです。

太陽の子オフィシャルメールマガジン：<http://www.magg2.com/m/0001130151.html>

第101話 香奈の質問

リカは意味がわからず、密打ちをすることになった。わかってるのは勝ち負けは自腹で、後ろで香奈が見ていることだった。

カウンターでキョウカがほつとしていると、なおがリーグ戦から帰ってきた。

なおはリカが打つてるのを見て

「あら、リカちゃんほんと麻雀が好きね」

と言った。

「私がやらせたの。香奈にリカの打ち方を勉強しなさいと言つて」

とキョウカはなおに事の成り行きを説明する。それを聞いてなおは

「香奈ちゃんじゃあの子の打ち方はわからないわよ。押し引きの麻雀だから」

と言つてキョウカのやり方を否定した。それを聞いても、キョウカはもう香奈が強くなるのを諦めてたから、もうどうでもいいと思つてた。

「リカちゃん、リーグ戦四連勝。そしてあの子の言つこと「牌が私を勝たせてくれる」って。いつたい誰に教わつてるのかしら」

となおが嘆いた。キョウカもリカの強さに異常感を感じていた。

リカは爆発力があるわけではなく、それでいて後半のまくりがあつた。さらにリードを維持しての逃げきりが多かつた。

若い女の子が老練なテクニックを持つてゐるとは思えず、キョウウカはリカの師匠とは誰なのか気になつた。

気になつたのは香奈も同じで、後ろから見ていてリカに質問したがつていた。たリカの打ち方を見て、香奈はリカにどうして手を崩すのかと聞こじつとしたが、どう質問していいかわからなかつた。

そんなうるたえる香奈を見てリカの対面が

「後ろ、何か聞いたそようだよ」

と言つてリカに香奈のことを教えた。それを聞いてリカはあわてて振り向く。

香奈はなんと言えば良いかわからず、ただ戸惑つていた。

「何なの? 何が言いたいの?」

不思議がつてリカが香奈に質問する。香奈はリカにそう問われて、言葉が出なかつた。

そんな香奈に呆れてリカはまた卓の方を見た。

「あ、あの、何で出来る物を壊すのですか?」

香奈は必死にそう質問した。

「え？」

リカは驚いて後ろを振り替える。香奈は相変わらず困惑つて、次の言葉が出て来ない。

「だつてこんなドラも何も無い手を進めても意味無いでしょーー」
「いつ
いう時は降りて無理しないのが一番よ」
とリカは香奈にやさしく説明した。

「へー、桜井プロはドラが無いのか」

リカの上家がそうリカに話し掛ける。あわてて

「あ、もういいんだときに聞かないでよー」

と言つて卓上に戻つた。

「い」めんなさいね。この子よくわからないものだから

キョウカがあわててやつて来て、お姉さん達に謝る。

「香奈、もういい方に来てなさい」

とキョウカが怒つて香奈はカウンターの前に連れ戻された。

第102話 加減（前書き）

イベントですが22日の土曜日前にメールマガジンで天鳳の個室IRCをお知らせします。だから参加希望の方はメールマガジンに登録お願いします。そして登録者全員に読み切り小説をプレゼントしますから、参加しない方もメールマガジンに登録してください。携帯からでもOKです。

太陽の子オフィシャルメールマガジン：<http://www.magg2.com/m/0001130151.html>

香奈は無理矢理キョウウカにカウンターの前まで連れてかれた。

「香奈ー、対局中に話しかけたりしゃべりでしょ。質問したいなら終わるまで待ちなさい」

キョウウカが香奈を叱る。そして

「香奈ちゃん、打つてる人に話しかけたら、おじさまに怒られるわよ」

となおがやさしく香奈に言つ。それを聞いてキョウウカはそんなこと言わないのでとなおに田で合図した。

なおはキョウウカの合図に気が付き、理由がわからないままその場は黙つた。

香奈はなおにおじさまに怒られると教わったから、この場はおとなしくしていだが、もう打つてる卓のそばに寄らうとしなくなつた。

そんな状態になることをわかつていていたキョウウカは小声でなおに

「香奈におじさまを使わないでよ、あの子加減わからないから」

と注意した。

「うーん、今度から安易に使わないよつとするから」

と黙つてなおはキョウウカに謝つた。

お客さんが打つてゐる間は、普通はドリンクお持ちしましょつかとメンバーには御用聞きの仕事があり、香奈はまだそれはせせてもらえたなかつた。

しかし、キョウウカとしてはそれぐらい出来るよつになつてもういたいと思つていてから、なおの言い方は逆効果だつた。

しかも香奈はただでさえ動きが遅く反応が鈍いのに、今回の件でますます反応が遅くなつた。

対局が終わつたのを香奈自身が確認しないと仕事に取り掛からなくなつたから。

キョウウカに一卓終わつたから片付けてと言われても、香奈自身が判別しないと、動かないのである。

香奈の中はおじさまへキョウウカだから、キョウウカよりおじさまに怒られないように香奈は努力するのであつた。

香奈の判断が遅くなつたとはいえ、サンフラワー的には何も影響が無かつた。

急ぎの仕事は他のメンバーがやるし、香奈の判断が遅くなつたのは、ゲーム中とゲーム後だけだから、取り分けて問題にはならなかつた。

「リカ、もういいわよ。そこに次のお客様を入れるから」

キヨウカは、リカの打ち方を香奈に見せる目的が失敗に終わつたから、リカを客打ちから外すことにして、香奈

終わつた後、リカが次のお客さんが入れるように準備をして、香奈は何もすることなくただ見ていた。

「疲れたー！」

リカはカウンターのとこに来てそう嘆いた。

「リカちゃん強いわね。何でそんなに勝てるの？」

なおがリカに質問をする。これは香奈がリカに聞けないのをわかつてゐるから、なおが代わりに聞いていたのだった。

キヨウカもリカの強さの秘密を知りたかつたが、先輩プロとしてのメンツがあるから、そんなことはリカに聞けなかつた。

なおのきめ細かい配慮とは知らずにリカは、眞面目に答えようと

「説明できるかわかりませんが、手牌に23と有つて3を引いてきたなら、その局は前に出ないという感じです」

真面目に聞いていたなおはその理由がわからず、キヨウカも同じくわからなかつた。

そして香奈は他人事の様にまったく聞いてなかつた。

「ちょっと香奈！リカが教えてくれてるのだから、あなたもちゃんと聞いてなさい」

とキヨウカは他人事の様に無関心な香奈を叱つた。

第104話 リカの説明

キヨウ力に怒られ、渋々香奈はリカの話を聞くことになった。

香奈が参加することになったりカは改めて話を始めた。

「23の時に、1とか4が来なくて、2とか3が来るのは1と4が他で使われる可能性が高いから、この局は前に出ないという判断です」

リカは三人に懇切に説明する。

「リカちゃんの師匠はデジタルなんだ。私はそんな理屈並べられてもわからないわ」

なおはリカの言つてることが難しい理論だと思い、早々と題を投げた。キヨウカもわかつてなかつた。

「違います。師匠は逆にデジタルを否定します。小さなデジタルの積み重ねが区分求積法みたいに、流れという曲線を証明していると、言つてます」

とリカがなおの判断を否定した。その返答はなおをますます混乱させ、なおはもう何も言わなくなつた。

「師匠は勢いを重視してまして、先程の23の時にシャンテン数が変わらないものを自摸つて来た時は、それだけ遅れてるから勝負をしないと判断します」

トリカは一生懸命説明する。しかし、なおはわからないと真面目に聞こうとせず、キヨウカはキヨウカで独自の理論があるからと話しあんまり聞いていた。

逆に香奈は真面目に聞いていた。香奈は押し引きの基準はまったく持つてなかつたから、何も書いてない画用紙に絵を書くようにリカの説明を受け入れた。

当然わかりやすい部分だけだが、それでも香奈にはものすごく参考になつた。

「もう、いいわ。これ以上聞いてもわからないから」

キヨウカの号令でリカの説明はお開きになつた。リカもこれ以上説明してもわかつてもらえないと悟り、話をするのをやめた。

第105話 迷える予兆

リカの説明会がお開きになり、リカとなおは明日に備えて帰ることにした。

香奈はリカの話を十分に理解してなかつたが、初めて押し引きを知つた。

ただ押し引きを知つただけで、それを勝ち負けに繋げる」とはまだわからなかつた。

「香奈、強くなないと給料が無くなっちゃつわよ」とキョウカが香奈に話し掛ける。香奈は強くなないと何故給料が無くなるのか意味がわからず、ただ黙つていた。

キョウカも香奈にはまったく期待していないから、そのまま香奈を放置した。

香奈は給料が無くなる仕組みがわからなかつたが、無くなるのは困るから、どうしても強くなりたかつた。

ただ強くなるの意味目的を十分理解してなくて、香奈は戸惑いそわそわした。

香奈は麻雀を入門書から学び、そこには麻雀が強くなる必要が書いてなかつた。ただ明るく楽しくやることしか書いてなくて、メンバーやきの本では無かつた。

香奈は給料が無くなるのは困るので、キョウカに麻雀が強くなる方

法を聞いたとした。

しかし、キョウカに聞いたらまた怒られるかもしれないと思い、キョウカの方を向いたが言葉が出なかつた。

そんな何かを言いたそつな香奈を見て、キョウカはもう帰りの時間かと思い

「香奈、もう上がりついわよ。忘れ物無によつこね」

と言つた。香奈はそんなことじやないと聞いたかつたが、キョウカが香奈の方を見ずに帳面を付け出したので、香奈は諦めて帰ることにした。

第106話 憤る香奈

帰りながら香奈は、麻雀を強くならないと給料が無くなると心配して、強くなる方法を考えた。

しかし、香奈は麻雀をよくわかつていない。当然方法など思い付かなかつた。

もう香奈に出来る方法は一つ、誰かに聞くことだつた。

ただ人間関係が乏しい香奈には聞ける相手が居ない。サンフランコワ－の人達は教える気配が無くて、香奈は聞きづらかつた。

そしてそんな香奈が思い付くのは“おじさま”だった。

（おじさまに麻雀が強くなれる方法を聞いりつ）

香奈はおじさまに質問できるのをうれしく思い、早く帰るのを取
りが早くなつた。

歩きながらおじさまにアドバイスを受けてるところを想像していく
ふと香奈は突然立ち止まつた。

（給料が無くなるからなんて言えない）

香奈はおじさまにそんな理由など言えなかつた。まあおじさまを
心配させじ、おじさまに迷惑を掛けることになる。

香奈はおじさまに麻雀が強くなる為の理由を言えなくなつたので、

すぐに代わりの理由を言いつと答えたが、すぐに今は思い付かなかつた。

そして香奈は他の理由を考えれば考えるほど、罪悪感で考えることが出来なくなつていつた。

(他の理由だとおじやおにに嘘をつけてはならぬ)

香奈はおじやおに質問することをあきらめた。

家に帰り、お通夜のよつて暗く部屋に閉じ籠つた香奈だが、プロ団体のパンフレットを見てあることに気付いた。

斎藤事務局長に聞くことだつた。

第107話 電話でのやり取り

香奈は斎藤に聞けばいいと思い安心した。すぐに斎藤に電話しようとthoughtが、さすがにまだ帰ってきていないと思い、今はあきらめた。

食事を取り、香奈はそれそこいかと思い、緊張しながら斎藤に電話をした。

「はい、斎藤です」

「」、小林で、す

斎藤はすぐにはわからなかつたが、このしゃべり方はと思い、香奈だと気付いた。

「小林さんね。今日はどうでしたの？」

「ま、麻雀が強くなりたいです」

「麻雀が強くなりたいか、それはいいことだね」

「給料無くなります」

「え、無くなるつてどうじうこと？」

「」

香奈は未だに給料が無くなる意味がわからないから、何も言えなかつた。

「水野さんはどんな風に言つたの？」

「負けたら給料が無くなると」

「そうだね小林さんはメンバーだから、負けたら給料が無くなっちゃうよね。所で、僕なんかよりも水野さんや高木さんに教えてもら

つた方がいいんじゃないの？」

「

斎藤は教わるならキヨウカなおに教えてもらつといと提案したが、香奈は黙つてしまつた。

斎藤は事情がよく飲み込めないが、キヨウカやなおに頼れないと思
い香奈に

「それなら日曜日だけお店に行こいつか？」

「はい」

「十時頃に顔出しね」

「はい」

「僕も強くないからうまく教えられないかも知れないけど、頑張つ
て小林さんを強くするから」

「はい」

「それじや日曜日ね」

「はい」

斎藤は電話を切り、香奈も受話器を置いた。

第108話 斎藤の来訪

日曜の朝、香奈はいつも通りサンフラワーに向かった。

斎藤が来る来ないよりも、いつも同じくおじさまがサンフラワーに遊びに来てくれるだけを期待していた。

キヨウカも香奈が休まない以上、サンフラワーに向かうしかなかつた。

前までは自分自身でも集客に使つつもりで、サンフラワーに出勤していたが、十分過ぎるほど客数が定着してきたから、キヨウカはもう集客の為に出勤する必要が無かつた。

しかし、香奈が何をしでかすかわからないから、なおの居ない日に必ず出てくるしか無かつた。

朝早く起きて、まだ寝ていたいのに起きて、キヨウカはサンフラワーに向かつた。

香奈はキヨウカよりも早くサンフラワーに着いた。なおは休みで居なかつたが、香奈はもうそのことに慣れたから、いつも通りの行動をしていた。

「おはよー」

眠たくて間延びした声でキヨウカは挨拶する。目の前にいつもの香奈が居る。

(何でそこまで頑張れるの？)

キョウカは香奈を見て呆れる。香奈が休めばこのまま寝るために帰るのでにと、不満に思いながらノートを見て売り上げをチェックした。

「いらっしゃい。や、斎藤さん…」

キョウカは突然の斎藤の来訪に驚いた。斎藤がわざわざサンフランコワードに来る理由は、断然香奈だった。

「香奈のことですか？」

キョウカはそう斎藤に聞いた。

「うん、小林さんが麻雀が強くなりたいといつから、僕が指導に来ました。」

と斎藤は言った。

第109話 そんなに立派ではない

キヨウカは斎藤の突然の来訪の理由を聞いて、顔を真っ赤にして

「香奈ーー何で斎藤さんが来ることを私に言わないのよー。」

と香奈を怒鳴った。その剣幕に斎藤は驚き慌てて

「水野さん落ち着いて、そんな風に怒つたら小林さんはもう僕に向
も言えなくなってしまうよ」

とキヨウカをなだめた。

「斎藤さんすみません。香奈の為にご迷惑を掛けて」

キヨウカは落ち着いて斎藤に謝った。

「逆ですよ。僕があなたに頼んだのだから、僕が謝るべきです」

と斎藤はキヨウカを止めた。それを聞いてキヨウカは斎藤に頼まれて香奈の面倒を見ていることを思いだし、冷静になった。

「水野さんに頼んで正解でした。彼女が麻雀を強くなりたいと思う
のはかなりの進歩ですよ。他の女の子達はそんな気配はまったく無
いですからね」

と斎藤ははつれしそうに語った。

(香奈のはおじさまと打ちたいとかの不純な動機だから)

キヨウカは香奈もそんなに立派じゃないと言いたかったが、うれしそうな斎藤を見ると何も言えなかつた。

「じゃ、小林さんを借りるね」

「は、はい」

「小林さん、あちらで勉強しようつか？」

斎藤が奥を指して香奈を誘つた。香奈は頷いて斎藤に言われるまま奥の卓に向かつた。

先程のキヨウカの怒鳴り声が香奈を萎縮せつていて、香奈はおどおどしながら卓に向けて歩いた。

そんな光景を見ながら、キヨウカは香奈もそんなに立派じゃないと不満に思つていた。

第110話 禁句

キヨウカが斎藤の対応を不満に思つてゐるときに入り口のドアが開き

「おはよーござります」

と明るく言つてリカが入つてきた。キヨウカはリカを見て、この子の方が純粋に麻雀を強くなるつと思つてゐるわよと愚痴をこぼした。

「キヨウカさん、おはよござります」

リカはキヨウカの気持ちを知らずに明るく挨拶する。

「あそこに斎藤さんが来てるから挨拶してきなさい」
いつもの厳しい顔でキヨウカはリカにそう指示した。

斎藤は香奈が麻雀に詳しくないのを知つていて、初歩的なことから教えることにした。

香奈は斎藤に受け入れ枚数とかの確率的なことを教わり、少しずつ上達していった。

「斎藤さん、おはよござります」

リカが斎藤に挨拶する。斎藤は驚き

「えと、君は？」

「今年入った桜井リカです」

「おお、名前は聞いてるよ。有望な新人だと話は聞いてるよ

「ありがと「ザ」ます」「先輩方を押さえてトップだなんてすごいね」

「師匠が師匠ですから」

「え、師匠がいるのか?」「はい、プロ中のプロです」

トリカが言い終えた途端にキョウウカが飛んで来て、リカを斎藤から引き剥がした。

リカは意味がわからずカウンターまで連れていかれる。

「あんた、プロ中のプロつて斎藤さんの前で言わないでよー。私達で麻雀プロを名乗ってる私達を否定していくことになるじゃない」

とキョウウカはリカを叱る。リカはキョウウカが怒る理由がわかり、あわてて

「「」めんなさい、もう言いません」

と謝った。

第111話 ミラクルハンター

キヨウカは、これ以上リカを叱る必要もなく、斎藤に麻雀を教わる香奈を遠田に見ながら、休まなくて良かったと思つた。

「私、あの光景を見て、おじさまが香奈に会いに来たのかと思いました」

トリカがキヨウカに話しかける。それを聞いてキヨウカは「馬鹿ねえ、あの人斎藤さんじやない。プロテストの面接の時に居たでしょ」

と呆れてリカに言つ。キヨウカはリカの勘違いに呆れながら香奈と斎藤を見つめ直した。

（確かに見た日はおじさまと香奈ね）

キヨウカはリカの勘違いに困らずも同意する。

（本当に斎藤さんがおじさまかも…）

そうキヨウカは閃いて二人を見つめる。

（ミラクルハンター）

キヨウカは香奈があまりにも奇跡を起こすので、そつ香奈を心の中で呼んだ。

香奈は齊藤に基本的なことを教わり、少しづつ麻雀がわかつていつた。

齊藤も香奈には難しことはわからないと思ひ、簡単な話に徹した。

指導は一時間ほどで終わり、齊藤は席を立ち、帰ることにした。

キヨウカはあわてて齊藤を見送りうとしたが、香奈の相変わらず淡白な対応にイラつき、香奈を怒りうとした。

香奈に向かつて、齊藤さんがおじをまと詠おうとしたが、思わず咄嗟に止めた。

（香奈が齊藤さんをおじをまだと知つたら ）

齊藤がおじをまだつたら香奈は齊藤に何をしでかすか？まだおじをまだと決まつた訳じやないから、キヨウカは言ひのを止めた。

第1-1-2話 プロ批判

齊藤が帰り、香奈はいつもの立ち位置に戻った。

キヨウカは齊藤の指導結果を見ようと、香奈に本走をさせようかと思つたが、いつもの頼りない香奈だからあきらめた。

そして香奈の齊藤がおじさまではないという態度を見て、齊藤がおじさまであろうとからうつともうどうでもいいわと

普段の仕事に戻つた。

「さつしきの、香奈ちゃん補習か何か受けてたの？」

一人の客が近くに居たり力に聞いた。

「あ、あれは香奈が麻雀が強くなりたいからと齊藤事務局長に頼んで、齊藤さんがわざわざ来てくださったのですよ」

トリカは略に説明した。それを聞いた客は

「香奈ちゃん偉いよ。他のプロは遊ぶことばかりで、そういう努力を全然しないのばかりだよ」

と香奈を讃めた。リカはあまりの言い方に即座に反論したかったが、下手なことを言つてまたキヨウカに怒られると思い、この場は思い留まつた。

続けて他の客が

「そうそう、他の雀荘のプロなんか、よく明日はリーグ戦ですから頑張ってきますってブログに書いてるけど、お前普段から頑張ってないだろ、思わず突っ込み入れたくなつたよ」

と笑いながら相槌を打つた。

相次ぐプロ批判にリカは氣を悪くしたが、反論が出来ない。リカは氣分を害し、この場に居られなくなつて、すぐこの場から離れた。

このやり取りを遠くから聞いていたキョウカは、この一人のプロ批判に憤慨し、二人の入っている卓に向かつた。

第1-1-3話 キョウウカの不服

客の側によりキョウウカが

「木下さん、私達も勉強したり努力します。みなさん知っているように、本走の負け分は自腹です。だから負けないようみんな努力します」

と力説した。それを聞いて木下は戸惑いながら

「この雀荘のプロの話じゃないよ。他の雀荘のプロのことだよ。このプロ達はみんな頑張っているのわかっているって」

とあわてて弁解した。キョウウカはこれ以上言つ必要もなく、店の雰囲気を悪くしない為に

「わかつてもらえればいいです。確かに私達にも至らないところがありますが、決して手を抜いているわけではないことをわかつてください」

と謝るよつに言つた。そのキョウウカの態度に客達は感心し、もう何も言わなかつた。キョウウカもゲームの邪魔をしないよう、無言でカウンターに戻つた。

カウンターに戻つたキョウウカは疲れと溜め息を付きながら、香奈を見た。香奈は相変わらずおじさまのことを思いながら立つてゐるみだつた。

(何でこの子ばかり評価されて、私達が評価されないのかしら?)

キョウカはそう心の中で思いながら、不満げに仕事を続けた。

女流Bリーグの日が来た。香奈はリーグ初参戦だった。女流Bリーグには香奈の他におとり力が参加していた。

女流Bリーグの立ち会いは普通は男子プロが行うが、今回は新人指導の名目で、女流Aのキョウカが立ち会うことになった。

キョウカは、話を受けた時は店の都合もあるから、断るつもりだった。しかし香奈が出る以上、仕方なく引き受けることにした。

第114話 女流リーグ初日

女流Bリーグ当日、香奈は普通に会場に向かった。香奈は別にリーグ戦を勝ち上がりたいとは思っていない、ただおじさまに頑張つている姿を見てもらいたいだけだった。

会場の雀荘に到着し、中に入ると男一人とキョウウカが慌ただしく動いていた。

この光景は研修の時に見たから、別に驚かなかつた。

「香奈ちゃん」「ひちよ」

その声はなおだつた。なおはリーグ戦だからと正装で居た。そばにはリカも居る。香奈は安心してなおの側に行つた。

リカは香奈が普段着のままリーグ戦に来てることに呆れた。

「香奈ちゃん、あちらで受け付け済ませて来なさい」

なおが香奈を受け付けに案内する。香奈は受け付けに向かい、受付の男子プロに

「い、小林香奈です」

と震えるよつと云つた。

「小林さん、団体の会費五千円とリーグ戦参加費の五千円で合わせて一万円です」

と受けの男は香奈に言った。それを聞いて香奈は驚いた。研修は三千円だったのにいきなり一万円にまで跳ね上がったからだった。

しかし、香奈は不服だと言えるわけもなく、黙つて財布の中から一万円札を出して、受け付けに払った。

男はそれを受けとり、香奈に

「小林さん四卓ですから、そこに座つてお待ちください」

と香奈を案内した。男に言われ香奈はあわてて四卓を探す。四卓は見つかったが今度はどの椅子にすわればいいかわからなかつた。

香奈が四卓の前で立ち往生している間に、他の三人が座つたので香奈は残りの一席にちょこんと座つた。

第115話 女流Bリーグ開始

香奈は借りてきた猫のようになつて席に座つておとなしくしていた。なおり力も指定の卓の席に座り、開始を待つた。

そして女流Bリーグ戦の立ち会いの責任者がマイクを持ち、挨拶を始めた。

挨拶を聞きながら、香奈は配られた用紙に目を通して、ルールを確認する。

しかし、初めてなので香奈はルール、マナーを十分に理解できなかつた。

立ち会い側に立ちながら、キヨウカは香奈を監視する。立ち会いなどしたくなかったが、香奈を見ると危なかつしくて、逆に立ち会いに来てよかつたと思つた。

挨拶が終わり、各卓で場所決めが始まった。香奈は場所の決め方がわからない。他の同卓者達は香奈のことを無視して、各自に決まつた場所に移動した。

香奈は申し訳なさそうに空いた席に座る。するとすぐに親決めが始まつた。場所決めで東を引いた者がサイロのボタンを押した。

そして起家マークが香奈の目の前を移動する。香奈は何が起こつているかまったくわからない。ただおとなしく黙つたままだつた。

「それでは始めてください」

立ち会いの責任者の命令で女流Bリーグがスタートした。

「 よろしくお願ひします」

卓上で同卓者達が挨拶した。遅れながらも条件反射的に香奈も

「 よろしく、お願ひします」

と同卓者達に挨拶した。この香奈のどんな動きに同卓者達は怒りに達していた。

まして、香奈はリーグ戦なのに正装しないで普段着のまままで遊びに来ているように見えていた。

キヨウカは香奈が心配だったが、いつもと変わらない感じで打ち始めたから、安心して他の新人の様子を見ることにした。

香奈はおじさまが来ていれば緊張したかもしれないが、観戦者はおじさまどころか誰も居なかつた。

女流Bリーグはプロ野球でいえば一軍みたいなものだから、人気がなく観戦者が少なくても仕方がなかつた。

と言いたいところだが、Aリーグも観戦者が少ないか、一人も居ない状態だつた。

麻雀は囲碁や将棋と違つて観戦には不向きなゲームである。まともに観戦するなら選手の真後ろに立たなければならず、それは競技の邪魔になる行為だつた。

テレビとかならば遠くからカメラを使い全部のシーンを撮れるから、番組として成り立つことは出来るが、一個人では観戦の能力には限度があり、まともに観戦が出来なかつた。

それで観戦者が無理に観戦しようとしてマナー違反を起こし、トラブルになり、観戦を禁止する団体も出てきた。

そして一番の問題は、リーグ戦の結果を知りたがるファンが、あまりにも少ないことだつた。

女子プロ達の雀力がとてもプロといえるレベルではなく、大多数の

麻雀ファンにリーグ戦 자체価値が無いと思われているからだつた。

観戦者が居ないから、リーグ戦は団体内のパワーゲームが幅を効かせていた。

香奈はおじさまが居なくてもいつ来るかわからないと、気を落とさずに麻雀を打つた。

そして順調にあがりを重ね、先輩プロ達の不評を買つていた。

女流Bリーグは降級が無く、最終順位も次のリーグではリセザートされて全員横並びになるから、意味が無かつた。

順位はすべてポイント数で決まるから、昇級を狙う人達は、素点を叩こうとしていた。

しかし、香奈は昇級に興味が無く、自口流の麻雀で安くあがり、先輩方のあがるチャンスを潰していた。

オーラス、逆転を狙う先輩方を尻目に香奈は安く手を仕上げ、トップを取つた。

香奈は点棒を受け取つた後、目の前に集計用紙を投げられた。驚き戸惑う香奈に先輩方は

「あんたトップなんだから、あんたが集計しなさい！」

ときつゝ言い放つた。香奈は集計などしたことが無いから、どうしていいかわからない。他の一人も香奈に教えようとはしなかつた。

この時、キヨウカは他の卓を見ていて、香奈のトラブルには気付かなかつた。

そしてそばに居た立ち会いの男子プロは、女達の争いに巻き込まれないように、戸惑う香奈を無視した。

香奈はおどおどしながら、目の前の集計用紙を見ながら、何も出来なかつた。

「いいわよ、私がやるから」

一人がそう言って香奈から集計用紙を取り上げた。

「集計出来ないならもうトップを取らないでくれるー。」

このきつい一言を香奈は震えながら受け入れる。

「で、あなた何点?」

集計用紙を持った先輩プロから嫌みに質問されて香奈は

「よ、四万、三千、八百」

香奈はびくつきながら点棒を申告した。

集計しようとした先輩プロは香奈がトップなのが気に入らず、香奈の点数を過小に記入しようと思つたが、

他の一人の目があるから、いじらずそのまま記入した。

集計が終わり、次の対局の準備が始まる。同一メンバーで四回対局するから、香奈はこの三人からは逃れられなかつた。

場所決めから始まり、香奈は震えながら空いてる席に座つた。

そして対局が始まり、香奈はいつも通り手を進める。

キヨウカは香奈を見るために香奈の後ろに回つた。

(いつもの香奈じやない！)

キヨウカは香奈の異変に気付いた。いつもなら鳴く所を鳴かずに見送つたからだつた。

香奈が鳴かなかつたから対面がテンパイしリーチをした。香奈はリーチに対してベタ降りした。

(鳴かないから対面が張つたじやないの！)

キヨウカは心の中で怒つた。その局は流局し、香奈はノーテン罰符を払つた。

次の局、香奈は面前でテンパイした。

(香奈、リーチしなさい。リーグ戦なんだから点数を稼がないと駄目でしょー。)

キヨウカは心の中でそう思つ。キヨウカは対局者に中立な立ち会いだから、香奈にアドバイスしたくても出来なかつた。

しばらくして当たり牌が出た。香奈はそれをスルーして手に手を伸ばした。

(ちょっと、何やってんのよー当たり牌が出やつになつた)

香奈の見逃しに、キヨウカは思わず声が出てやつになつた。

香奈は何事も無かつたように自摸り、そして切つた。キヨウカはずっと香奈の後ろに張り付く。

一回戦の半荘が終了した。香奈はあがるビリバカノーテン罰符すら貰おうとしなかつた。

キヨウカはすぐに香奈を問い合わせたかった。しかし、立ち会いは対局者と戦術面での話が出来ないから、ぐつと我慢した。

第119話 なおの説教

香奈は同卓者に“集計が出来ないならトップを取らないでよ”と言わされたから、震えながら点棒を貰う行為をすべて拒否していた。

キヨウカはそんなことがわからず、香奈を助けることが出来なかつた

四回戦すべてが終わり、各自のポイントが集計されていく。一回目とはいえ、みんな順位に一喜一憂していた。ただ香奈はその中に入らず、一人ぽつりと座つていた。

そしてキヨウカは全体の集計に追われて、香奈に何も問い合わせすことが出来なかつた。

終わりの挨拶が始まり、立ち会いの責任者から次のリーグ戦の日程の話があつて、リーグ戦は閉会した。

キヨウカは香奈に先程の事情を聞こうとしたが、香奈は会場を走つて出でていった。

キヨウカが驚き戸惑つていると後ろから

「ちょっとあんたたちー。」

と大きな声が聞こえてきた。声はなおだつた。

キヨウカがあわてて後ろを見るとなおは続けて

「香奈は新人なんだから、あんたたち先輩がやさしく教えないと駄

「いやじゃないの！」

と先程の香奈の同卓者を叱り付けた。

「なあさん、リーグ戦ですよ。勝つ為ならあれくらい普通ですよ」

と同卓者の一人が反論する。それを聞いてなあは

「何言つてんのよーあんたたち競技プロならフェアに闘いなさいよー！」

とさらに怒鳴り付けた。しかし同卓者三人は聞き入れようとはせずに

「なあさん、あの子に指導している人誰ですか？悪いのは私達ではなく、あの子を指導している人ですよ」

と憮びれるごとなく反論した。

第120話 梅やむキヨウカ

三人の同卓者達は、自分達は悪くないと、香奈を指導している人に責任転嫁をして、非を認めようとしなかつた。

「あの子の指導をしているのは私と事務局長の斎藤さんです。指導に文句があるなら私に言いなさいよ！」

三人はその声に驚き、後ろを見た。キヨウカだつた。

三人はキヨウカを恐れて何も言えない。一人があわててその場を離れると、他の一人もあわててこの場を離れた。

「なお、ありがと」

キヨウカがなおに先の三人を叱つてくれたことにお礼を言つ。

「こちらこそキヨウカさんがいてくれたお陰で。何かリーグ戦で殺氣立つて、さつきみたいに新人を虐めてまで勝とうとする人が居るのよね。ほんとキヨウカさんが居なかつたらどうなることやら」

となおはほつとしながらそう語つた。それを聞いてキヨウカは斎藤に済まないと思つた。

斎藤がキヨウカに立ち会いを頼んだのは、そういう先輩面をして新人に冷たくあたる輩から新人を守るためだつた。

斎藤は、モラルの無い一部の女子プロのことをキヨウカに言えず、ただキヨウカに期待して頼んでいた。

キヨウカは聞いてなかつたとはい、期待に応えられなかつたことを悔やんだ。何より一番守らなければならない香奈を守れなかつたことを激しく後悔した。

キヨウカは香奈を心配しながら会場を後にした。友人と待ち合わせしていたから。

そしてサンフラワーにも寄らずに待ち合わせの場所に向かつた。

待ち合わせの場所は「やはぎ」という居酒屋だった。

キヨウカは店に入り、待ち合わせの相手を探す。

「キヨウカ、こっちよー」

奥からキヨウカを呼ぶ声がした。その声に反応してキヨウカは声のする場所に移動した。

「遅いわよ、もう勝手に注文したから」

そう言つてキヨウカを出迎えたのが、新鋭の女性週刊誌「CanDo」の編集長の長沢知美だった。

キヨウカは長沢のわがまますっぴりに呆れながらも、黙つてテーブルを挟んで長沢の対面に座る。

「キヨウカ、何かいいネタ無い? キヨウカのことでもいいから

長沢は早速自分の雑誌に使えるネタが無いかキヨウカに聞いた。

「あるわけないでしょ!」

キヨウカは長沢の唐突な質問に呆れてそう返した。

「キヨウカは結婚しないの?」

長沢はキヨウカにしつこく質問をする。キヨウカは呆れながら

「そんな暇なんか無いわよー店のこととか、新人の面倒まで見なきやならないのに」

と返した。

「へえ、キヨウカも新人の面倒を見るんだ」

と長沢は変に感心する。キヨウカは愚痴をこぼすように、香奈の面倒をみてることを事細かく説明した。

「ちょっと、それいいじゃないー取材してもいい?」

田を輝かせて長沢がキヨウカに迫る。キヨウカは何で香奈なんかと呆れながら

「べ、別に良いわよ」

と取材を了承した。

「ありがとう、じゃあ明日編集部員をサンなんとかに派遣するから」と香奈が女性週刊誌に取材されることになった。

その頃香奈は部屋で、中学時代に登校拒否になつたことを思い出しながら、一度と女流リーグには参加しないと涙を流しながら思つていた。

第122話 求める香奈

記事のネタを確保した長沢は、上機嫌でキヨウカとくだらない話を始めた。

キヨウカも落ち込んだ気分を一新するつもりで、話題に付き合って、その場を楽しく過ごした。

店を出て、長沢と別れたキヨウカはふと香奈が気になつた。

（明日、サンフランシスコに来るのだろうか？）

香奈がショックでプロ団体はおろか、サンフランシスコまで出て来なくなるのではと、不安になつた。

ただキヨウカは、香奈にはプロは無理だから、いのまま普通の生活に戻つた方がいいと、寂しく感じながらも、香奈の幸せを願つた。

次の日の朝、キヨウカはなんだかの風紀を正すつもりで、サンフランシスコに向かつた。

店に着くなり、店内に厳しい日を光らせる。まず店内からと、キヨウカは自分自身に厳しくした。

気合を入れて、卓の出入りのノートを見ると入り口のドアが開き

「お、おはようございます」

と弱々しい声が聞こえてきた。香奈だった。香奈は今日も休まずサ

ンフラーに来たのだった。

キヨウカは驚き香奈を見る。香奈はいつもより生氣が無かつたが、目は誰かを探すように生氣があつた。

(「の子、おじさまを求めてここに来たのね）

キヨウカは香奈を見てやう感じた。昨日のリーグ戦の事で斎藤が香奈を心配して、ここに来るかもしないと、キヨウカは思い香奈にしてリーグ戦に出てくれればいいから

と香奈を諭した。

第123話 心配される香奈

香奈はキヨウ力にまたリーグ戦に出るようになされたが、まだ不安で返事が出来なかつた。

そんな弱々しい香奈にキヨウカは

「リーグ戦に出て来なかつたらおじさまが心配するわよ。」

とさらりと香奈を説得した。 そうキヨウカに言われて香奈はあわてふためき

「わ、私出ます。リーグ戦に出ます」

とキヨウカに訴えた。 それを聞いてキヨウカは安心して

「大丈夫よ。 あなたの籍は残つてるから心配しなくてもいいわよ」

と過剰に心配する香奈をなだめた。

「おはようござります」

間の抜けた挨拶でリカが入つて來た。 リカはいつもと変わらぬ香奈を見て、 昨日は大したことなかつたのかと感じた。

リカの視点からは、 昨日の事は、 香奈が走り去つていき、 その後なおが香奈と同卓した三人を叱り付け、 その後キヨウカも三人を叱つていたように見えていた。

リカからしてみれば香奈がプロとしてリーグ戦に居る方がおかしかった。だから香奈と同卓した三人に、一人に怒られたことに理不尽なことでだろうと、少なからず同情を感じていた。

しばらくしてドアが大きく開き

「香奈ちゃん！」

と言つてなおが入つて來た。

（え、なおは今日は休みなのに）

キョウ力はなおの突然の來訪に驚いた。なおは香奈を見つけると

「香奈ちゃん大丈夫？」

と心配して香奈に声を掛けた。香奈は突然のことにびっくりいいかわからない。香奈は戸惑いながら何も言えなかつた。

第124話 なおの指導

突然の「」と「」。惑つ香奈になおは

「香奈ちゃん、あいつらには私とキョウウカさんが怒鳴り付けといったから、安心してリーグ戦に出てきてよねー出てこないとおじさまが心配するわよ」

と香奈を励ました。

（私と同じこと言つてる）

と近くで聞いていたキョウウカは苦笑した。

「香奈ちゃん、またトップを取つた時の為にお姉さんが集計の仕方を教えてあげる。キョウウカちゃん、香奈ちゃん借りるわよ」

となおはキョウウカに聞いた。

「いいわよ」

とキョウウカが返事をして、香奈は店の奥でなおの指導を受けることになった。

（なおつたら、休みなのに香奈の為に来ててくれたのね）

キョウウカはなおを見つめながら、自分の代わりに香奈を指導してくれるなおに感謝した。

「お、香奈ちゃん偉いなあ。また勉強か？」

密の山下が一人を見て、そうキョウウカに話し掛けた。

「ええ、トップを取つたらトップ者が卓上の集計をするから、香奈も集計出来るようにならないと」

とキョウウカが答える。

（何で香奈ばかり）

リカは香奈ばかり誉められるのを不快に思つた。リカからみれば、香奈はリーグ戦が始まる前から、その程度のことぐらい努力してマスターしていない怠慢な人物だった。

「Jんにちわ、C a n D a よから來ました」

一人の女性がそう言つてサンフラワーに入つて來た。キョウウカはすぐ取材だとわかり

「どうぞ」

と言つて雑誌の記者を受け入れた。

「あの、小林香奈さんはどちらの方でしょうか?」

女性記者は香奈が誰かわからないから、カウンターに居たキョウウカに聞いた。

「ちよつと待つてください!」

キョウウカは女性記者にそう言って、取材を待つてもらい、香奈に取材を受けるかの確認を取ることにした。

「香奈、女性向けの雑誌からあなたに取材が来てるけど、取材を受ける? 嫌なら取材を受けなくてもいいわよ」

とキョウウカは奥でなおに指導されている香奈に言った。

そう言われて香奈は返答に困った。香奈は事態をまったく理解してなくて、どうしていいかわからなかつた。

「香奈ちゃん、よかつたじゃないの! 取材を受けなさいよ。雑誌に載ればおじさまが香奈ちゃんを見つけてくれるかも知れないわよ」

となおが香奈にアドバイスをした。それを聞いて香奈はキョウウカに

「わ、私、取材受けます」

と言つてそわそわしました。

「じゃあ取材してもいいわよ。記者さん、香奈はこの子です」

キヨウカは記者に香奈を教え、カウンターに戻りだした。

（斎藤さんが女性週刊誌なんか読むわけ無いでしょ）

キヨウカは記者と擦れ違しながら、香奈の態度に苦笑した。

記者は香奈に軽く会釈して、自分の名刺を渡した。香奈は名刺を受け取りながら緊張して震えていた。

対人恐怖症と取材の緊張感で香奈の心臓は、今にも破裂寸前だった。

記者は経験が浅いせいか、香奈の状態にまったく気付かず、普通に質問を始めようとしていた。

第126話 質問攻め

記者は落ち着きながら香奈に

「麻雀のプロになつた動機は？」

と聞いた。簡単な質問だけ香奈は

「お、お、おじさまが麻雀のプロだから、わ、私も麻雀の
プロに……」

と最初から言葉に詰まつた。

記者は香奈が喋るのを待つたが、香奈は緊張の為何も言えず、下を
向いた。

「それじゃ、私帰ります」

なおはそのままキョウウカに挨拶する。

「なお、ありがと」

そうキョウウカはなおに返した。

「いえいえ、私がもつとしつかりして、先に教えていれば、香奈ち
ゃんにあんなつらい思いをさせなかつたのに」

と自戒した。

「指導は私の担当だから私が悪いのよ」

とキョウカはなおをかばつ。しかしながら

「キョウカさんは全体のことやお店のこともあるし、それに後輩の指導は先輩の務めですから」

とキョウカに言つた。キョウカはこれ以上なおに言ふはず

「今日は本当にありがとうございました」

となおに礼を言つた。

香奈は何も言えず黙つたままだった。記者は新に質問をすることにして香奈に

「おじさまはどんな人ですか?」

と聞いた。その問いに香奈は

「お、おじさまは太陽です。私達を照らしてくれる太陽です。だから私は太陽の子供です」

質問に香奈はそう強く訴える。ただそれでは記者は香奈とおじさまの関係がわからない。記者は香奈に

「おじさまはあなたにどんなことをしてくれましたか?」

と聞いた。その問いに香奈は

「し、質問に・・・」

と香奈はテンパつて言葉が続かなかつた。

第127話 取材が中止に（前書き）

スマートフォンに変えたら、操作に手惑い、執筆が遅れました。

第127話 取材が中止に

香奈が取材を受けているのを見てリカはため息を付きながら
「あたしも取材が来ないかな」

とつぶやいた。それを隣で聞いていたキヨウカはリカに

「あんたは麻雀で取材を受けなさい」

となだめた。そう言いながらキヨウカはふと香奈の方を見る。遠くから見ても香奈は緊張して、落ち着きが無く、キヨウカから見ればとても危なく感じた。

キヨウカはすぐに香奈の元に行き、心配して香奈に

「どうしたの？」

と声を掛けた。

「わ、わたし、おじさまに質問して、お、おじさまは……」

と香奈はキヨウカの問いに答えて無く、拳動がおかしかった。キヨウカはすぐに駄目だと思い

「すみません、この子知らない人が苦手で、うまく話せないから、取材はこれで終わらせて貰えないでしょうか？」

と記者に頼んだ。記者も香奈の状態からいつて取材にならないから

キヨウカに

「一度編集長に相談してみます」

と言つて携帯を取り出して電話した。その間、キヨウカは香奈を記者から引き離し、落ち着かせることにした。

「香奈、取材が駄目になつても気にしなくていいわよ！おじさまが女性週刊誌なんか読む訳無いから、雑誌に載つても載らなくとも一緒によ」

とキヨウカはそう言つて、香奈が取材が駄目になつても落ち込まないようになつた。それを聞いて香奈は安心したが、すぐには動悸が治まらず、顔を真つ赤にして何かを聞いたそのを感じだつた。

「OK出たので、取材は中止します」

記者はそつキヨウカに言つて取材を中止した。

取材が中止になりキヨウカはほつとした。ただ香奈は事情がつまく飲み込めずに、緊張したままだった。

「『めんなさいね、この子も取材のこと今日初めて知ったくらいで、心の準備が出来て無かつた物で』

とキヨウカは記者に謝罪し、編集長の長沢のことなどの世間話を記者として、記者はサンフラワーを後にした。そしてキヨウカは一人取り残された香奈を見て

「香奈、取材は中止にしてもらつたから、もう大丈夫よ。だから落ち着いたら、いつものように仕事に戻つて頂戴」

と言つてカウンターに戻つた。香奈は取材が中止になつたことが、少しショックで落ち込んだ。ただ今回は中止だけど、また次に取材が来ると勝手に思い、今度はうまく受け答え出来るようになろうと思、少しあは元気が出で來た。そしていつもの香奈として仕事に励んだ。

次の日の朝、キヨウカは憂鬱だった。団体の主催するイベントの七夕杯が近付いてたからだつた。七夕杯とは男子プロと女子プロをグループ化して両グループから一名選出して決勝で対戦するイベントである。

予選はトーナメント制で女子プロは人数が少ないので一戦で終わるのだが、店の主力メンバーがその日は抜けることになるから経営的には痛かった。

キヨウカも参加したい性質だから、他者の参加を止められなかつた。
キヨウカは各自の七夕杯の出欠を確認をする為にサンフラワーに向
かつた。

「おはよー！」

キヨウカはサンフランキーに入ると朝の挨拶をして、カウンターに入り、売り上げを確認する。

「おはよー！」
「おはよー！」

遅れてなおが入って来た。

「ねえなお、あなた七夕杯に参加する？..」

キヨウカがなおに聞く。

「参加するする。だからキヨウカさん、その日は休ませてください」

と言つてなおは七夕杯に参加を表明する。

「分かったわよ、なおは参加ね」

とキヨウカはなおが出るに丸をした。

「リカちゃんも参加するのかなあ？」

「ああ、あの子も気分次第だから」

「リカちゃんが出たら枠は一名だけになっちゃうから」

となおはり力の強さからいつて、決勝に残るのは確実だと思つていた。

「おはよー」^{ハヤヒ}こます

眠たそうにリカが出勤してきた。

「リカ、あなた七夕杯に出る?」

キヨウカがリカに七夕杯の出欠を聞いた。

「出でいいなら出ますけど」

「じゃあ参加ね」

キヨウカはリカにも参加の方に丸をした。

(後は香奈ね)

キヨウカは香奈にも七夕杯の出欠の確認を聞くことにした。

しばらくして香奈が出勤してきた。

「お、おはよー」^{ハヤヒ}こます

相変わらずか弱い声での挨拶である。

「香奈、あなた七夕杯に出る?」

キヨウカが香奈に出欠を聞く。香奈は七夕杯のことが分からず、答

えよつがなく黙つた。ぐずぐずして答えられなに香奈に對してなおが

「香奈ちゃん、決勝まで残れば男の人達と打てるから、おじさまと打てるかも！」

と香奈を煽つた。

「なお、おじさまが決勝に残ると限らないのだから、変なこと香奈に言わないでよ」

となおの言つたことに對してキョウウカがなおを叱つた。

「うーん

すぐになおがキョウウカに謝つた。

「わ、私出ます」

香奈が力強く參加表明をした。

「おじさまと打てるとは限らないわよ！」

キョウウカがあわてて香奈に問い合わせ。しかし香奈は黙つたまま參加を辞退しなかつた。

香奈が参加を辞退しないので、キヨウカはもつ何も言わずに香奈を七夕杯に参加させることにした。香奈はおじさまと打てる打てないよりも、おじさまに頑張ってる姿を見てもらいたくて、七夕杯に参加することにしていた。

キヨウカは三人が出るから、自分は店の為に参加を見送りうつと考えたが、香奈の面倒を見なければならぬいと思ひ、

「あたしも参加するから、その日はもつお店をお休みにしようかしら」

と他の三人に笑顔で言った。

「チームサンフラワーとしてみんなで頑張りましょう!」

トリカが嬉しそうに掛け声を上げたがなおが

「あら、対戦したら全員敵なんだから、リカちゃんといえども容赦しないわよ」

と笑顔でリカをけん制した。

「やうよ、同卓しても仲良く出来ないから。組んでると思われないよう」、同卓したら落とす気持ちで打つて頂戴」

とキヨウカは本気でけん制した。そんな三人の会話を無視して香奈は、ただおじさまに見てもうつことを考えていた。

キヨウカは香奈が七夕杯に出ることになったので、練習の為にと本走をせることにした。

（香奈も一応プロなんだから、いつまでも甘やかす訳にはいかないわ）

そう思い、キヨウカは次空をわいつな卓を見つめた。

「一番卓ラストーー！」

なおがそう叫んで、一番卓が終わったことを告げ、次のゲームの準備を始めた。なおは空いた席に本走として入る為に、自分の籠を取りにカウンターに来た。

「あそこには香奈を入れるわよ」

キヨウカはカウンターに来たなおにそう伝えた。

第131話 進歩した香奈

なおはキョウウ力の判断を不思議に思いながらも、香奈に本走をさせ
るのもいいかなと思い、素直に頷いた
。

香奈は誰かがそこに入ると思い、次の半荘を始める為の準備をして
いたが、誰も来ないので香奈は戸惑つた。誰も入らないので、リカ
があわててそこに入らうとするときョウウ力が

「香奈、そこに入つて」

と香奈に指示をした。突然のことでの香奈は驚き戸惑い続けたが、な
おが香奈の籠を持ってきて

「香奈ちゃん、麻雀を打つて頑張つて勝つてね

と香奈を励ました。なおに言われて香奈はやつと本走をすることにな
なつたことに気付き、席に座つた。とはいえたが香奈は本走だと分かつ
て無く、言われたから麻雀を打つだけだった。

香奈が座ると客達はすでに準備を終えていて、三人ともよろしくお
願いしますと挨拶をした。

「よ、よろしく、お、お願ひします」

あわてて香奈も挨拶をする。その光景はとてもプロとは言えず、キ
ヨウカは香奈を見て呆れていた。

対局が始まると香奈は常連に指導される初心者みたいに、周りに気を使わながら打ち始めた。そんな香奈をキョウ力は後ろで見ていたが、他の卓で動きが有り、香奈を見ている余裕が無かつた。

香奈は最初こそ動作が緩慢だったが、いざ麻雀が始まると普通に打っていた。店ではり力の後ろで見て居たり、家で練習をしていたから、問題無く麻雀の方は進行した。

香奈は麻雀の勝ち方を理解した訳では無かつたが、うまく打ち回して、現時点でトップだった。

第132話 無事本走を終えて

現時点ではトップの香奈だが、他の客達も負ける為に打つてゐるわけではないので、逆転をしようと攻勢に出て來た。

今まで香奈の鳴きに振り回されていたが、今度は他の客達が鳴いて仕掛け、あがりに向かい始めた。

香奈は上達したとはいえ、まだまだ他の人達には及ばないから、ずるずると点棒が削られ始めた。

南三局、ついに香奈はトップの座から落ちた。香奈は逆転されたとはいえ、さほど氣にしていなかつた。香奈からしてみればトップで無くとも良くて、ただおじさまに頑張つてゐる姿を見せられれば良かつた。負けたら自腹で勝つたら利益になることも理解して居なくて、ただ平然としていた。

キョウウカは香奈が勝とうが負けようが関係なく、問題無く卓が進めば良いと思つていて、實際、何も問題無く進行してはいたから、香奈のことを見ていなかつた。なおも香奈がラスを引いても、給料で十分払えるからと全く氣にしていなかつた。

南四局、香奈はいつもと変わらず、ただあがることを考え、鳴いて手を安くしてあがつた。香奈は手作りを知らないから、手成りで仕上げ、一着を自力で決めた。

清算になり、香奈はトップ者から勝ち分に相当する分のカードを貰つた。これはカウンターで換金できる代物だと香奈は知つてはいたが、メンバーは換金していなかつたから、香奈からしてみればただの力

ードだった。

香奈は知らなかつたが、このカードの増減をメンバーは給料で清算しているから、今回の勝ちで香奈の給料は増えていた。

一戦目に入ろうと香奈は次の半荘の準備をし出すと

「香奈、いいわよ」

とキョウウカが言って香奈を卓から外して、自分がそこに座つた。

第133話 必死な香奈

香奈は連續して打ちたいと思つていなかつたから、他のメンバーと同じように自分の籠を持つてカウンターに行つた。

カウンターでおは香奈から香奈の籠を受け取り、中身を確認した。

「香奈ちゃん、良かつたね。中身が増えてるからおじさまが褒めてくれるわよー。」

となおはそう言つて、香奈にねぎらいの言葉を掛けた。それを聞いて香奈は、なおが確認した籠を持って、再び麻雀を打とうとした。

しかし、すべて埋まつてゐるから香奈は打つことが出来なかつた。それでキョウ力に代わつてもらおうと、キョウ力の後ろに張り付いた。それを見てなおがあわてて香奈をカウンターに連れ戻した。

「香奈ちゃん駄目でしょ、他の人の迷惑になるでしょー。」

そう言つてなおは香奈を叱る。しかし香奈は

「わ、私、もっと増やしたいです」

と反省の色無くなおにやつ訴えた。その態度になおは呆れて

「香奈ちゃん、私達メンバーはお密さんに氣持ち良く打つてもうれるように仕事をしてゐるのであって、カードを増やす為じゃないのーおじさまだつて香奈ちゃんがカードを増やす」といつも、お密さんの為に仕事をする方を願つてゐるわよ」

と香奈をたしなめた。そう言われて香奈はもつカードを増やそうと
考えずに、いつもの位置に戻り、待機を始めた。

なおもこれ以上香奈に言つことが無いので、普通に業務に戻つた。
キヨウカは一連の出来事を麻雀を打つていたから気付かず、なおも
話すほどのことでもないからと、キヨウカに黙つていた。

第134話 失敗した香奈

キヨウカは新たに来店したお密さんを自分の席に案内してカウンターに戻った。香奈が何事も無かつたように立っているので、キヨウカは安心して業務に戻った。この時香奈はおじさまに褒められなくて、何か仕事をしたかったが、何をしていいかわからず戸惑っていた。

いつもなら勝手に考えて行動するが、さすがにキヨウカに怒られまくりで、香奈は自発的に行動しなくなっていた。それで香奈はキヨウカに命令されるのを待っていた。

しかし、キヨウカは香奈に頼む仕事が無く、逆に動いて欲しく無いという気持ちが強かつたから、何も命令しようとはしなかった。

卓が順調に動いている間はメンバーは仕事が無く、なおもりカもカウンターのそばから離れなかつた。

「ホットブラック！」

お密さんからコーヒーのホットのブラックの注文が来た。

「はい！」

そのなおが返事をして、コーヒーの準備をしようとした。そして遅れて香奈がコーヒーを入れようと動き出した。突然の香奈の行動になおが戸惑い

「え、香奈ちやんどうしたの？」

と言つてなおが手を止めた。

「コ、コーヒー」

香奈がそう答えて、なおの代わりにコーヒーを入れようとした。なおは驚き、香奈の行動を見守った。

香奈はコーヒーを入れようとすると、量の加減が分からぬ。

「ちよ、ちよっと入れ過ぎよー。」

カップにインスタントコーヒーの粉を入れ過ぎた香奈をなおが注意する。その声にあわててキヨウカが飛んできた。香奈はなおに注意されておろおろになつてカップの前に佇んだ。

キヨウカは香奈が「コーヒーの粉を入れ過ぎたのを見て、顔を真っ赤にして

「ちょっと香奈ー、あなた分からぬ勝手にやらないでよ」

と香奈を怒鳴った。

「は、はい」

キヨウカに怯えながら香奈は返事をする。

「なお、急いで代わりのカップに入れて出してあげて」

そうすぐにキヨウカはなおに指示した。なおはキヨウカが何故ここまで怒るか分からず戸惑いながらも新しくコーヒーを入れて、お客様の所に持つて行つた。

キヨウカが激しく怒つたのは、香奈が眞面目にメンバーをやりたくて「コーヒーを入れようとしたのではなく、またおじさまに入れてあげる為の“練習””といつ氣持ちでやつてこると思ったからだつた。

おじさんの為という不純な動機で大事なお客さんに迷惑を掛け、キヨウカはそのことに腹が立つていた。

この光景を遠くから見ていたリカは、キヨウカがさすがにやり過ぎだと思いながら、香奈の仕事意識を持とつとしない感覚に嫌悪感を抱いていた。

不機嫌なキョウウカとキョウウカに怒られていつも位置に縮こまつて立つて いる香奈をなおは何とかしようと香奈に

「香奈ちゃん、何で私の代わりに「コーヒーを入れよ」としたの？」

と香奈に聞いた。その質問に香奈は

「み、みんなが喜ぶよつな」とをすれば、お、おじさまが喜ぶと思いまし・・・」

と必死になつて答えた。その香奈の返答になおは自分自身の言い方が悪かつたから、香奈が突飛的な行動したのだと反省した。

第136話 競争心

なおは香奈に「いいえば良いか少し考えた。その間香奈はおどおどしながら

「私、仕事でやるよ」なりたいです」

となおに訴える。なおは突然の香奈からの訴えに驚いて

「香奈ちゃん、今そのままいいわよ。なんで仕事が出来ないのよ」と香奈は

とあわてて香奈に聞く。その質問に香奈は

「リ、リカさんは私より後に入ったのに、私より仕事が出来ます」

トリカより遅れてることを苦痛に思つてことを叫んでいた。

(私はあんたと違つのだから)

近くで聞いていたリカは香奈の叫びに苦笑した。香奈の叫びを聞いてなおは香奈に

「別にリカちゃんと競わなくともいいわよ。キョウカさんもそこまで香奈ちゃんに期待していないし、おじやおも香奈ちゃんがここに置いてもらえるだけで喜んでるわよ」

と香奈に言った。キョウカはなおの意つことを聞きながら、置いてくるところより、面倒を見てくれば頼まれてるだけなのよねと、一

人でつぶやいた。

（斎藤さんならたしかに香奈をサンフランシスコに置いてこぬことを、顔には出さないけど喜んでくれてるはず）

「とにかく」キョウカはそう考えた。そしてキョウカの中でおじ様＝斎藤がますます強くなつていった。

香奈はなおの言ひ「」とを相変わらず自分に都合の「」によつて解釈して、おとなしくなり「」つもの香奈に戻つた。

女性週刊誌のCANDAYの発売日になり、キョウカは前のことを見失して雑誌を手に取つた。そして表紙を見てびっくりした。香奈の「」が大きな記事になつていた。

（なんで、香奈への取材は没になつたはずじゃ・・・・・・）

キョウカはあわてて香奈の記事を探した。

第137話 偽りの記事

キヨウカはあわてて香奈の記事の部分を探して見つけた。そこには香奈のことが記事として詳しく書かれていた。

（ちょっと何が現代版あしながおじさんストーリーよー。）

キヨウカはこの記事のキャッチフレーズを苦虫を噛むようにして読んだ。記事は香奈が謎の人物“おじさま”を求めて雀荘で働く姿を美化して伝えていた。そしてキヨウカが一番驚いたのはキヨウカの談話だった。

（私にこんなこと書いつてないわよー。）

キヨウカにとつて寝耳に水のようにキヨウカの談話がそこに書かれていた。キヨウカは怒りを込めてそれを読む。そこには

「香奈の一途な思いを支援したくて私の雀荘で働くことを認めました。香奈のおじさまに会えるまで頑張ろうとこう直向きな努力をみんなが好感を持って、みんな心から“香奈頑張れ”と応援します」と書いてあつた。

（もう勝手に何でも書いてえー!どうなつても知らないわよ）

キヨウカは雑誌の編集長の長沢に怒りを込めて、雑誌が読者から信頼無くして売れなくなつても知らないからと、もう協力しないと怒りを込めて雑誌を元に戻した。

キヨウカは気付かなかつたが、この香奈の記事で女性週刊誌CAN DAYの売り上げが過去最高を更新していた。

サンフランシスコでは少しづつだが香奈は本走回数が増えていった。本來プロならばお密さんより強いから、麻雀を打てば打つほど稼げるはずだが、実際は稼ぐどころか負けて給料がマイナスになっていた。プロですらそうだから、素人メンバーも本走に入りたがらなかつた。

キヨウカはそんな事情から香奈だけを優遇する訳にはいかず、限定的だが香奈にも本走をさせていた。

第138話 2回目の女流Bリーグ

キヨウカは香奈が負けて給料が無くなるようなことを避けたかったが、他のメンバーのことを考えれば、香奈にも打つてもうらうしかなく、仕方なくキヨウカは香奈にも本走をさせることにした。

香奈は店の事情から貰えた実戦のチャンスを嬉しく思い、一回一回大切に打った。そのおかげで香奈はキヨウカの心配をよそに普通に麻雀を打てるようになつていった。

二回目の女流Bリーグの日が来た。キヨウカはこの日は自主的に立ち会い人に応募していた。前回の時のように香奈を怯えさせるようなことは、団体的にも人間的にも繰り返したくなかったからだつた。

他の女子プロ達からは香奈のよつな素人がこの場に居るのはおかしいと不満が出ていたが、キヨウカの睨みが利いているから、誰もそのようなことを言う者は居なかつた。むしろ逆に同卓してポイントを稼ぎたいと思つ者ばかりだつた。前回の香奈の負けっぷりはそういう不埒な連中にはおいしく思えていた。

ただ香奈は前回と違つて、麻雀のレベルが上がつていたから、不埒な連中の思い通りにはならなかつた。

女流リーグは普通に始まり、キヨウカはすぐに香奈の居る卓を見た。香奈との同卓者達はキヨウカに見られていることを意識し委縮していた。逆に香奈はキヨウカに見られるのは慣れているし（慣れているというよりまったく気付いていない）から堂々としていた。

そんな状態だから、香奈の卓は香奈が有利に展開し、香奈がトップ

になつた。対局終了後、各自申告用紙に自分のポイントを書いて香奈に渡す。香奈は全員のポイントを確認して

「あ、あつてますね」

と言つて同卓者達に確認を取る。同卓者達が領き、最後に礼をして対局は無事終わつた。キヨウカは香奈がうまく出来たことにホッとして香奈から用紙を回収する。香奈はキヨウカに怒られなかつたら自信を深めた。

第139話 記者の来訪

キヨウカが香奈の成長を嬉しく思つてゐる時に突然の訪問者が来た。

「すみません、CANDAYですけど・・・」

女性週刊誌の記者が香奈を取材しに女流リーグ戦に来たのだった。キヨウカは記者の声を聞くと反射的に

「只今対局中だから取材は御遠慮願います」

と言つて記者の取材を止めようとした。キヨウカはせつかくつまくやつてゐる香奈に動搖を与えたくないし、何よりもまたあること無いこと書かれるのが嫌だった。

「対局が終われば取材が可能になりますから、とりあえず今は見学していくください」

香奈への取材を止めようとするキヨウカを尻目に、女流リーグの立ち会いの責任者がそう記者に話しつけた。

（な、なんてこと言ひのよー）

責任者の発言にキヨウカは怒りを込み上げた。しかし、キヨウカはこの場では責任者に何も言えなかつた。

「女流リーグもやつとメテイアに注目されるようになつたか」「いやつて少しずつ認知度がたかまればいいですね」

立ち会い者同士がそんな会話をする。

（リーグ戦なんか注目されてないわよ。注目されてるのは香奈だけ
よ）

キョウウカは事情を知らずに能天気に会話をする男の立ち会い者達にいら立っていた。リーグ戦は一回戦目が始まり、香奈は記者が来たことに気付かず、そのまま対局に集中していた。

キョウウカは記者の動向が気になつて立ち会いに集中出来ていなかつた。ただ対局がスムーズに進行し立ち会いが必要無いまま、香奈は二回戦目もトップで終わった。

「戦田が終わり始めたから、キョウカは各卓の対局者達から用紙を回収し始めた。記者は対局が終わったと思い、立ち会いの責任者に

「対局が終わったのですか？」

と聞いた。その記者の問いに責任者は

「いえ、まだ一回戦が終わった所です」

と言つて説明した。それを聞いて記者はまだ取材できないと思い、動かなかつた。

「小林香奈さんはどんな状態ですか？」

さりげなく記者がそう責任者に質問した。

「小林さんですか、彼女はプロとしてまだまだでして、この間も先輩方が彼女の出来の悪さに冷たく当たつて、高木さんと水野さんが小林さんをかばつて逆に注意してましたよ」

と責任者は答える。これを見て記者はそのことを忠実にメモした。キョウカはそんなやり取りが有つたと知らず、リーグ戦の進行を進めていた。

香奈は一戦田もトップを取れて、おじさまに褒めてもうれると浮かれていた。逆に同卓者達は香奈にこれ以上走られると困ると思い、三戦田は三人とも香奈をマークすることにした。

三戦目が始まり各卓でサイコロが振られる。香奈はいつもと変わらない麻雀をしようとしたが、香奈の上家が香奈に鳴かれないように牌を絞つた。それで香奈は鳴けなくて少しづつフォームが壊れ始めていた。

「チ・
「ポン！」

香奈が鳴こうとした牌に対面からポンが入った。香奈が戸惑う間に対面は牌を持って行って、自分の右に晒した。香奈の発声は遅いし、対面は無く必要が無かつたから明らかに邪魔ポンだった。キヨウカは邪魔ポンだと分かつたが、戦術的に有効だからこの行為には何も言えなかつた。

ポンをした対面を鳴いた牌を晒しながら、失敗したと思い苦い顔をした。それを見て上家と下家はほくそ笑んだ。香奈は鳴こいつとした牌を鳴かれ、どうすればいいかわからず、動搖したままだった。

対面は無理鳴きで役が無くなり、この局は放棄せざるを得なかつた。そしてこの行為が後々尾を引いて、この後も戦列に参加できる状態にならなかつた。

上家と下家は一人脱落したことを喜び、積極的に動き出した。香奈は対面の鳴きで手が進まなくなり、気持ちも動搖していて、鳴きを入れることも出来なくなつた。

香奈は三着四着と逆連帯で後半を終えた。ポイント的にはプラスだが、前回のマイナスを埋め切れるレベルじゃ無かつた。

「集計が終わりましたので、これで女流Bリーグの一回戦目を終了します。皆さんお疲れさまでした」

立ち会いの責任者の終わりの挨拶を持つて今日の女流リーグは終わつた。

「小林さん、調子はどうでしたか？」

リーグ戦が終わつたので、記者が即座に香奈に声を掛けた。突然のことでは香奈は何も言えず、ただ黙り込んでいた。キョウカは後片付けで香奈の方を見ていなかつた。

記者は香奈が何か言つのを待つたが、香奈は一言も発しなかつた。

「では質問を変えます。今日の結果をおじかめじどり報告したいですか？」

記者が改めて香奈に質問した。これも香奈には答へにくい質問だつた。前半は調子良かつたが後半は報告できる状態では無く、香奈はどう言へばいいかわからず、ただ黙つたままだつた。

記者は香奈の様子を見て、質問は無理だと思い、取材を切り上げようかと思った。その記者の態度を見て香奈はあわてて

「お、おじやまに、香奈は頑張つてますと云えたいです。」

と言つた。香奈はまた取材が駄目になつて、おじやまに香奈が駄目な子だと思われると思い、必死に記者の質問に答えた。香奈の答えを聞いて、記者は香奈の言つたことを手帳に記帳した。香奈は震えながら記者の動きを気にする。

「それではリーグ戦での先輩の当たりは厳しかつたですか？」

記帳を終えた記者がすぐに新しい質問をした。その質問を聞いて香奈は

「せ、先輩に、欲しい牌を取られました」

とおどおどしながら答えた。その答えも記者はすぐに手帳に記帳した。

「すみませーんー」の子疲れているから、もつ取材は終わらせてくれださー」

そう言つてキヨウカが取材を遮つて香奈を連れ出した。香奈は何も分からず外にキヨウカに連れて行かれた。

「香奈！勝手に取材を受けちや駄目でしょう！」

キヨウカが香奈を叱る。香奈は取材を成功させないと、おじさまに駄目な子だと思われるからと、必死に田で訴える。そんな香奈を見てキヨウカは

「香奈、勝手に取材を受けておじさまに変な風に云わつたら、困るのはあんたでしょ！」

と呆れながら香奈を叱る。それを聞いて香奈はあわてて口を塞がれ、もう取材を受けないと意思表示をした。

中で記者は香奈を連れていかれて、もつ取材が出来ないのにどうじつよつか悩んでいた。

「どうです、他にもいますから、色々質問されてはいかがですか？」

立ち会いの責任者がどう記者に話し掛けた。

「し、失礼しました」

そう言つて記者はあわてて部屋を出て行つた。責任者は意味が分からず、ポカーンと立ち止まつた。

（何で香奈ばかり？）

足早く出ていく記者を見てリカは不満を募らせていた。

文流Bリーグ戦から一夜明けた朝、キヨウカは憂鬱な感じで朝を迎えた。友人の長沢に香奈のことを教えたことが、キヨウカを苦しめることになつていていたからだつた。

雑誌絡みが香奈一人でも大変なのに、団体まで巻き込んでしまい、リカまで気分を害することになつていていた。

「実力を付けても注目してもらえない。じゃ、一体プロって何ですか！」

リカのキヨウカに向けた叫びがキヨウカの心にいつまでも響いていた。キヨウカはリカにどう言えばいいかわからず、ずっと頭を悩ませていた。

キヨウカはこのまま休みたかつたが、シフトの都合上、休むわけにもいかず寄り道せずにサンフラワーに向かつた。歩きながらキヨウカは当面の問題を片づけることに気を配つた。

リカと香奈は特別に仲が悪いというわけじゃ無かつたが、香奈が注目されるのをリカが嫉妬みたいな感情を抱いて、リカが香奈を毛嫌いするようになつてきていた。キヨウカはリカに香奈は面白おかしく注目されているだけだとつて、リカを慰めるつもりだつた。

ただそれだけでは不十分で、リカのことが注目されていない現状を改善しないことには、リカの不快感は無くならないと思っていた。

（プロと言つたつて麻雀で稼いでいる訳じゃないし、サークル程度

の活動しかしてないのに評価してもらえないわけないわよー。)

そうキヨウカは麻雀プロの現状を考え、開き直った。

悩むのを止めてキヨウカはサンフラワーの有るビルに辿り着き、エレベーターに乗った。そしてサンフラワーの有る階で降りて、店のドアを開いた。

第144話 キョウウカの指示

ドアを開けるとセレニィはいつもと変わらない香奈が居た。

「お、おはよひらいます」

香奈が小刻みに震えながらキョウウカに挨拶する。香奈からしてみれば、キョウウカは相変わらず怖い存在だった。

「おはよー。」

不機嫌なままキョウウカはそつ香奈に挨拶し、他のメンバーには普通に接して、お客様には笑顔で挨拶回りをした。

(「お子は何で休まないの?」)

カウンターに入つてキョウウカは横目で香奈を見てそう思つた。リーグ戦の次の日だからとなおはともかくリカも休みにしているのに、香奈は全く疲れを感じないまま、店内で立つていた。

「香奈ー!あんたいい加減休みなさいよ。誰も休むなと言つてないのだから、遠慮なく休んでいいわよ」

とキョウウカが香奈に強く話し掛けた。それを聞いて香奈はキョウウカの方を見て

「や、休むとおじとまが来た時会えないので……」

と弱々しく返答した。

「馬鹿ねえー。おじさまが昼間つかひ……」

キョウウカはそこまで言つて急に口を止めた。止めたのは、おじさまが昼間から来るわけ無くて、来るとしたら夜だと言つ予定だつたが、そんなこと言つたら香奈が夜に店に来て、閉店まで屈座るのが明らかだつたからだつた。

「おじさまだつて働いているのだから簡単に来れないわよ。それにあなたおじさまに仕事を休んでもらつてしまひに来て欲しいの？」

とキョウウカは言つ直して香奈に問い合わせた。

「そ、そんなこと無いです。お、おじさまに遠くから見守つてもらえるだけで十分です」

と香奈はあわてて言つ返した。

「それなら休みなさいよーおじさまもあなたが休まず働いてるって知つたら、あなたが経済的に苦しいのだと思つて心配するわよ」
「や、休みます……」

「じゃあ明日休んでいいわよ。おじさまが明日来なくてもここようにななたが明日休みだとみんなに言つとくから」

「…………」

キョウカは香奈を明日休ませる「」とした。そして香奈はこつもの位置に深刻そうな顔をして立つていた。

シフト的に香奈は居なくとも影響が無いから、簡単に休ませることが出来た。そしてキョウカ自身も明日休みで、キョウカ的には明日ゆっくり休める「」にしたかった。

香奈はおじさまに心配されていないか深刻に考えていた。おじさまに経済的に苦しいこと思われていたら、おじさまのことだから香奈に経済的な援助をしようとおじさま自身休まず働いてるかもしぬれない、おじさまにそんなことはさせたくない、香奈は今まで休まずサンフラーに来ていたのを後悔していた。

そんな感じで香奈は深刻な感じで居たから、業務には使えそうに無かった。しかし、もともと香奈を当てにしていないという感じで、キョウカは他のメンバー達に指示を出して店を動かしていた。

「香奈、もう上がつていいわよ」

そう言ってキョウカが香奈に帰らせることとした。

「お、お疲れさまでした」

か弱い声で香奈は挨拶して店を出た。キョウカは一瞬香奈がもうサンフランシスコに来ないのかと思ったが、もうひとつでもいいわといつ気持ちで気持ちを切り替えていた。

次の日の朝、香奈は普通に起きて普通に朝飯を食べて部屋に閉じ籠つた。

（おじさまが私が経済的に苦しいと思わないよ、私は休まなければならない）

香奈は自室に籠りながら、おじさまに心配を掛けないよにサンフラーに出勤しないようにしていた。

香奈は休みを貰えたとはいえ、特別にすることが無かつた。それでただひたすら麻雀の練習をすることにした。

一方キヨウカは香奈が初めて休みだからと安心して、夜更かしをして昼まで寝ていた。

「おはようござります」

サンフラーにリカが出勤してきた。

「おはよう」

なおが出勤してきたリカに挨拶をする。店内に入り、リカはいつもと違う雰囲気に気付いた。

「あれ、香奈が居ない……」

リカは驚いて改めて店内を見回す。

「あ、香奈ちゃん、今日はお休みよ。キョウウカさんが香奈ちゃんを働き過ぎだと強制的に休ませたのよ」

となおがり力に教える。それを聞いて確かにとキョウウカの判断に納得した。

リカはもう香奈に対する嫉妬の意識は無かった。昨日リカは自分が評価されないと愚痴を言う為に師匠の南に電話をしていた。その時南が言ったことは

「注目されたら稼ぎにくくなるだろー。」

その一言がリカの心に大きく響いた。リカは南みたいにフリーだけで食えるプロになりたいから、その一言には值千金の価値が有った。（プロだもの、稼いでるのが目立つたら、稼げなくなつて食えなくなつちやうわよね）

リカは一人そう思い、南の言つことに納得していた。

第147話 ねじれの正体

「やつなんだ。香奈ちゃんが休みなら俺も休めば良かつた」「明日は香奈ちゃんが出勤するから、明日も田舎サンフリワーに来てくださいね」

「なおやん営業ですか」

なおと密との樂しい会話を聞きながらリカはふと我に帰った。

（何で香奈ばかり人気あるのよー私の方がかわいいのに）

リカは麻雀プロとして香奈には対抗意識を持たなくなつたが、女として対抗意識を持ち始めていた。

キョウカは家のことをやつながら、ふと思いついたように張り付いた。そしてしばらくしておじさまのＨＰの「希望の丘」に辿り着いた。

（この文章の書き方は齊藤さんだわ。やはりおじさまは齊藤さん）

キョウカは香奈の慕つおじさまが齊藤だと確信していた。

（香奈におじさまが齊藤さんだとばれたら、どんなに齊藤さんに迷惑が掛かるか、そして週刊誌にも）

キョウカは長沢におじさまの正体がばれることを恐れた。そして掲示板をなぞりながら香奈の書き込みを見つけた。

（これで香奈はサンフリワーに卓掃したいと言つて来たのね）

キョウカは香奈の書き込みを見てそう感じた。それは香奈がおじさまに卓掃をするか聞いていた時のことだった。

CANDAY編集部

「長沢編集長、おじさまのHPを記事に掲載しますか？」

そつ番奈の記事の担当の女性記者が長沢に聞いた。

「駄目よ掲載したら。おじさまが誰かわからない方が、読者に神秘性をもたらせて効果的なんだから。それよりいいの拾つて来たわね。是非ともこれを記事のタイトルにしなさい！」

と長沢は女性記者にアドバイスをした。長沢は香奈を扱うことでの次の号の売り上げが伸びるのを確信して微笑んでいた。

次の日の朝、香奈は悩んだ末にサンフランワードに出勤することにした。一日しか休まなかつたなら、おじさまは香奈が経済的に余裕がないから、休みを取ろうとしないと誤解されると、逆に香奈の方が心配してサンフランワードに向かつて行つた。有る理由の為に。

キヨウカも一日しか休まずサンフランワードに向かつた。今日はなおが休みでシフト的に人が足りなかつたからだ。この場合もキヨウカは香奈を人数に考えていないから、香奈が出て来ようが休もうが関係無かつた。

キヨウカが出勤するといつものように香奈が居た。香奈はキヨウカを見るなり

「わ、私がおじさまに、お金持ちだと思つてもらえるには、どうしてらしいでしようか？」

と必死に質問した。

「はあ・・・・・」

突然の変な質問にキヨウカは驚き戸惑つた。しかし香奈は真剣なまなざしでキヨウカを見つめている。キヨウカはどう言えばいいかわからず投げやり的に

「普通に働いていれば給料入つてくるから、おじさまも心配しないんじやないの！」

と答えた。普段のキヨウカなら「お金持ちなら働かなくていいのだからズーと休んでいたら」と答えていただろう。しかしおじさまの正体と齊藤と断定していたから、キヨウカは齊藤が心配しないように香奈を休ませないようと考えていた。

それに昨日の店の様子をなおに電話で聞いた時、香奈が居なくてお客様さん達が香奈のことを心配していたと誇張的にだが聞いていたので、ビジネス的にも香奈を休ませない方がいいと思っていた。

第149話 キョウカの心境（前書き）

投稿ミスで先週投稿したつもりが投稿になつていませんでした。

第149話 キヨウカの心境

香奈はキヨウカの返答を聞いて

「あ、ありがとうございます」

と礼を言つていつもの定位置に戻つた。そんな香奈を見てキヨウカは（こんな子に頼らないといけないっておかしい話よね）

と思つて溜め息を付いた。

雀荘の現状は厳しい状態が続いていて、各雀荘も集客で苦戦していた。キヨウカが青田買いの感じでリカを獲得したように、各雀荘も人気女子プロの確保に力を入れていた。

人気者を育成するより、他からスカウトのような感じでゲストなり従業員として雇う方が簡単で楽だからと、各雀荘は育成をしないで人気女子プロの確保に力を入れていた。

それで人気女子プロは色んな雀荘にゲストとして顔を出すようになり、希少価値が薄れていった。そして教育がされないし、何もしなくても高いゲスト料が当たるならと人気女子プロ達も技能習得を怠つたから

、ますます人気女子プロの価値が落ちていった。

そして人気女子プロの集客力が落ちて、各雀荘は経営不振に戻つた。それでも雀荘側は他に効果的な集客方法が考え付かないから、未だに人気女子プロの確保に力を入れていた。

そんな状態だからキョウカはリカにも各雀荘からゲスト依頼が来るのを分かつていたし、実際に色々来ていた。ただリカは南の教えを守り、すべてのゲスト依頼を断つていた。

（リカがゲスト依頼を断るのが分からぬけど、そのおかげでリカ目当ての客はうちに来るしかないから、お店的にはすごく有り難いのよね）

キョウカはリカがサンフラワーだけでしか働かない事を嬉しく感じていた。

第150話 齋藤の苦悩

「小林香奈さんですか、小林さんは次は六月四日の七夕杯の女流予選に出ます」

「ではその日にお待ちしております」

斎藤は団体の事務局長として電話で女性週刊誌の取材の依頼を受けていた。

（女性週刊誌から取材を受けるなんて、小林さんは本当はどんな人なんだろ？）

斎藤は香奈のことを不思議に思いながら、奥さんに買つてきてもらった女性週刊誌『ANDAY』の香奈の載つている記事の場所を読んだ。

（「これは……」）

斎藤は記事を読んで深く驚いた。

（小林さんは僕を追いかけて麻雀プロを田指したなんて……）

香奈の目的を知つて斎藤は驚くだけではなく、深い苦悩に陥つた。

（これからは小林さんと接するのを控えないと。僕がおじさまだと小林さんが気付いたら、小林さんはきっと絶望してプロを辞めるかもしれない）

斎藤は香奈にあまりにも頼りない男が、香奈の尊敬してやまないおじさまだと知られることを勝手に恐れていた。

いつもして斎藤は香奈と接觸するのを避け、香奈が参加する団体の行事に出ないことにした。

七夕杯の女流予選の日がやって来た。この日はサンフランキーから全員参加したから、サンフランキーは営業時間を大幅に短縮して営業することになった。

今回はキョウウカも参加者だから立ち会いは他の者が務めた。七夕杯はワンデイトーナメントで「一回戦」とに名卓から上位一名が勝ち上がっていく仕組みになっていた。

それで協力し合つて一位一位を取るようなハ百長的行為を警戒されていて、キョウウカはなお、リカ、香奈とは同卓を避けたいと思つていた。

第151話 キョウカの開き直り

香奈は文流リーグ戦で慣れて来たから、何事も無く普通に受付で参加費を払い、適当に空いている席に座り、香奈自身が入る卓が決まるのを待つた。

七夕杯の文流予選は参加者32名で卓の割り振りを決める事になつていて、その割り振りも全員同じ扱いだから、抽選で割り振りが決められた。

キョウカは8卓しかないから、なお、リカ、香奈の誰かと同卓になるのは仕方ないと思っていた。当然3人の内の誰かと同じく勝ち上がりが必然的に同卓しなければならないから、同卓を避けるのはあきらめていた。

キョウカは名前を呼ばれて2卓に座つた。そして後から香奈も名前を呼ばれてキョウカと同じ2卓に座つた。

（え、香奈と同じ…………）

キョウカは香奈と同卓になつて驚いた。改めて香奈と同卓してキョウカは大事なことに気付いた。香奈には八百長とかの概念が無く、キョウカにはまつすぐ打つて来るということを。

周りから見ればキョウカの立場は香奈にキョウカに振り込む事を強要出来るから、香奈がただ普通にキョウカに振り込んでも、キョウカが勝ち上がる為に振り込ませていると誤解されるかもしかつた。

香奈に八百長的な行為が出来るわけがないと、訴えてもそんな理屈は通用しないとキョウカは思つて、香奈からあがらなければいいと考えた。

しかし、それはそれで香奈を勝ちあがらせるための八百長と受け止められるから、香奈から当たらないうことも出来なかつた。

キョウカはどうにもなれと開き直つて予選に挑むことにした。

逆に香奈の方はキョウカと同卓になつてまた怒られないかと怯えていた。

サンフラワーの本走では、意図的に香奈とキョウカは同卓しなかつたので、一人が同じ卓に着くのは初めてだつた。香奈は田の前のキョウカの不機嫌そうな顔を見て、怯えて震えていた。

大会の説明が終わり、場所決めが始まつた。キョウカがサイコロを振り、香奈はそれをただ見ているだけだつた。

場所が決まり、香奈はいつものごとく残つた牌を取り、空いた席に座つた。それだけでも動きが遅いからキョウカに怒られるか心配だつた。

親決めのサイコロが振られ、香奈が起家になつた。起家マークが香奈の所に配置されたから、香奈は自分が親だと分かり、対局を始める挨拶が終わるとすぐにサイコロを振つた。

キョウカに怒られないか心配しながらの香奈だつたが手牌を見て麻雀に集中しだした。キョウカも香奈を無視して麻雀に集中し対局が始まつた。

一局目から香奈の鳴きが入つた。キョウカは香奈にあがらせるよつな打牌を避けようとしたが、両脇が甘いから、香奈が一局目からあがつた。

「ツ、ツモ、四千オール」

香奈が親満をツモあがる。キヨウカはすぐに四千点を香奈に渡した。香奈はそれを怯えながら受け取り、続く一本場が始まった。

半荘は勢いづいた香奈が独走して、キヨウカが何とか一位に付けてオーラスになった。

キヨウカはこれをあがれば一位だが点数持ち越しで無いから、ただあがるだけで第一戦を通過できるから充分だと考えていた。

第153話 決定戦前

自摸を繰り返し、キョウカはテンパイして七萬を切った。その時香奈の態度があやしく、何かを言いたそつだつた。キョウカは即座に気付き

「香奈、あがりならあがりなさい！でないとあなた失格になるわよ」

と香奈に忠告した。香奈は申し訳なさそうに

「口、ロンハ千」

と宣言した。キョウカは黙つて香奈に点棒を渡し、半荘を終らせた。

今放銃でキョウカは三位に転落して、予選通過は出来なくなつた。香奈もそれに気付いてキョウカからあがるのをためらつたのだった。

香奈はキョウカに怒られると震えていたが、キョウカは香奈を無視して他の人達の状況を見に行つた。

「あーん、一回戦で負けちやつた」

なおがキョウカにそづついた。

「キョウカさんばどひでした」

なおがキョウカにキョウカの結果を聞いた。

「私も負けたわ。香奈は一回戦を通過よ」

「リカちゃんも一回戦を通過だから、チームサンフラワーは一人勝ち残りね」

キヨウカはなおのチームサンフラワーという名称に苦笑しながら、香奈に負けたことに関する麻雀の難しさと奥深さを噛み締めていた。

キヨウカとなおが見守る中、香奈とリカは一回戦も突破して二人とも決定戦に残った。女性週刊誌の記者は、香奈に取材したいが、香奈はキヨウカに言われた通り取材を拒否し、キヨウカも取材に協力しなかつたから、とりあえず予選の結果だけをメモしていた。

キヨウカは決定戦で一人が協力し合う形にならないか心配したが、リカは香奈に強烈な対抗心を抱いていて、香奈と口を聞こうとすらしなかつた。

七夕杯の女子部門の選抜の決定戦が始まることになった。香奈は決定戦まで残れたことで十分に思い、キョウウカに全く怒られなかつたから、安心して緊張などしていなかつた。

他の三人が緊張する中、香奈は消化試合みたいな感覚で起家として賽を振つた。リカは香奈には負けたくないと一人香奈に敵愾心を持ち、香奈の方を睨むように見ていた。

（リカ、何を考えているの、平常心で居なさい）

キョウウカは闘争心剥き出しのリカを見てそう思つた。

「リ、リーチ」

最初から調子がいいのか香奈が先制リーチをした。それに対してもリカは危険な所を切り出す。他の同卓者が驚く中、リカは次々と危険な所を通す。

「ツモ、千、二千」

リカが香奈のリーチを搔い潜り、三ハンの手をツモあがりした。香奈はあがれなかつたことを悔しがらずに黙つてリカに一千点を渡した。

（香奈、この場合は五千点棒でしょ！）

キョウウカは香奈に注意をしたかつたが、アドバイスになるといけない

かつたので、黙つてているしかなかつた。この時香奈は千点棒一本で払つた為、手元には千点棒が一本になつた。逆にリカはリーチ棒を含め、九本と多過ぎな状態になるから、香奈が五千点棒で支払い三千点をお釣りで貰つべきだつた。

続く東二局、リカは親番で四千オールをツモあがりしてリードを広げた。リードを広げて上機嫌なまま、リカは一本場の賽を振つた。

香奈が無欲無心のまま、鳴きながら手を進める。リカは親番を死守しようと積極的に攻めた。

第155話 攻守逆転

リカは点差をさらに引き離そうとリーチを掛けた。

「リーチ」

そう言つてリカは千点棒を卓に置く。

「ロ、ロン、3900は4、4200」

香奈がリカの切つた牌でがつたのだった。リカはよりによつて一番振り込みたくない香奈に振り込んでしまつたから、悔しさをにじませながら、香奈に点棒を払つた。香奈はそれをゆつくり点箱に仕舞い、次の局に移つた。

（いつもの冷静なりカはどうしたのよー十分過ぎるほどリードがあるのだから、落ち着いて打ちなさいよ）

キヨウカはリカのことを心配して、心の中でアドバイスを送る。香奈はリカからあがつてトップが近付いたが、全く嬉しいと思つていなかつた。何故なら決勝に残れただけでおじさまに褒めて貰えると思ひ、勝ち上гарことを全く考えていなかつた。

焦つてフォームを崩したりカと対称的に伸び伸びと自由に打つ香奈。その二人の差を明確に表すように同卓者がリーチをした。

リカはそのリーチに対して、突つ張れず、安全牌を切り出して降りた。逆に香奈は暴牌と言えるくらい、好きにいらない牌を切つた。リカは香奈に合わせて安全になつた牌を切つて行く。

リカは香奈に助けてもらっているような状態を恥じたが、振り込んでトップから降りる方を極度に恐れて、なりふり構わず手を壊して安全牌を切つて行った。

この局は両者とも点棒を減らさずに終わったが、勢いを失つたりかは、香奈が伸び伸びと打つのを見ながら、半荘が終わるまでの感じでトップを守りうつともがいていた。

第156話 リカの勝利

香奈はただまつすぐ打つていただけだったが、それが他者のあがりを妨げ、結果的にリカをも助けることになっていた。

香奈は勝ち残ることを考えていなかから、打点を高くする気は無く、すぐに鳴いて手を進めた。その鳴きが他者の勢いを止め、打点が低いからリカは追い込まれながらも逆転のチャンスを得ることになった。

オーラス、打点は低かつたが他者のリー棒を得て、香奈がトップになっていた。リカは一位だからこのまま終わっても決定戦は通貨だが香奈に負けたくないという気持ちが逆転を狙っていた。

香奈は勝ち残る気は無かつたが、トップになつて勝ち残れると思うと、緊張して気が動転して、フォームを崩してしまった。普通なら鳴いて終わっていたのを、思わず声が出無くてスルーしてしまい、局が長引いた。

おかげでリカが間に合ひ、リカは勝負した。

「リーチ」

リーチと言い千点棒を卓の上に置く。香奈はもう怖くて動けない。ただリカのリーチに対して降りるだけだった。

数順後

「ツモ！」

逆転だった。会心のあがりでリカがトップになつた。点数的に香奈は一着に終わり、決定戦は終了した。

負けて落ち込む香奈になおは

「香奈ちゃん良かつたわね、七夕杯の決勝に出れるわよ」

と声を掛けた。香奈はなおの言つことをいまいち理解できていなかつたが、決勝に出れるなら負けてもおじやまに褒められると勝手に思い、嬉しくなつていた。

リカは決勝に出れる」とよりも、香奈に勝てたことが嬉しくてしばらくのことを喜んでいた。

七夕杯予選が終わり、女子プロ側からはリカと香奈が決勝に出ることになった。

次の日、キョウカは香奈を休ませ、自分自身もサンフランキーを休んでいた。

起きた後、キョウカは女性週刊誌のCANDAYが発売されていることに気付き、次はどんな記事を書いたのか気になって、家のことを放り出して書店に向かった。

書店に着き、週刊誌を手に取り、問題の記事を見る。記事を読んで顔を青ざめ、CANDAYを持ってあわてて書店を出ようと/orして、代金を払わなければいけないことに気付いてカウンターに向かった。

「三百五十円です」

そう店員に言われ、キョウカはすぐに金を出して、CANDAYを持ってサンフランキーに向かった。

サンフランキーに着くなり血相を変えて店に入る。メンバー達は突然のキョウカの来訪に驚いた。

「キョウカさん、どうしたの？」

「おが驚きキョウカに問う。

「なあ、これ見てよ！」

キョウカはあわてて香奈の記事の誌面を開いてなお見せる。やがて

おじさまに香奈は頑張つてますと伝えたいです。

と書いてあった。

「香奈ちゃん、うるさいやなー。」

やつ語つてなおは微笑みながら香奈に感心する。

「やじじやないわよー! 此処読んでー!」

キョウカがなに指で読んで欲しいことを指示する。そこには

香奈さんは対局中に、先輩に欲しい牌を取られるとこう嫌がらせを受けながらも、おじさまに心配を掛けまいと、嫌がらせのことは黙つて耐え忍び、おじさまに頑張つていることを伝えたいと健気に訴えています。

と書いてあった。

「これじゃ私も香奈ちゃんに嫌がらせしてくると思われるのかな?」

となおは記事の記述を読んで不快になつた。

「せうよ、私達が香奈に嫌がらせをしたり思われて、女子プロ全体のイメージが悪く思われちゃうのよー。」

キョウカは語氣を荒げてなおに訴える。

「これ、香奈ちゃんは悪くはないよね。香奈ちゃんは何も分からず記者の人に語つたみたいだから」

そう言つてなおは香奈をかばう。

「もう香奈に取材を受けさせないようになってしましょー。記者に好きなこと書かれたら、香奈が団体に屈らなくなつちやうから」

「せうよね、香奈ちゃんが悪くなつちやうから」

なおはそう返事をし、機嫌の良くならな¹キョウカは怒りのやりとりを探した。

キョウカが記事で騒ぐ中、雑誌は香奈の記事の効果で売り上げがかなり伸びていた。

女性読者には麻雀界といつ真新しい感じの世界で、香奈が悲劇のヒロインとこう表現の記事の書き方に読者はかなり興味を持って読ん

でいた。

そして「この人気に話題が無くて困っているテレビ局が取り上げ始めた。

香奈は、自分自身の発言でそんなことになつては知らずに、P
Cの前でおじやまに七夕杯の決勝に出られることを報告しようか悩
んでいた。

香奈はすぐに報告しようとおじやまのサイトを開いたが、緊張して
掲示板に書くことが出来なかつた。

おじやまに存在を知られることを無意識に恐えて、手が止まつてい
た。

第159話 喜べない香奈

香奈はおじさまに知られるところよりも、見られる方に怯えていた。見てもらいたいと思いながら、いざ見てもうひとつしたらい、緊張して見て欲しいと頼めなかつた。

香奈は見て欲しいとおじさまに頼めない以上、何も出来ないから、静かにおじさまのサイトを閉じた。

齊藤は香奈の七夕杯の女流予選で決勝進出の報告を立ち会いの責任者から聞いて、我が子のように喜んだ。しかし、香奈におじさまだとばれたくないから、香奈と接することはあきらめた。

次の日、香奈は何事も無かつたようにサンフランシスコに出勤してきた。キョウカは香奈に週刊誌の記事のことを言はずに黙つて香奈を観察していた。

七夕杯の女流予選の結果は団体のホームページにアップされたから、客達も一人の決勝進出を知り、リカと香奈におめでとうと結果を祝つた。

リカは祝つてくれる客達にありがとうと笑顔で感謝していたが、香奈はおじさまに報告できなかつた以上、決勝進出は嬉しいことではなく、客達におめでとうと言われても他人事のようにならうとしたくなつた。

キョウカはそんな香奈に見かねて

「ちょっと香奈ーみんな祝つてくれてのだからお礼を言いなさい

よ

と香奈に雷を落とした。香奈はキヨウカになぜ怒られるのか分からなかつたが、言われるままありがとうと密達に言つた。普通の人達から見ればいい加減な礼の仕方だつたが、香奈のことを良く分かつている密達だから、香奈のことを怒らうとせず、温かい目で香奈を見た。

キヨウカもそのことを分かつてゐるから、キヨウカ自身が密達に感謝して礼を言い回つた。

第160話 リカの心境の変化

七夕杯の女流予選を一位で予選通過したのに、全く喜んでいない香奈を見ながらリカも一位で予選通過したのに本心では喜んではいなかつた。

リカは女流予選を一位で予選を通過したことを嬉しくて師匠の南に電話で報告した。

「あ、師匠、リカです。七夕杯の女流予選を一位で無事通過しました」

「一位じゃ無いのか。一位でも予選通過できたよな

「え、一位つて？」

「一位だとどこが悪いか分からないうから、全然成長しなくなるからな」

突然の返答にリカは分からず迷つたが、すぐに南がリカの成長の方を優先に考えていると分かり

「ありがとうございます。ほんとまだ未熟で全然至らなくて」

と南に礼を言った。

電話を終えた後には、リカはもう予選通過などじつでもよくなつていた。大事なのは強くなること、それだけだった。

サンフラワーでもリカはもう香奈に嫉妬心を抱かなくなつていた。強くなることだけ考えているリカはもう香奈など眼中に無かつた。

数日が経ち、キヨウカには新たに頭の痛い問題が湧いてきていた。テレビ局からの取材の依頼だつた。

突然のこと、キヨウカは驚いたが、依頼目的が香奈だとわかつて、なるほどと一人で納得していた。

キヨウカは週刊誌の反響でテレビまで飛びついて来たと分かると、もう呆れるしかなかつたが、テレビ局の依頼となると、血らタレント活動をしているキヨウカは立場上断れず、さすがに変なことはされないだろうと依頼を受けることにした。

第161話 テレビ局の取材

テレビ局の取材の日、香奈はキヨウカに何も聞かされずにサンフラワーに出勤してきた。キヨウカは香奈にそんな話をするといどんな行動に出るかわからぬので、普段通りで居てもらおうと取材のことは黙つていた。

何も知らずに居る香奈を見ながらキヨウカは取材班が早く来るのを待つていた。

キヨウカは店の風景をテレビで放映されるのかと考えていたら、放映されてはいけない光景が日に飛び込んで来た。カードのやり取りである。カードなら金銭のやり取りとは思われないけど、賭け事をやつしていると思われるなら問題である。すぐに放映は拒否しようと思つた。

キヨウカはすぐに店を出て、玄関の外で取材班を待つた。しばらくしてカメラマンを携えて取材班が来た。

「すみません、賭け事とか放映できないでしょ。だから店の中の撮影は遠慮して欲しいのだけど・・・」

そうキヨウカは取材班に頼み、取材班もそんな理由ならと納得し、取材は店の外であることになつた。

「ちよつと香奈、こっちに来て！」

キヨウカが香奈を店の外に呼ぶ。香奈はキヨウカの後を付いて店の外に出る。そこにはテレビカメラを持ったカメラマンとマイクを持

つたレポーターが居た。

「あなたが小林香奈さんですか？」

レポーターがマイクを持って香奈にそう質問をした。香奈は突然のことに戸惑い何も答えられない。

「香奈、テレビ局の取材だからちゃんと答えなさい」

そうキヨウカが香奈に注意する。

（しゅ、取材・・・・・）

香奈は取材と分かるとあわてて店の中に入つて逃げて行つた。

第162話 テレビの取材は中止

キヨウカは突然の出来事に戸惑いながらも、これ幸いと思い

「すみません、あの子対人恐怖症だから、テレビカメラとかで緊張しちゃって、会話すら出来ないから、今日はこれで終わりにしてもらえませんか?」

とテレビ局側のスタッフ達に頼んだ。テレビ局側はきちんと取材をしないと番組にならないと思ったが、肝心の香奈が店内に入つてしまつたら追いかけることが出来ない(店内を撮影出来ないから)ので、取材を中断し、上層部に相談してどうするかを決めることにした。

キヨウカもここに来ている人達は下つ端達だからすぐに結論が出ないと分かっていて、結論が出るのを待つた。

しばらくして、スタッフ達は片付けを始めたので、キヨウカは取材が中止になったと思い、店内に戻った。

店内には相変わらず香奈がいつもの定位置の立つていた。キヨウカは香奈を見て

「香奈、何で逃げたりしたの?」

と香奈に逃げた理由を聞いた。その質問に香奈は

「お、おじさまに変な風に伝えられないよつて、取材は、う、受けなここにしてます」

とおどりおどしながら答えた。それを聞いてキョウウカは呆れて

「香奈、テレビ局の取材はいいのよ。改変しようが無いし、おじさまもあなたが喋つてるのが分かるから。それにあなたもおじさまに伝えたいことが色々あるでしょ！」

と言つた。やうキョウウカが言つた途端、今度は香奈が店を飛び出した。

あわててキョウウカが香奈を追い駆ける。キョウウカはサンフラワーを出るとサンフラワーの外で香奈が周りをきょろきょろして何かを探しているのを見た。

第163話 キョウウカの「まかし

キョウウカは香奈がテレビ局の取材班を探しているのに気付いて香奈に
「香奈、もつてテレビ局の人達は居ないから店の中に戻りなさい！例
えテレビに出てもおじさまは忙しいから、香奈の出でこる番組なん
か見ないわよ」

と言つて香奈に店に戻るように説得した。香奈はおじさまが見ない
のならばとあきらめて店に戻つた。

店内でおじさまに向も伝えられ無くて落ち込む香奈にキョウウカは

「香奈、ここで頑張つていればおじさまに伝わるから、別にテレビ
に出る必要なんか無いわよ。そして早く一人前のプロになりなさい
！おじさまがあなたがプロに成れるように力を貸してくれたの
だから、

感謝の意味を込めて頑張らなきゃ駄目よー。」

と言つて励ました。その励ましを聞いて香奈は眼を輝かせ

「お、おじさまは私がプロに成れるようになりで～おじさまはいい
に聞かのですか？」

と真剣にキョウウカに聞いてきた。キョウウカは事務局長の斎藤がおじ
さまとの前提で香奈に語つていて、香奈におじさまの正体が斎藤だ
と言えずに、戸惑いながら

「ほ、ほら、おじさまも香奈がプロに成れるようをお祈りしてたと

思つ。だつて手助けをしたら不正行為になつて香奈が失格になつ
ちやつじやない」

と言つて「まかした。香奈は手助けが不正行為になると分かり、お
じわまは香奈に何もしていないと逆におじわまをかばせねつとした。

香奈の扱いが面倒だと感じたキョウウカは、香奈にもつゝれ以上話し
掛けないことにした。

第164話 モチベーション

また女性週刊誌「CANDAY」の発売日が来た。

キョウウカはまた香奈のことでどんなことが書かれているか気になって、書店で週刊誌を見つけ中を開いて記事を探した。

記事を見つけ、キョウウカはまた唖然とした。

正義は勝つ

香奈さんは意地悪な先輩達に勝つて、七夕杯の決勝の切符を物にしました。

と書かれていた。キョウウカとの一戦は恩返し（勝負の世界では弟子が師匠に勝つことを恩返しといつ）の一戦として紹介されていた。

キョウウカは取材拒否で、記事のネタを提供しなかつたが、向こうの方が上手で、うまく文章を書きまとめ、先輩プロ達を悪人に仕立て、香奈に同情が集まるように記述していた。

キョウウカは女子プロ達を悪く書いた記事に憤慨したが、抗議しても無駄だと分かっているから、この件についてはもう黙殺するしかないとあきらめた。

次の日、サンフラワーでは七夕杯の男子部門の決勝メンバーのことが話題になっていた。

メンバーは若手一人で、特に話題にするようなことが無かつたが、

なおが香奈に

「香奈ちゃん、おじわもは決勝に出れなかつたから、おじわもと対
戦は出来ないみたい」

と香奈に教えていた。

「わよつとなおー、そんな言い方したら香奈がやる気をなくしちゃう
でしょ」

キョウカがなおを叱る。

「うーん」

なおがすぐにはキョウカに謝る。

「香奈、おじわまは香奈が決勝で麻雀を打つのを楽しみに待つてい
るから、頑張つて来なさいよ」

とキョウカがすぐに香奈を励まして、香奈の七夕杯へのモチベーシ
ョンを上げた。

香奈は黙つていたが、田は輝いていて心はすでに七夕杯といつ感じ
だつた。

第165話 応援されるリカ

肝心の七夕杯だが、キヨウカがこの間テレビ局の取材がお流れになつたと安心していたが、あの程度でも話題の少ないテレビ局には十分で、すでにワイドショーで香奈を紹介していた。

そして香奈の演技で無い行動が視聴者の好感を呼び、テレビ局側は再び香奈を扱おうと考えていた。

テレビ局側は香奈が七夕杯に出ることを知つて、七夕杯の中継を日論み、団体に交渉して了解を取り付けていた。団体側はそのことをキヨウカに教えなかつたから、キヨウカは七夕杯にテレビ中継が入ることを知らずに、七夕杯が始まるのを待つていた。

七夕杯前日、リカも香奈も前日だからと黙つて休みが当たるわけでもなく、逆に明日休みになるからシフトに入らざるを得なかつた。

「よつ、元氣か」

リカに男が声を掛けた。

「し、師匠！」

男を見てリカが嬉しそうにそう叫ぶ。リカに声を掛けたのは師匠の南だつた。

「金を返してもらひに来たぞ！」

南はそつリカに言つ。

「え？」

リカはそんな話聞いていないとただ戸惑ひ。

「出世払いだから、明日の七夕杯で優勝したら賞金が出るだひ。その賞金で払えればいい」

と南は眞面目に語る。リカはまだ優勝していないのだと思っていひと言えばいいかわからなかつた。

「IJの人なりのリカちゃんへの応援よ」

南に付き添つて来店した美央がそうリカに教える。

「師匠、ありがとうございます」

南の真意が分かつてリカは嬉しそうに礼を言った。

リカが南のエールに喜んでいる時に、キヨウカに店の奥まで引っ張られた。

「あんた、あの男にいくら借りてるのよ?」

そうキヨウカはリカに問い合わせす。

「十、十万ほど」

リカが小声で答える。キヨウカが仕方ないわねという顔をして、財布から十万を取り出し、リカに渡した。

「給料から引いとくから」

キヨウカはリカに有無を言わざずに金を受け取らせた。リカはしぶしぶ南に借金を払いに行つた。

南は突然リカに金を渡され、驚きながら黙つて受け取つた。それを見てキヨウカは

「お一人ともせつかく來たのだから打つて行つてはいかが?」

と南と美央に言った。

「それなら大阪までの交通費を稼ぐか?」

「はい」

南と美央はキョウウカの誘いを受けて喜んで卓に入ることにした。

（はあ、交通費を稼ぐつて、こゝはそんなに甘くないわよ）

キョウウカは南の発言に呆れた。

（あの二人に打たせたら駄目！）

リカは南と美央に打たせたら、強過ぎて他のお客さんに迷惑が掛かると思った。

南と美央と他の客達で新たに卓を立てて半荘が始まった。

「あの二人に打たせたら駄目ですよ」

リカがそうキョウウカに言つ。

「何言つてんのよー払つたお金を少しでも回収しなきゃいけないじゃない」

キョウウカはそう言つてリカに反論する。

「あの二人強いからお客さんが痛い目に遭いますよ」

トリカはお客さん達の方が心配だと言つ。 そう言われてキョウウカは何も言わずに一人の麻雀を後ろから見に行つた。

キヨウカは南の打ち方を見ようと南の後ろに回ると、丁度南が七萬を捨てようとしていた。

（何でそれを切るのよ？他に使えないのが色々あるでしょ。牌効率も分からなくて打つてるの？）

キヨウカは南の打ち方に呆れて、もう見る価値が無いとその場を離れた。

牌効率から行けば七萬の方が使えたが、南は七萬が使えないことを見抜き、振り込み牌にならないように先に切っていたのだった。おかげで他家はその七萬であがるチャンスを逃し、場は別の方に動いた。

「もう駄目だこの二人には勝てないよ」

そう言って常連が席を立つた。キヨウカはカウンターで卓ごとの成績を聞きながら、そうなることをうつすら感じていたから、今更驚こうとはしなかった。

ただ南達の強さには、新たに驚きを感じざるを得なかつた。

南と美央が通しを行つてゐる氣配は感じなかつた。それはカウンターから一人の動向を見守つてゐたキヨウカが一番分かつてゐた。

二人の強さはキヨウカには分からずじまいだつた。逆に改めてリカが強いのもこの一人の指導が有つたからだと理解した。

卓が割れ、南と美央は卓を離れる。南は何気に香奈が本走しているのを見つけて後ろから見た。

(ニ) これは・・・・・

南は我を忘れて香奈の麻雀を一生懸命眺めた。その光景を見てキヨウカは

(確かに本物ね・・・・・)

キヨウカは南が香奈の実力を認めたように、南の実力をリカが本物のプロだと説明していたのを思い出し、一人納得していた。

第168話 香奈の打ち方

南が香奈に驚き注目したのは、香奈の打ち方が何気に理に叶つてい
たからだった。

香奈は手牌の複雑な変化を出来るだけ簡単に、つまり選択の幅を狭
めて簡単にしていた。

一般的には牌効率と言つて、多様な変化を求め、どんな牌が来ても
手が進むように手牌組みをするが、香奈は手役を決めて不用な物を
捨てる打ち方をしていた。

牌効率など考えてなく、南でさえ捨てるのが惜しいと手に留めそ
な牌まですんなりと切るから、南が驚き香奈を見るようになつた。

南が香奈を注視しているのをリカは香奈が変な打ち方をしていて面
白いから、南が面白おかしく見ているのだと勝手に思つていた。

「」の子も七夕杯の決勝に出来ます

そうキヨウカが南に香奈のことを教えた。

「なるほど、今年の七夕杯は面白ことになりそうだな。美央、帰
るぞ」

「はい」

美央は返事をして南と美央はサンフラワーを出た。

「ありがとうございました」

キヨウカが笑顔で一人に挨拶する。

キヨウカが見送りから戻るときリカが申し訳なさそうな顔をして立っていた。

「確かに本物のプロね。道理でリカが強い訳だ」

とキヨウカはリカに向けて一人に感心した。

「ありがとうございます」

リカは一人を認めてもらえて、嬉しくてキヨウカに礼を言った。

ついに七夕杯の日になつた。キヨウカは店を休んで先に会場入りした。

会場に入るとテレビカメラが何台か設置準備だつた。

キヨウカはDVD撮影なんて聞いてないから、何故テレビカメラがあるのか理解できなかつた。

第169話 傷心の香奈

キヨウカはテレビカメラのことを近くに居た会場係に聞いた。

「あ、あれですか、何かテレビ局の取材が入っているみたいですよ」

淡々とキヨウカの質問に答える会場係。

「え、取材はボソになつたんじゃないの?」

香奈への取材は終わつたと思つていて驚くキヨウカ。

「?・?・?・?」

会場係は何のことかわからず、何も言えなかつた。

キヨウカは今更どうしようも無いし、テレビ局なら捏造とかが無いから大丈夫だらうと、このことには言及しないことにした。

香奈は香奈で落ち着いて居られなかつた。おじさまが来ているかもしないと会場内を探し回つていた。

しかしおじさまらしき人物が居なくて香奈は落ち込んだ。

「あれ、香奈は?」

キヨウカはなおとつに香奈が一緒に居ないことを問い合わせた。

「香奈ちゃんならあいつの方に行つたわよ」

なおが観客達の方を指してキョウウカに教えた。

「何やつてんのよーあの子がおじさまと勘違いして、他人に迷惑を掛けようつなことが有つたらどうするのよ?」

キョウウカが一人をそう怒鳴りつけた。あわてて一人は香奈を探しに行つた。キョウウカもあわてて香奈を探す。

香奈はすぐに見つかった。落ち込んだまま三人の元に戻ろうとしていたからだ。

「ちょっと香奈ー勝手にどこでも行かないで頂戴」

キョウウカは香奈を見てそう叱つた。しかし香奈は

「おじさまは・・・・・」

とつぶやいてキョウウカの前を通り過ぎて行つた。

第170話 取材が続く理由

「あ、キヨウカさん、香奈ちゃんは？」

なおがキヨウカの元に戻りそう質問する。

「あの通りよ」

キヨウカが香奈を指す。そこには落ち込んだままの香奈が居た。

リカも一人の元に戻り、落ち込んだままの香奈を見て大丈夫なのかと心配した。

キヨウカは事務局の齊藤に何とかしてもらおうと、齊藤を探しに行つた。しかし、齊藤は来訪者の相手で手がいっぱいで、キヨウカは齊藤に頼むのをあきらめた。

七夕杯を観戦しようと一般人が会場に入り始めた。週刊誌だけではなくテレビの影響も有つて、観戦者は五十人を超える勢いだつた。

キヨウカが取材がボツになつたと喜んだテレビ局は折からの低予算で、ボツに出来なくてうまくワイドショーのネタとして、香奈が取材を拒否する姿の画像を使ってニュースにしていた。

その時の香奈の行動が、視聴者に本当に人見知りが激しい子と認識され、視聴者に評判が良かつた。

評判が良かった為、香奈は継続で追い駆けられることになり、今回の七夕杯の取材になつた。

落ち込んでいる香奈とは対照的に気合の入っているリカは、観戦者の人込みを見て

「師匠…………」

と叫んだ。そして観戦者達のそばに向かって走って行つた。リカは師匠である南と美央に

「来てくれてありがとうございます。ここじゃなんですから、こっちまで来てください」

と言つてキョウカ達の元に一人を案内した。

会場係は観戦者を対局者達に近付けないよう厳命されていたが、リカの知り合いならばとの場はOKした。

第171話 香奈の復活

「師匠、応援に来てくれたのですかあ？」

嬉しそうにリカが南に質問する。

「当たり前だろー。わざわざ交通費使って借金取りに来るわけ無いだろ」

リカと南は楽しく談笑する。キョウカはそんな一人のやり取りを無視して香奈の心配をした。

しかし、香奈を元気にさせる方法が見つからなくて困った。

南はふと香奈の方を見た。香奈は落ち込んでいて元気が無かつた。
南は香奈の傍により

「（）に来れない人達も応援してくれてるのだから、一生懸命頑張れよ」

と香奈を励ました。そう言って南は香奈の元を立ち去る。香奈は少しずつ元気になつて来た。

（おじさまは来ないのじゃ無くて来れないんだ！私は忙しいおじさまに来て欲しいなんてずつずつしこと考へていました。おじさまは（）に来れ無くても私のことを応援してくれています）

香奈はおじさまが応援してくれるのでからと勝手に想像して少しずつやる気を持ち始めた。

香奈が元気になつていいくのを見て、キョウウカは南の香奈への声援に激しく喜んだ。キョウウカも同じことを言おうと思えば言えたのだが、おじさまらしき斎藤が会場にすでに来ている以上、おじさまが来ていないとつぶつぶつと呟つた。

キョウウカが南の方を向きながら心の中で“ありがとう”と言つた。そんなキョウウカを見てなおが

「キョウウカさん聞いた？リカちゃんがゲストを断つてこる話

とキョウウカに話を振つた。

キヨウカはそれくらい知つてゐるとしてなおに

「知つてゐるけどそれがどうしたの？」

と逆に聞いた。

「じゃあ、リカちゃんがゲスト料を受け取らないで密打ちしてゐることも知つてますか？」

と改めてキヨウカに聞く。

「え、それどういいうこと？」

キヨウカはリカがゲスト料を受け取らないといつことに驚いた。

「ゲストとして入らないけど、お密さんとして麻雀を打ちますつてお店側に伝えて麻雀してゐるのよ」

なおがキヨウカに分かりやすく説明する。

「それじゃ負けたら白腹じゃ無い！」

キヨウカはリカの不可解な行動に激しく驚く。

「そうなの。店の人があざわざゲスト料を渡そうとしたけど、リカちゃん受けとらなかつたみたい」

それを聞いてキョウウカは啞然とする。

「何かお師匠さんに金が欲しいなら密打ちしてくれればいいだろと言
われて、リカちゃんゲストは断る代わりにお客さんとして来店して
いたみたい」

となおが説明するとキョウウカはすぐにリカの方を向き

（リカ、絶対勝ちなさいよ！私達女子プロは意識レベルが低いとか
甘やかされてるから、勝負の世界ではやっていけないと男達に馬鹿
にされ続けて来たけど、そんなことは無いとあなたなら証明できる
わ）

と強く思った。

リカは相変わらず師匠である南と談笑していた。リカはキョウウカが
思っているレベルなども「眼中になく
、ただフリーで食つていけるレベルを目指していた。

一方対戦相手の男子プロ達は、香奈とリカを見ながら嘲笑していた。

第173話 対局開始

「今日は新人だけとか、あいつらのやつてる」とはお遊びか?」

「森さん、女子なんて所詮おまま」とレベルですよー。」

七夕杯の男子プロ予選を勝ち上がつてきた森と佐々木が、女子予選を勝ち上りつたり力と香奈を見て、女子プロ達のレベルが低いと馬鹿にしていた。

「佐々木! テレビの前であいつらに赤つ恥をかかせるぞ!」

「はい、森さん」

森と佐々木は、女子プロ向けにテレビの取材が入ったと思い、それに嫉妬してり力と香奈を打ち負かそうと考えていた。

「それでは対局者の方々は卓に着いて下さい」

七夕杯の責任者がそう対局者達に呼びかける。決められたとおりり力と香奈は対面同士に座つた。七夕杯では対局者同士協力しないように上家下家と並ばないように対面に座らせる」とになつていた。

よつて場決めは無く、親決めでこの中で年長者の森が際を振つた。

五が出て森が親番になつた。東西南北の順で森、香奈、佐々木、り力になつた。

「それでは対局を始めてください」

「よろしくお願ひします！」

責任者の号令で四人とも挨拶をして対局が始まった。

まずは親番を引いた森が好調で先に聴牌した。

「リーチ」

森は自信満々にリーチと言つて、点箱から十点棒を出して卓の上に置いた。

香奈は森の待ちがわからないし、安全牌も無かつたから、ノータイムでいらない七筒を切つた。

それを見て森と佐々木は驚く。佐々木は森に向かう気も無く、ベタ降りをした。

第174話 対局中

リカは森のリーチにはノータイムで安全牌を切った。東一局から親と喧嘩するような愚を犯さず、態勢の維持を心掛けた。

ソモれずにイラつく森を尻日に香奈は普通に手を進める。香奈が安全牌を増やすから、佐々木も手を進めてしまい、香奈の切った五萬を見て

「チイー」

と言つて鳴いた。

佐々木が安全牌だと思つて一萬を河に出す。

「ロン！」

森の声だった。森はカン一萬の待ちで、裏ドラを開いて

「一2000！」

と言つた。リーチ三色裏一でマンガンのあがりだった。

佐々木は森ならばとスムーズに点棒を払い、この局で使われた牌はすべて中央に吸い込まれていった。

リカは森のあがりを見て、ほくそ笑んだ。純チャンに程遠い感じで、待ちも窮屈なカンチャン待ちだったから、たまたま運よくあがれただけで、これから森は失速していくと思っていた。

続く一本場、森はリカの予想通り、前よりも手牌が落ちていた。それでも他家よりも幾分かましで、他家達は鳴ける牌を期待して待っていた。

最初に鳴けたのは香奈だった。香奈の一鳴きが森の動きを止めることがになった。

「ロ、ロン3900は4200」

香奈が森からあがつたのだった。森はしぶしぶ香奈に点棒を払う。香奈はそれを点箱に仕舞い、牌を中央に寄せて落とした。

東一局、リカは香奈の親番を落とそうとして、最初に仕掛けを入れた。七夕杯はチーム制ではないので、リカは香奈からもあがることを考えていた。

第175話 助走

香奈は勝ち負けにこだわらずただ淡々と手を進める。リカは手が軽いことをいいことに、先に仕掛けて千点を香奈から出あがつた。

香奈は黙つて千点棒をリカに払い、リカはそれを受け取り、全員牌を落とした。

（リカ、香奈の親をわざわざ落とさなくともいいでしょ！）

キヨウカはリカの急いだあがりを不満に思つた。しかしリカはこのあがりを喜んでいた。リカが始めて美央と対戦したときも美央はリカの親を落とすのに千点の手であがつていた。

このあがりは助走をつける為のあがりで、美央はそれを契機にリカに対して優勢に半荘を進め、リカを追い詰めた。

この時リカはそんな目的が有つたとはと知らず、やることがせこいと鼻で笑つていた。

目的を知つた時は、南を師匠を仰いだ後だつた。南がリカに欲張らないで千点の手は千点であるように教え、あがることによつて次回以降の手牌の状態を良くすることが大事だと教えた。

リカは実際美央が南が言つてることを忠実に実践してることを、実際に対戦した時の記憶で思い出し、美央にも尊敬の眼差しを向けるよづになつていた。

東三局、すぐにはリカの手は良くならなかつたが、流れはちょっと

したことで変わる。森のあせつた仕掛けがリカの手牌とずれた自摸牌のマッチングをもたらし、本来あがれなかつたりカが少ないけど点棒を三人から集めることができた。

東四局、リカの親である。まだ調子が戻らないがリカは冷静にチャンスを期待して待機していた。

第176話 気持ちを込めて

場は静かに進行し、リカと香奈は淡々と手を進め、森と佐々木は高い手をあがらうとして、打牌が力んでいた。リカは佐々木の自摸切った七ピンをチャンスと見て

「チー」

と言つて6・7・8の形で鳴いた。リカはリーチを掛けて高い手にしようと思はず、牌の流れに合わせて、自然な進行をすることにした。そしてドラを引き入れて、他家が静かな内に

「ツモ一千オール」

とツモあがりをした。次も親番だからと無理な手作りをしなかつたが、面前で仕上がったからリーチを掛け、四千は四千百オールをあがつた。

親番は香奈にあがられて終了したが、トップは逆転してあとはそのリードを守るだけだった。

オーラスも終わり、第一回戦が終了した。ポイントはリカ + 24・5、香奈 + 3・1、森 - 9・1、佐々木 - 19・5と決まった。

香奈は対局が終わるとその場を急いで離れた。キヨウカは香奈の突然の行動に驚いたが、向かっている先がトイレだったから、トイレかと香奈の行動を気にすることをやめた。

一回戦が終了したが、まだ対局中に当たる為、誰も対局者達に触れ

る」とは出来なかつたし、対局者同士会話する」とも出来なかつた。

香奈はトイレの中で緊張し震えていた。おじさまが観に来ていないとほいえ、あれだけの公衆の面前では香奈は緊張してしまう。香奈はおじさまに香奈は頑張っていると伝えたくて気持ちを込めて

「おじさま、香奈は、太陽の子です！」

と小声ながら力を込めて言つた。

そして落ち着きながら一回戦田に向かつた。

第177話 香奈の反撃

香奈が戻ってきて一回戦目が始まることになった。一回戦目が最終戦でここで七夕杯の勝者が決まることになっていた。

再びリカと森が場所決めをする。リカに不運だつたのは座る場所が変わり、また一から流れを作らなければならなかつた。

席が決まり全員が着席する。今度はリカが起家で対局が始まることになった。

「よろしくお願ひします」

四人の挨拶があり、リカはサイを振つた。リカは配牌を取り、牌勢が落ちていることに不安を感じた。いつもなら別に最後はあがるのは自分だからと気にしなかつたが、今回は負けるのではと不安になつた。

今回そう感じたのは香奈の方に勢いがあつたからだつた。香奈は配牌を見るなり積極的に動こうと考えていた。

すでに勢いがなく消化試合と化していた男一人から香奈はキー牌を鳴き、リカは不安が現実の物だと確信した。リカは香奈の勢いを止める「」ことが出来ず

「ツ、ツモ、千一千」

東一局は香奈のツモあがりで終わつた。安いとはいえ高目をツモあがりしたのを見て、リカは香奈に流れが移つたことを感じた。

「香奈ちゃんがあがつたから、香奈ちゃんが逆転優勝するかも知れないわね」

なおは香奈があがつたことを喜び、傍にいたキヨウカにそう言った。

「ええっ」

キヨウカはリカが親番を失つたことが痛いと感じてなおの考えに同調しながらも、リカの頑張りを思うとどうしてリカに優勝して欲しかった。

ギャラリー達も香奈のあがりを見て、香奈が逆転優勝するかもしないと感じていた。

しかし、リカもこの程度のことは何度も経験しているから、流れを取り戻すタイミングを落ち着き、見計つていた。

香奈は逆転優勝など考えてなく、ただひたすら麻雀をすることを考えていた。それが針の穴を通すような精密な麻雀になつてすでに勢いを失つた男子プロ達から点棒を奪つていつた。

「ロ、ロン、一万一千」

香奈の親満のあがりが森に炸裂した。それを見て観客たちがざわめく。このまま順位点も加味すれば香奈の優勝である。テレビ局のプロデューサーが香奈が優勝するなら話題になると、あわててテレビカメラを回せと指示を出した。

「キョウカさん、このままだと香奈ちゃんが優勝ね」

なおはそうキョウカに話し掛ける。

「ええ」

キョウカはそれを聞き流すようにリカを応援し続けた。

香奈の逆転でもリカは落ち着いていた。連荘で香奈の親番は続くから、香奈に直撃できなくてもツモあがりすれば満貫でも一万一千の点差を縮めることが出来ると思っていた。

香奈が積み棒の百点棒を出して東場の親が続く。リカは配牌を受け

取り、満貫手をと手牌を進行させた。

そして鳴ける牌を鳴かず、我慢の連続でやつと満貫手をテンパイさせた。

(リーチしたら香奈は出さない)

リカは順田も遅いし、香奈から直撃できることを願いながら深く静かに身を潜めた。

香奈はただひたすら自分の手牌ばかり見ていたので、リカのテンパイに気付かず、何も気にせずにリカの当たり牌を河に捨てた。

「ロン、八千は八千二四」

リカの香奈からの直撃のあがりで再び順位は逆転した

第179話 リカのミス

香奈は元々トップを取ろうと思わず振り込みも問題ないと思つていつから、淡々と点棒を払つた。リカはそれを受け取りほつと一息ついた。ダメであるときは、ましてこんな大事な局面は息を殺して待つていなければならぬ。テンパイがばれればあがれるものもあがれなくなる。リカはあがることが出来てやつと息が出来た。

誰もが香奈はもう優勝できないと思われたが、それでも香奈を応援する人達の気が変わるわけではなかつた。テレビカメラのスタッフがプロデューサーがカメラを止めるとの指示をすると想いプロデューサーの方を見たが、プロデューサーはただひたすら卓上を見ていた。

次の局、香奈は何事も無かつたように手を進める。リカはそんな香奈を不気味に想い少し気が迷い始めた。そして焦りが生じ、上家の出した一萬をチーした。

「やばい、リカがミスをしたぞ」「え、何がですか？」

南がリカのミスに気付き美央に話しかけた。卓上は観客側からはわからなかつたが、リカのチーという声を聞いて南はミスだと感じ、美央はチーだけではミスだとわからなかつた。

これは鳴いたリカも後からミスと気付いた。鳴けばテンパイが早くなるがその代わり手は安くなり、打点が欲しい時に大して点棒が集められないという問題があつた。実際あがれるにはあがれたがただ一千点を加算しただけだつた。

リカのミスはその後の展開に跳ね返つてくる。リカは自然にフォームを崩していく。

場は南場になり、リカの親になった。リカはさらに追加点を叩きた
いが、配牌と自摸に勢いが無かつた。

リカはここは点棒を守るように自重しながら足を貯めるところだが、
先程の打点不足が気になつて、今回も動いた。

「チー」

カンチャンを鳴いたのだからリカはミスではないと思つていたが、
鳴かなければ手牌の変化があり、こちらの方が有利な状態だつた。

リカは知らず知らずにあがりを逃し、この局は森と佐々木が振り合
つて終わつた。

リカは点棒を失わなかつただけ良しとすべきだが、焦りが気を迷い
続けていた。逆に香奈はミスをしなければいいと、点棒を集めることを二の次に考え、結果的に失点を防いでいた。

南一局は香奈が欲無く千点をあがり、南三局に。

ついに南三局香奈の親、ギャラリー達はここからの香奈の逆転に期
待した。キヨウカはリカに優勝して欲しいが香奈も負けて欲しくな
い、どう応援すればいいかわからなかつた。

香奈は優勝など考えてなくただ無欲に手を進め、一ハンの千五百点
を佐々木からあがつた。小さなあがりであるが少しづつ差を縮めら
れるリカには心地良くない、リカはストレスが溜まる中、手順ミス

をして香奈の親番を止めるチャンスを逃した。

そして香奈はそれを生かして

「ツ、ツモ、に、一一千は一千百オール」

と再度逆転した。」のあがりにギャラリーは大いに沸く。なおは

「キョウカさん、香奈ちゃんが勝つやつ！」

とまるで自分のように喜ぶ。キョウカは香奈が勝つのはうれしいが、リカが負けるのもつらいから素直に喜べなかつた。

第181話 最終局

南二局は香奈のあがりで香奈がトップになつた。点差はリカと四千点程だが順位ポイントもあるから、次もあがれば優勝するかもしけなかつた

リカは香奈の連荘を止めれば優勝になると思い、安手でいいからあがろうとした。

両者とも配牌を受け取る。勢い的に香奈の方が有利だつた。しかしリカにはテクニックが有り、勢いが無くとも勝ちにいける力があつた。

素人のように手を進める香奈、その間隙を抜くかのようにリカが仕掛けた。

「チー」

何気ない鳴きだが、香奈の動きを止めるのに十分で、その後も鳴きで手を進め

「ロン、千は千六百」

と森からあがつた。

香奈から直撃できなかつたのが痛いが、香奈の連荘を止めたのは大きいとリカはほつとしていた。

ついに南四局、ここで優勝者が決まることになる。現在の点差なら

リカの優勝で、リカは今回も安手で終わらせるかと考えていた。

香奈は優勝とかトップとか考えずに、ただおじさまに喜んでもらえるようにミスをしないことだけ考えていた。もうすぐ半荘が終わる、香奈は「ゴールだけを気にしていた。

両者配牌を取り、思惑は違えども手を進めた。リカは前回同様に考えていたが、今度は動けなかつた。前回はうまくあがつたつもりだが、実は勢いをさらに殺していた。逆に香奈は勢いが増していく次々と暗刻が出来ていつた。

「リーチ」

香奈からのリーチだつた。リカは香奈のあがりを阻止したい。しかし鳴いて自摸をずらすことすら出来なかつた。

リカは安牌を切つて、香奈のリーチに振り込むのを避ける。しかし、リカは流れ的に香奈に勝てないと悟り

（師匠、今日は一位になります。だつてもうと強くなりたいから）

と勝ちをあきらめて手を崩した。そして香奈があがるときが来た。

「ツ、ツモ・・・・・」

と言つて香奈は裏ドラを見て点数を言おうとしたが、三人とも香奈が言つ前に点棒を出した。親が一万六千、子が八千ずつ。

香奈のあがりは役満の四暗刻だった。この瞬間ギャラリーが大きく騒いだ。試合は終わり点数が新たに集計される。その集計ももう結果がわかつていてテレビのレポーターなどがあわてて騒ぎ出した。香奈の優勝だつた。

プロデューサーはヒーローインタビューみたいな感じで香奈を取材することにして、配下に指示を出していた。その間表彰式の準備が行われ、キヨウカとなおは香奈とリカの傍に行つた。

「香奈ちゃんおめでとう！」

なおが喜びながら香奈に離し掛ける。キヨウカはリカをいたわり、香奈に何も言わなかつた。香奈は優勝したことはまったく喜んでいなかつた。むしろ無事完走したことを喜び、ほつとしていた。

表彰式より先に香奈へのインタビューが先になり、レポーターが

「小林プロ、優勝おめでとうございます。あちらで感想をお語りください」

とカメラの前を指差した。香奈は訳がわからず、その場に向かうことにした。

香奈は言われた場所にたどり着き、意味もわからずその場に立つたままだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3394e/>

太陽の子

2011年11月27日22時45分発行